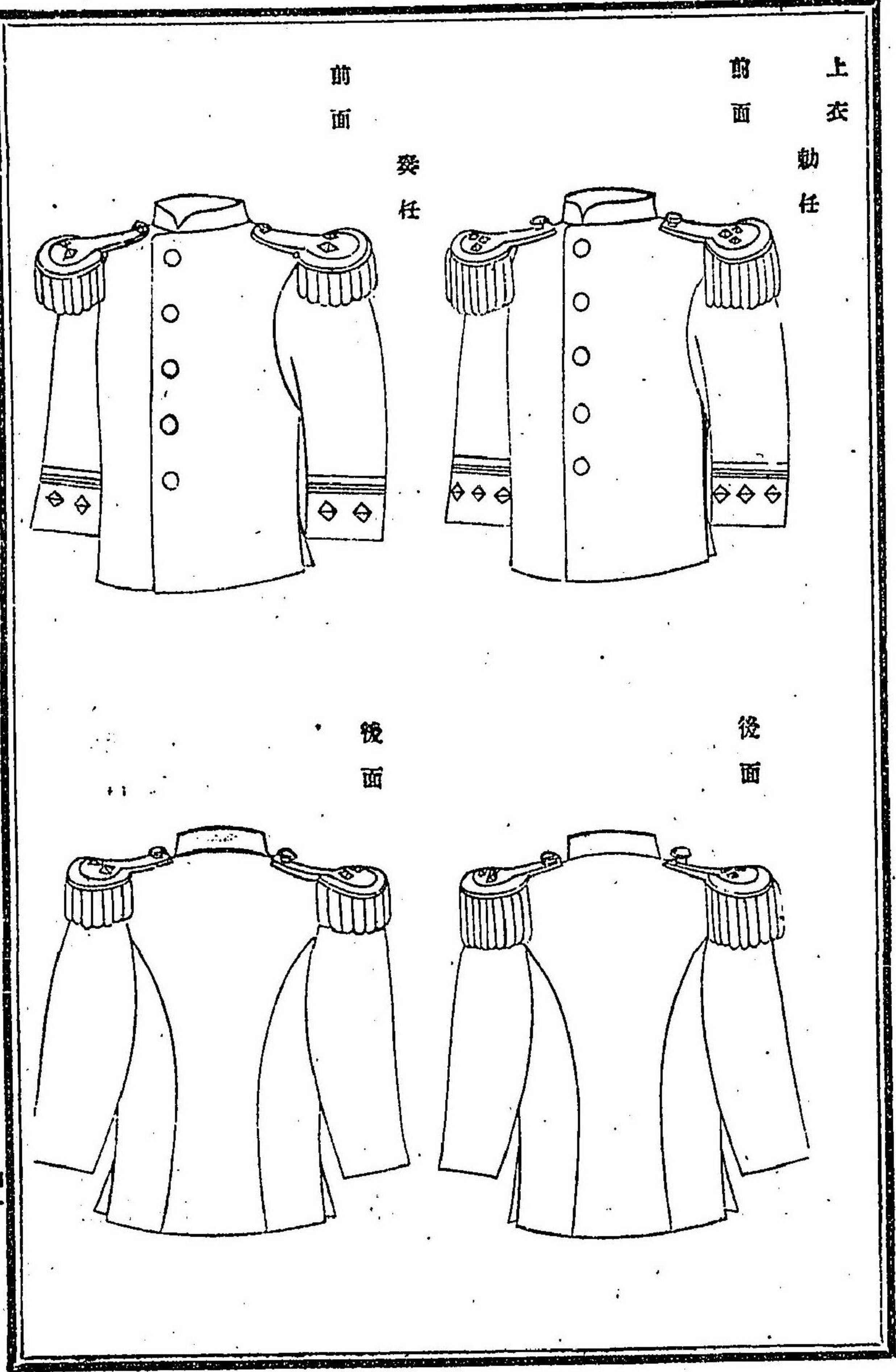
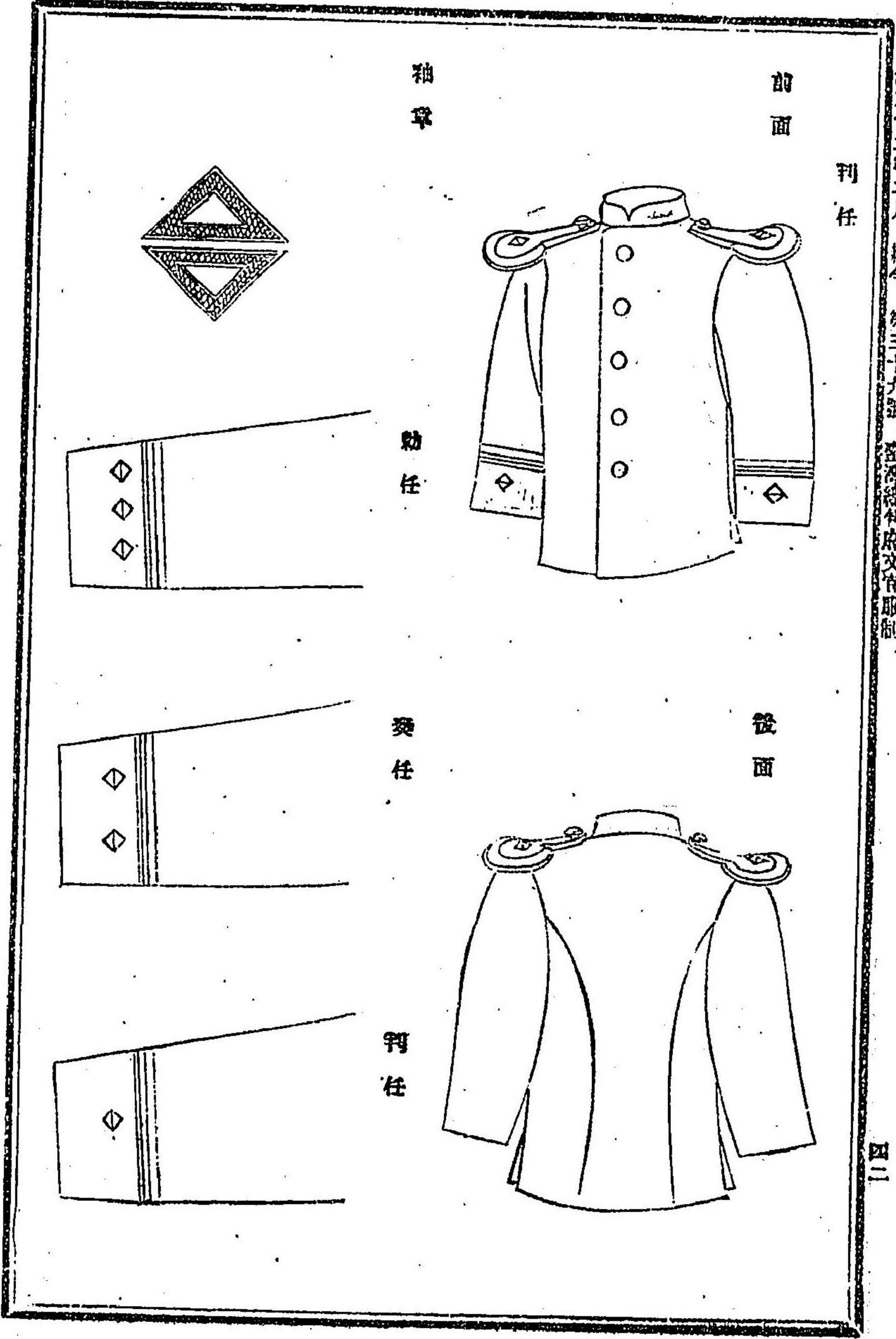


備考	外			飾	飾	佩	徽章
	雨	袖	製				
一此ノ制服ハ通常禮服ニ代用ス 一此ノ制服ニ肩章ヲ付セサルモノヲ通常服ニ代用ス 一此ノ制服ヲ通常服ニ代用スル場合ニ於テハ必要アルトキノ外領及領帶ヲ佩用セサルモ妨ナシ 一帽ハ此ノ制服ヲ通常服ニ代用スル場合ニ限リヘルメット形帽ヲ代用スルコトヲ得	紺又ハ黒羅紗	斜徑七分金糸台字章三箇ヲ附シ及麻色幅一分線一條ヲ附シニ纏フ	折襟胸二重後面ノ裾ヲ割キ後面腰部分ニ帯紐ヲ附シ之ニ七箇ノ台字章鈕ヲ附シ又前左右ノ腰部ニ各一箇ノ物入ヲ附ス	紺又ハ黒羅紗	總サ頭茶壺形金糸丸紐長サ一寸四分横徑一寸一分	柄白銀長サ五寸柄黒革包ミ長サ二尺三寸柄銀花二輪及尻金具ニハ葉付銀花二輪ヲ附シ又柄ニ台字章ヲ附ス	前章ハ全徑一寸五分ノ金具型施シ章ヲ附シ又帽ノ周圍ニ幅四分ノ無地織金線三條ヲ纏フ
	同	同上台字章二箇ヲ附ス餘ハ同上	同上	同	徑九分餘ハ同上	柄銀花輪及小尻金具ニ葉付銀花一輪宛ヲ附ス餘ハ同上	帽ノ周圍ニ幅四分ノ無地織金線二條ヲ纏フ餘ハ同上
	同上	同上台字章一箇ヲ附ス餘ハ同上	同上	同上	同上	柄黒銀柄銀輪及小尻金具ニ花葉ヲ附キス餘ハ同上	帽ノ周圍ニ幅四分ノ無地織金線一條ヲ纏フ餘ハ同上



明治三十二年二月 勅令 第三十九號 臺灣總督府文官服制



前面

四二

袖章

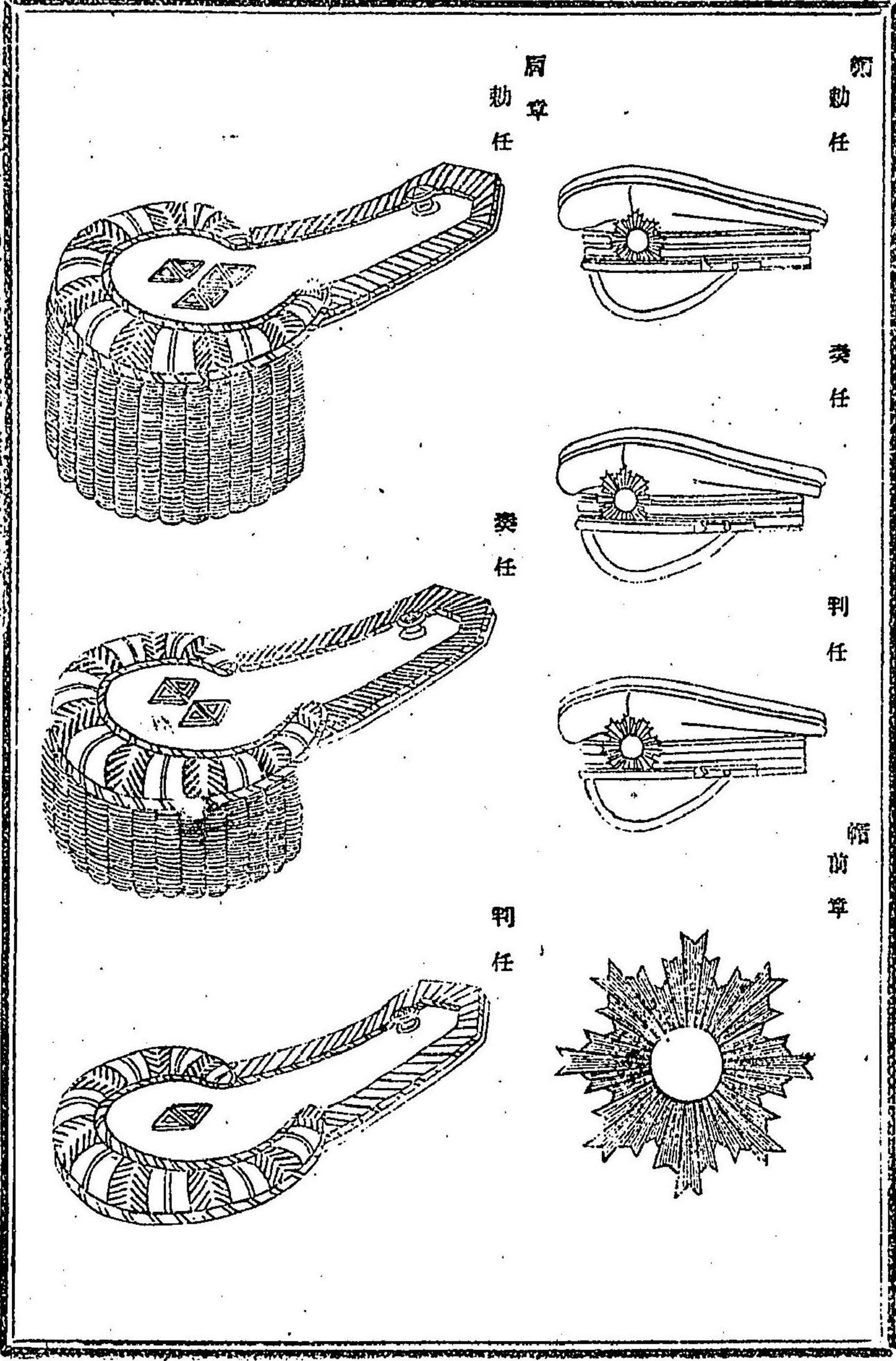
後面

勅任

奏任

判任

勅任



勅任

奏任

判任

勅任

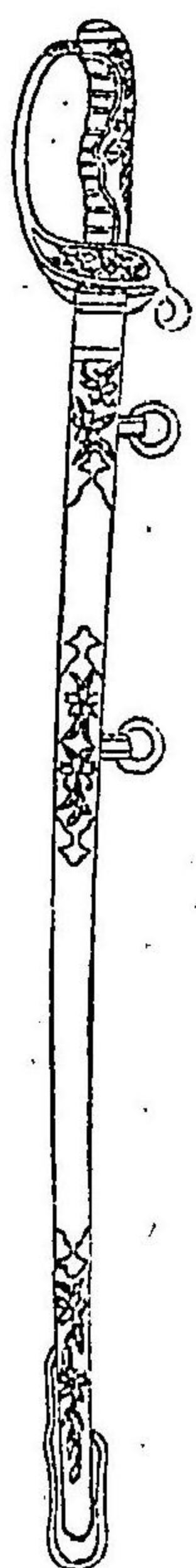
肩章

勅任

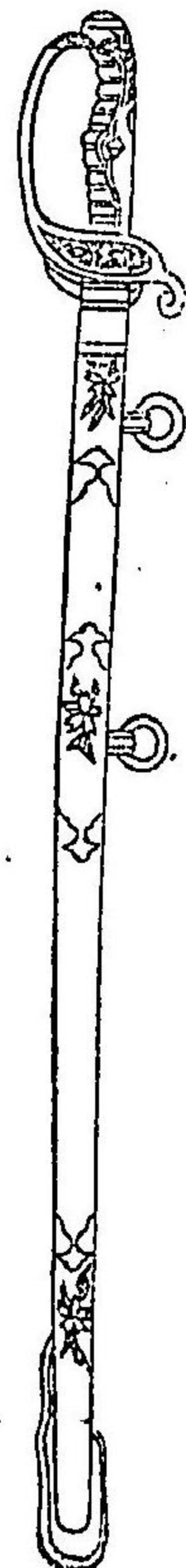
奏任

佩劍

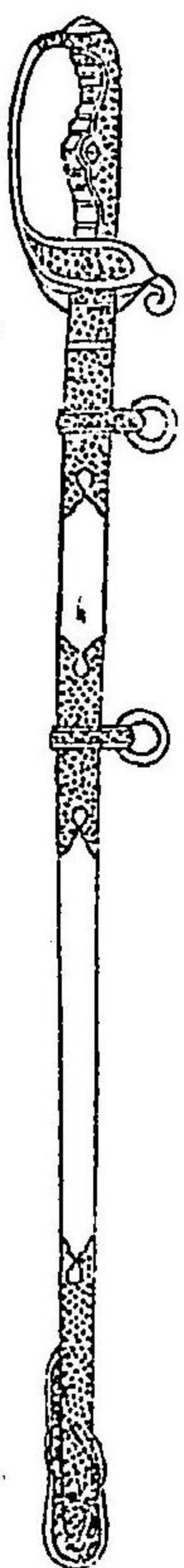
勅任



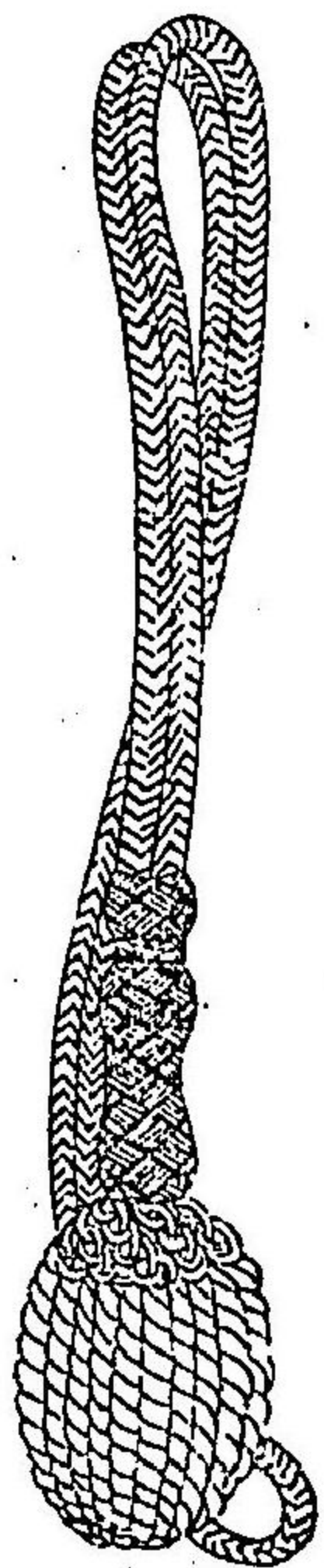
奏任



判任



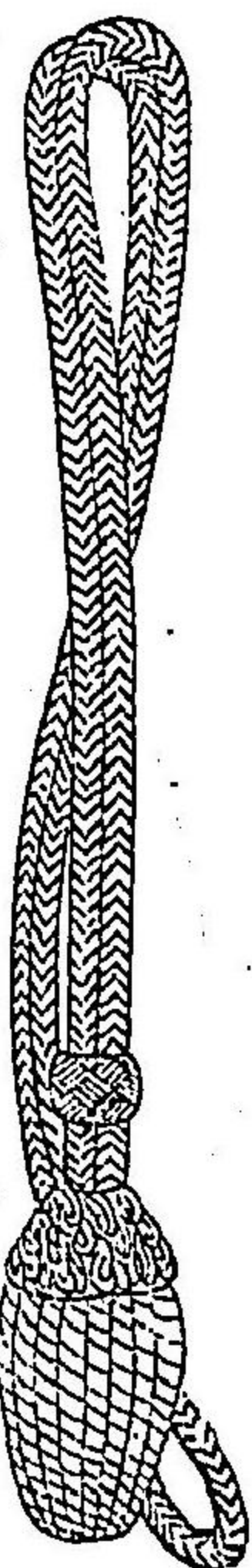
勅任



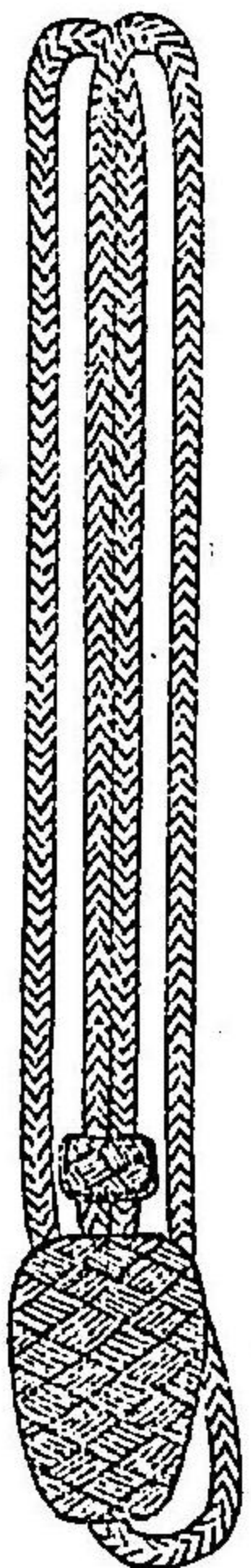
劍緒

劍帶

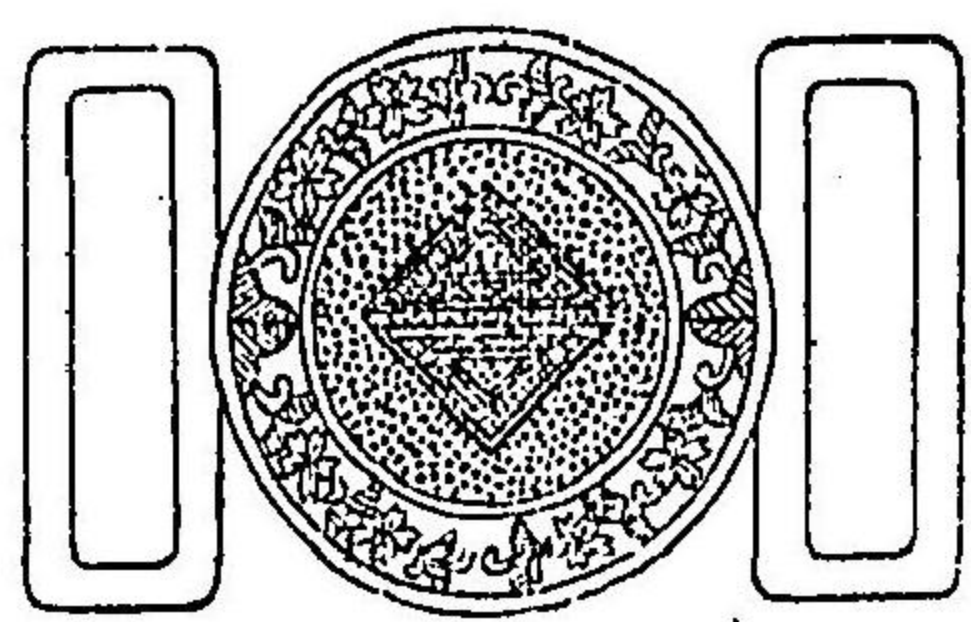
奏任



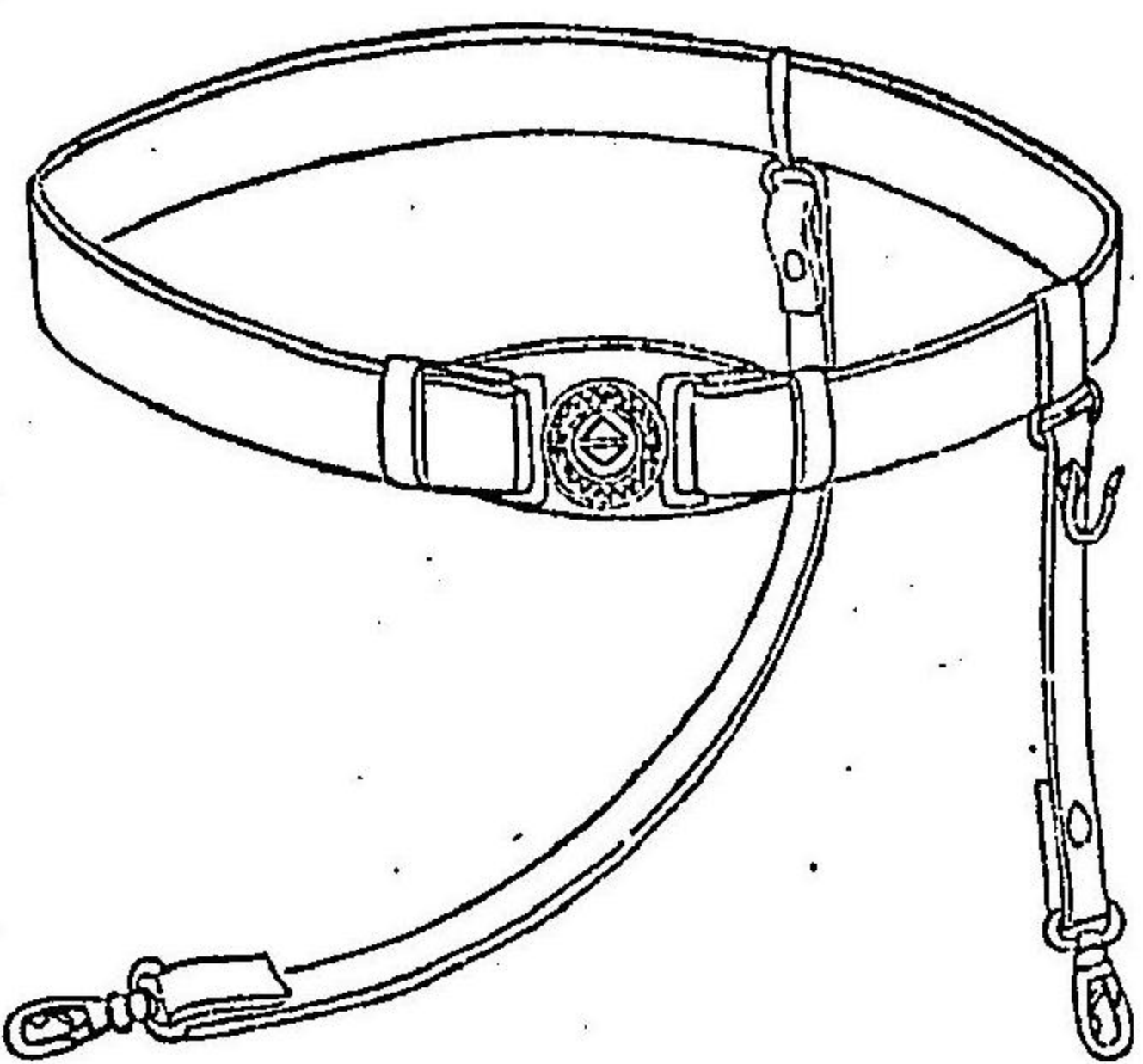
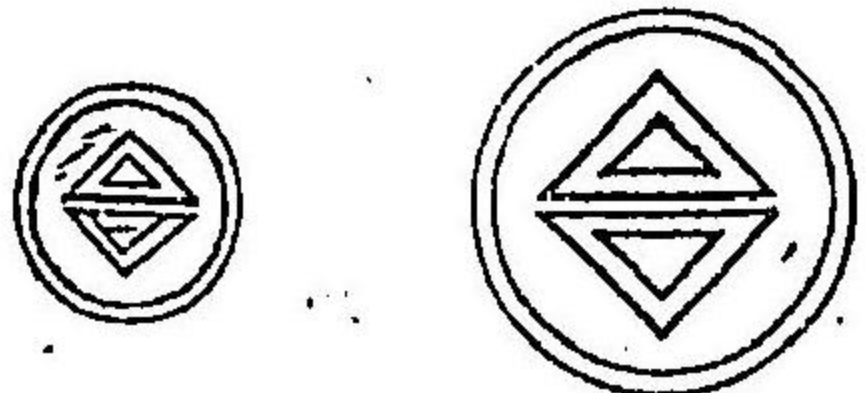
判任



前卒

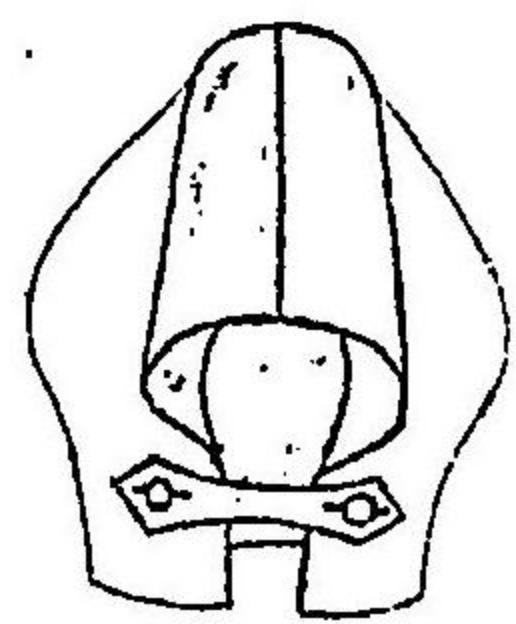


卸

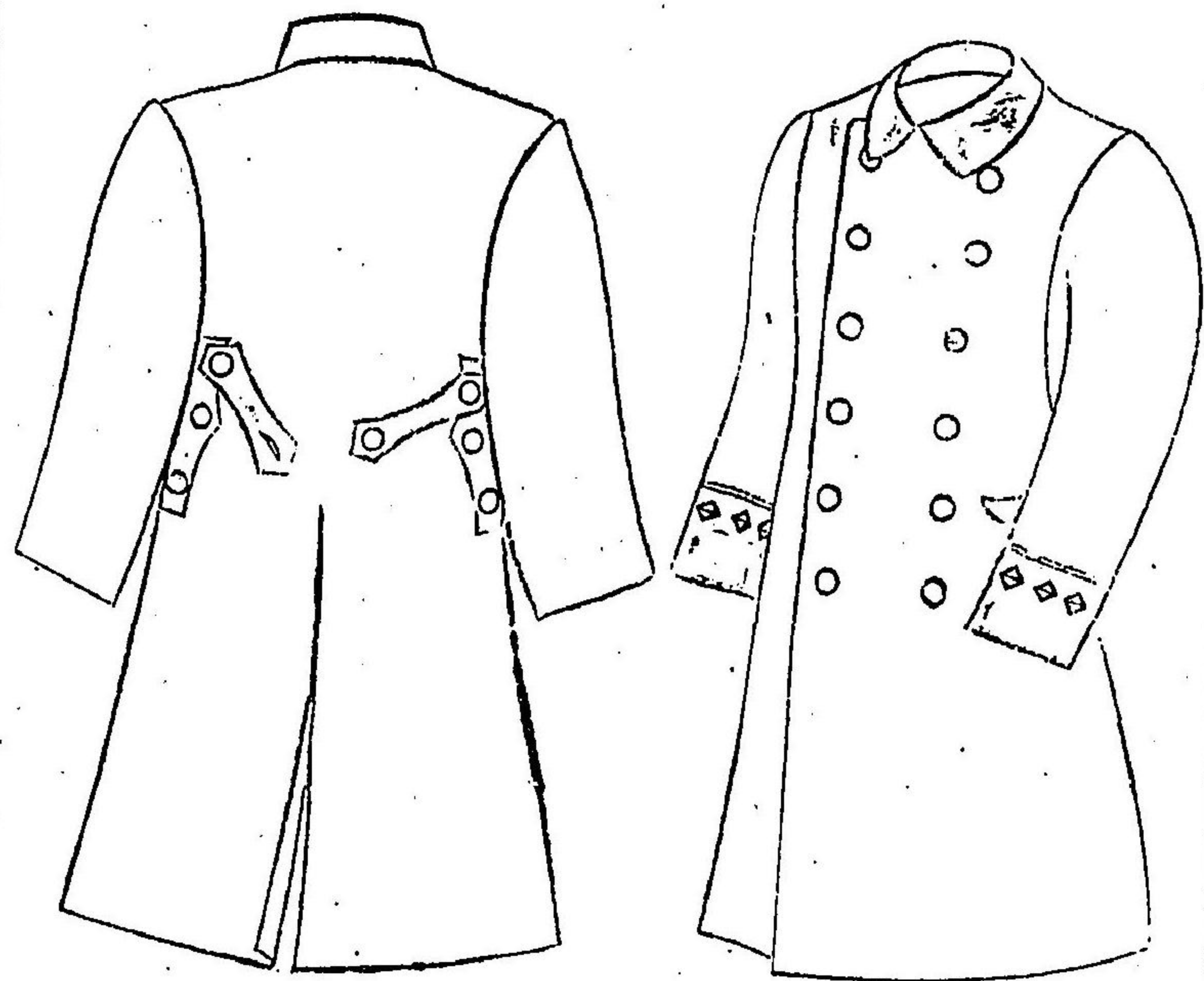
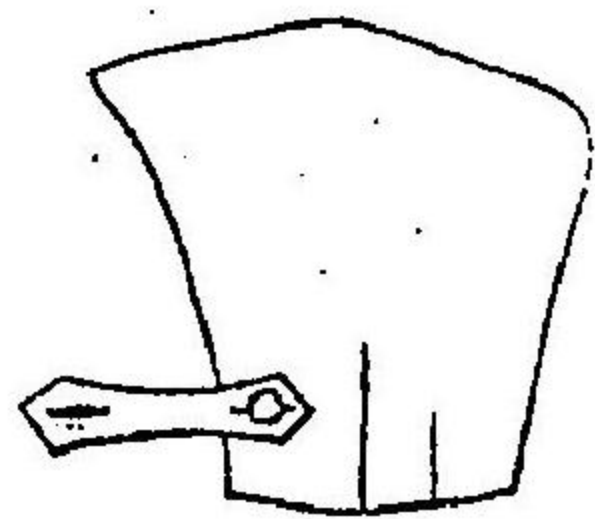


外套

前面



後面



朕臺灣總督府囑托員雇員及公醫手當金支給ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年二月十七日

内務大臣 侯爵西郷從道

勅令第四十號 (官報二月十八日)

臺灣總督府囑托員雇員及公醫ニシテ公務ニ依リ傳染病豫防救治ニ從事シ爲ニ該病ニ感染シタルトキ又ハ之ニ原因シテ死亡シタルトキハ明治十九年閣令第二十三號ヲ準用シ手當金ヲ給ス
臺灣總督府囑托員及公醫ニシテ公務ノ爲傷痍ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リタルトキ又ハ之ニ原因シテ死亡シタルトキハ明治二十九年勅令第八十號ヲ準用シ手當金ヲ給ス

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

〔參照〕

明治十九年七月十 閣令第二十三號ハ官吏准官吏公務ニ依リ傳染病豫防救治ニ從事シ爲ニ感染シ又ハ死亡シタルトキ手當金給與ノ件、同二十九年五月六 勅令第八十號ハ臺灣總督府雇員備員死歿傷痍疾病手當規則ナリ

朕關稅定率法及同法附屬輸入稅表中改正法律施行ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年二月十七日

大藏大臣 伯爵松方正義

勅令第四十一號 (官報二月十八日)

明治三十二年法律第十八號ヲ明治三十二年八月十五日ヨリ施行ス

朕帝國憲法第八條第二項ニ依リ明治三十一年勅令第七十號ノ效力ヲ將來ニ失ハシムルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年二月二十一日

- 内閣總理大臣 侯爵山縣有朋
- 大藏大臣 伯爵松方正義
- 内務大臣 侯爵西郷從道
- 陸軍大臣 伯爵桂 太郎
- 文部大臣 伯爵樺山資紀
- 外務大臣 伯爵青木周藏
- 逓信大臣 伯爵芳川顯正
- 海軍大臣 山本權兵衛
- 司法大臣 清浦奎吾
- 農商務大臣 曾禰荒助

勅令第四十二號 (官報二月二十二日)

明治三十一年勅令第七十號ハ將來ニ向テ其ノ效力ヲ失フ

〔參照〕

大日本帝國憲法(抄録)

第八條 天皇ハ公共ノ安全ヲ保持シ又ハ其ノ災厄ヲ避クル爲メ緊急ノ必要ニ由リ帝國議會閉會ノ場合ニ於テ法律ニ代ルヘキ勅令ヲ發ス
此ノ勅令ハ次ノ會期ニ於テ帝國議會ニ提出スヘシ 若シ議會ニ於テ承諾セサルトキハ政府ハ將來ニ向テ其ノ效力ヲ失フコトヲ公布スヘシ

明治三十一年七月十日勅令第七十號ハ衆議院議員選舉取締ニ關スル罰則ノ件ナリ

朕鐵道國有調査會規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年二月二十二日

内閣總理大臣 侯爵山縣有朋
逓信大臣 伯爵芳川顯正

勅令第四十三號 (官報二月二十三日)

鐵道國有調査會規則

第一條 鐵道國有調査會ハ内閣總理大臣ノ監督ニ屬シ私設鐵道買收ニ關スル事項ヲ調査ス
第二條 鐵道國有調査會ハ會長副會長各一人委員二十五人以内ヲ以テ之ヲ組織ス
前項定員ノ外臨時ノ須要ニ應シ臨時委員若干人ヲ置クコトヲ得

- 第三條 會長副會長及委員ハ文武高等官帝國會議員其ノ他鐵道經濟ニ關シ學識經驗アル者ノ中ヨリ選定シ内閣總理大臣ノ奏請ニ依リ之ヲ命ス
- 第四條 鐵道國有調査會ノ辦事及會務整理ニ關スル規則ハ内閣總理大臣之ヲ定ム
- 第五條 會長ハ辦事ヲ整理シ其ノ決議ヲ内閣總理大臣ニ具申ス
- 第六條 副會長ハ委員ト同一ノ資格ヲ以テ辦事ニ列シ會長事故アルトキハ其ノ事務ヲ代理ス
- 第七條 鐵道國有調査會ニ幹事一人ヲ置ク
- 幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス
- 第八條 鐵道國有調査會ニ書記若干人ヲ置ク
- 書記ハ會長及幹事ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス
- 第九條 書記ニハ一箇年二百圓以内ノ手當ヲ給スルコトヲ得

朕葉煙草專賣所官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御 名 御 璽

明治三十二年三月一日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
大藏大臣伯爵松方正義

勅令第四十四號(官報 三月二日)

葉煙草專賣所官制中左ノ通改正ス

第一條 葉煙草ノ検査收納輸入保管賣渡及煙草製造葉煙草賣買ノ免許ニ關スル事務ヲ處理スル爲

葉煙草專賣所ヲ置キ專賣局長ニ屬セシム

第四條 葉煙草專賣所長ハ專賣局長ノ指揮ヲ承ケ葉煙草ノ検査收納輸入保管賣渡及煙草製造葉煙

草賣買ノ免許ニ關スル事務ヲ掌理ス

〔參照〕

勅令第百二十一號葉煙草專賣所官制(明治三十年四月二十八日官報)抄録

第一條 葉煙草ノ検査收納保存賣渡ニ關スル事務ヲ處理スル爲葉煙草專賣所ヲ置キ專賣局長ニ屬セシム

第四條 葉煙草專賣所長ハ專賣局長ノ指揮ヲ承ケ葉煙草ノ検査收納保存賣渡ニ關スル事務ヲ掌理ス

朕葉煙草競争賣渡ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御 名 御 璽

明治三十二年三月一日

大藏大臣伯爵松方正義

勅令第四十五號 (官報 三月二日)

- 第一條 葉煙草專賣所ニ於テ競争ニ付シ葉煙草ヲ賣渡ストキハ入札又ハ競賣ノ方法ニ依ル葉煙草專賣所ハ競争ニ加ハラントスル者又ハ契約ヲ結ハントスル者ヲシテ現金ヲ以テ保證金ヲ納メシムルコトヲ得
- 第二條 競争ヲ行ハントスルトキハ豫メ揭示又ハ其ノ他ノ方法ヲ以テ成ルヘク廣ク公告スヘシ
- 第三條 競争ハ競争者ノ面前ニ於テ執行スヘシ競争執行ノ際出席セサル者ノ競争申込ハ無効トス
- 第四條 競争ニ付スルモ各人ノ競争價格定價以下ナルトキハ其ノ競争ハ無効トス
- 第五條 同一價格ヲ以テ競争シ落札又ハ競落トナルヘキ者數人アリタルトキハ直ニ抽籤ヲ以テ其ノ落札者又ハ競落者ヲ定ムヘシ
- 第六條 落札者又ハ競落者ハ直ニ買請書ヲ提出スヘシ

朕醬油稅則施行規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月六日

大藏大臣 伯耆松方正義

勅令第四十六號 (官報 三月七日)

醬油稅則施行規則

- 第一條 醬油稅則第一條第二項ニ該當スル者ヲ除ク外醬油ヲ製造セムトスル者ハ其ノ製造場及居所

所、氏名ヲ記シ稅務管理局長ニ申請シ其ノ免許ヲ受クヘシ但シ自家用ノミノ醬油ヲ製造セムトスル者ハ其ノ旨ヲ附記スヘシ

醬油製造場ヲ移轉セムトスルトキハ稅務管理局長ニ申請シテ其ノ免許ヲ受クヘシ

第二條 醬油稅則第一條第二項ニ該當スル者ハ其ノ居所、氏名ヲ記シ稅務管理局長ニ申告スヘシ其ノ醬油製造ヲ廢止シ又ハ居所、氏名ヲ變更シタルトキハ直ニ之ヲ申告スヘシ

第三條 醬油製造場ハ敷地ノ連續スルト否トヲ問ハズ總テ一製造場ト認ムヘキモノヲ謂フ

第四條 醬油製造人ハ其ノ製造場毎ニ地所、建物ノ詳細ナル圖面並醬油製造用容器ノ目錄ヲ調製シ事業著手前ニ稅務管理局長ニ提出スヘシ

前項ノ容器ヲ修理シ又ハ前項ノ圖面目錄ニ記載シタル事項ニ異動ヲ生シタルトキハ之ヲ申告スヘシ醬油製造人ノ居所、氏名ニ異動ヲ生シタルトキ亦同シ

第五條 醬油製造人ヨリ前條第一項ノ目錄ヲ提出シ又ハ容器ニ關シ同條第二項ノ申告ヲ爲シタルトキハ稅務管理局長ハ其ノ容器ノ檢定ヲ爲スヘシ其ノ檢定後ニ非サレハ醬油製造人ハ之ヲ使用スルコトヲ得ス

稅務管理局長容器ノ檢定ヲ爲シタルトキハ之ニ番號其ノ他必要ナル事項ヲ標記又ハ烙印スヘシ

第六條 醬油製造人ハ毎年見込込込石數、見込査定石數及製造方法ヲ記シ前年十二月中ニ稅務管理局長ニ申告スヘシ但シ前年ノ製造方法ニ依ルモノハ其ノ旨ヲ申告シ別ニ製造方法ヲ記載スルコトヲ要セス

新ニ免許ヲ受ケタル者ハ事業著手前ニ前項ノ申告ヲ爲スヘシ

前二項ニ依リ申告シタル事項ヲ變更セムトスルトキハ之ヲ申告スヘシ

第七條 醬油製造人ノ相續人其ノ製造ヲ繼續セムトスルトキハ稅務管理局長ニ申出テ繼續ノ免許ヲ受クヘシ

相續ノ場合ヲ除ク外醬油製造ヲ引繼カムトスル者ハ總テ第一條ニ依リ醬油製造ノ免許ヲ受クヘシ此ノ場合ニ於テハ前製造人ハ醬油稅則第一條ニ依リ其ノ免許ノ取消ヲ求ムヘシ

第八條 醬油ノ造石稅ハ其ノ製造場所在ノ地方ニ於テ之ヲ徵收ス

第九條 醬油ノ造石數ハ容器ノ容量ニ依リ一容器毎ニ其ノ現在スル醬油ノ總量ニ就キ之ヲ査定スヘシ

前項ニ依リ難キ場合ニ於テハ現在ノ醬油又ハ證憑物件ニ就キ之ヲ査定スヘシ

第十條 醬油ヲ醬油製造ノ原料ニ供セムトスルトキハ醬油ハ製成前溜ハ製成ノ際其ノ石數ノ檢定ヲ受クヘシ

前項ニ依リ檢定ヲ受ケタル醬油ヲ製造場外ニ移サムトスルトキハ稅務管理局長ニ申告スヘシ

第十一條 前條第一項ニ依リ檢定ヲ受ケタル醬油ヲ賣渡、貸渡、讓渡又ハ自用シ若ハ前條第二項ノ申告ヲ爲サスシテ其ノ製造場外ニ移シタルトキハ檢定石數ニ依リ其ノ造石數ヲ査定スヘシ

第十二條 醬油製造人ハ左ノ場合ニ於テ收稅官吏ノ承認ヲ受クヘシ

一 自己ノ所有ト否トヲ問ハス容器ヲ製造場外ニ移サムトスルトキ

二 原料用醬油ヲ使用セムトスルトキ

三 諸味又ハ原料用醬油ノ容器ヲ變換セムトスルトキ

第十三條 造石數査定未濟ノ醬油漏溢其ノ他ノ事故ニ依リ減量又ハ廢棄ニ屬シタルトキハ直ニ稅務管理局長ニ申告スヘシ

第十四條 醬油稅則第十一條ニ依リ造石稅ノ免除ヲ請ハムトスル者ハ其ノ事實ノ生シタルトキ直ニ稅務管理局長ニ申請スヘシ

第十五條 前條ノ申請ヲ受ケタルトキハ稅務管理局長ハ其ノ事實ヲ調査シ其ノ廢棄ヲ認ムルトキハ稅金ノ免除處分ヲ爲スヘシ

第十六條 外國ニ輸出シタル醬油ノ造石稅下戻ヲ請求セムトスル者ハ輸出港稅關ノ檢査濟證明書並輸入港稅關ノ陸揚免狀若ハ其ノ他ノ證憑書類ヲ當初ノ輸出港稅關ニ提出スヘシ

第十七條 醬油ヲ製成シタル後其ノ諸味造石數ノ算出ヲ要スルトキハ所轄稅務署管内ニ於ケル前年中ノ製成醬油一石ニ對スル諸味石數ノ平均歩合ニ依ル但シ輸出醬油ノ造石稅下戻ノ場合ニ於テハ全國ニ於ケル前年中ノ製成醬油一石ニ對スル諸味石數ノ平均歩合ニ依ル

第十八條 溜粕ハ其ノ製成シタル溜ノ造石數査定ノ時之ヲ檢査スヘシ

第十九條 醬油製造人ハ毎年一月三十一日限り前年中ニ製成シタル醬油石數及其ノ諸味石數ヲ稅務管理局長ニ申告スヘシ

醬油製造ヲ廢止シタルトキハ其ノ年一月一日ヨリ廢止ノ日ニ至ルマテニ製成シタル醬油石數及其ノ諸味石數ヲ其ノ際申告スヘシ

第二十條 醬油製造人ハ醬油製造用原料品ノ受拂醬油ノ仕込、製成、出入、消費ニ關シ詳細ニ其ノ事實ヲ帳簿ニ記載スヘシ

第二十一條 本令ニ於テ醬油製造人ト稱スルハ醬油製造ノ免許ヲ受ケタル者ヲ謂フ

朕臺灣總督府二等郵便電信局長身元擔保ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月七日

內務大臣 侯爵西鄉從道

勅令第四十七號 (官報 三月八日)

第一條 臺灣總督府二等郵便及電信局長ハ出納官吏トシテ納ムヘキ身元保證金ノ外尙金二百圓以上ノ擔保金ヲ納ムヘシ納付金額ハ臺灣總督之ヲ定ム

第二條 二等郵便及電信局長ハ就職ノ時擔保金ヲ全納スヘシ但シ本令施行後滿二箇年以内ニ就職スル三等郵便及電信局長ニ限リ本人ノ情願ニ依リ就職ノ日ヨリ起算シ十箇月間ニ擔保金ヲ分納セシムルコトヲ得

本令施行ノ際現ニ三等郵便及電信局長ノ官職ニ在ル者ノ擔保金納期ニ關スル規定ハ臺灣總督之ヲ定ム

第三條 臺灣總督ノ規定スル三等郵便及電信局長服務規約ニ依リ臺灣總督ヨリ損害ノ賠償又ハ謝金ヲ納付ヲ命メタルトキ其ノ指定シタル期限内ニ納付セサルトキハ擔保金ヲ以テ之ニ充用スルコトヲ得

第四條 三等郵便及電信局長解職シタルトキハ事務引繼結了ノ日ヨリ起算シテ六箇月以内ニ擔保金ヲ還付ス

第五條 前各條ニ規定セサル事項ハ出納官吏身元保證金ニ關スル規程ヲ適用ス但シ會計規則第百二條第二項ハ之ヲ適用セス又會計規則第百四條及第百五條ニ依リ各省大臣ノ爲スヘキ職務ハ臺灣

灣總督之ヲ行フ

朕法典調査會規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月九日

內閣總理大臣 侯爵山縣有朋
司法大臣 清浦奎吉

勅令第四十八號 (官報 三月十日)

法典調査會規則中左ノ通改正ス

第一條 法典調査會ハ內閣總理大臣ノ監督ニ屬シ法典及附屬法令ノ改正又ハ制定ニ關スル事項ヲ起案審議シ竝條約ノ實施ニ必要ナル事項ヲ調査ス

前項ニ掲ケタル事項ノ外法令ニ關シ內閣總理大臣ノ諮詢アルトキハ意見ヲ上申ス

第八條 法典調査會ニ部長四人、起草委員及主査委員若干人ヲ置キ委員中ニ就キ總裁之ヲ命ス

第九條 總裁副總裁及委員ニハ一箇年千圓以内ノ手當ヲ給ス但起草委員及主査委員ニハ二千圓以内ヲ給スルコトヲ得

第十條 法典調査會ニ補助委員八人以内ヲ置キ起草委員及主査委員ノ職務ヲ補助セシム

第十二條 補助委員ニハ一箇年六百圓以内書記ニハ五百圓以内ノ手當ヲ給ス

〔參照〕

勅令第三十號法典調査會規則(明治二十七年三月二十七日官報)抄録

第一條 法典調査會ハ内閣總理大臣ノ監督ニ應ジテ民法、商法及附屬法律ノ修正案ヲ起草審議シ並條約ノ實施ニ必要ナル事項ヲ調査ス

前項ノ外内閣總理大臣ヨリ諮詢アルトキハ之ヲ審議ス

第八條 法典調査會ニ部長二人起草委員及主査委員若干人ヲ置キ委員中ニ就キ總裁之ヲ命ス

第九條 總裁、副總裁及委員ニハ一箇年ヲ以テ任シ給ス但起草委員ニハ二年間迄ヲ給スルコトヲ得

第十條 法典調査會ニ起草委員補助五人以内ヲ置キ起草委員ノ職務ヲ補助セシム

第十二條 起草委員補助ニハ一箇年六百圓以内附記ニハ三百圓以内ノ手當ヲ給ス

朕郵便及電信局、在外郵便電信局郵便局、郵便爲替貯金管理所及電話交換局職員定員中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十三年三月十日

勅令第四十九號 (官報 三月十一日)

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
遞信大臣子爵芳川顯正

郵便及電信局、在外郵便電信局郵便局、郵便爲替貯金管理所及電話交換局職員定員中左ノ通改正ス

第一條 中通信書記ノ下、專任二千七百三十三人ヲ專任二千八百四十九人ニ改ム

朕收入印紙賣下ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十三年三月十日

勅令第五十號 (官報 三月十一日)

大藏大臣伯爵松方正義
遞信大臣子爵芳川顯正

郵便切手ノ賣下ヲ爲ス郵便及電信局所並郵便切手賣下所ニ於テ收入印紙ノ賣下ヲ爲スコトヲ得其ノ賣下ニ關スル規程ハ遞信大臣之ヲ定ム

朕臺灣鹽務局官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十三年三月十三日

勅令第五十一號 (官報 三月十四日)

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
內務大臣侯爵西鄉從道

臺灣鹽務局官制

第一條 臺灣鹽務局ハ臺灣總督ノ管理ニ屬シ食鹽ノ收納賣渡検査其ノ他食鹽專賣ニ關スル一切ノ事務ヲ掌理ス

第二條 臺灣鹽務局ニ左ノ職員ヲ置ク

局長
事務官

第三條 局長ハ各局一人事務官ヲ以テ之ニ充ツ事務官ヲ置カサル局ニ於テハ屬ヲ以テ之ニ充ツ局長ハ臺灣總督ノ指揮監督ヲ承ケ局中一切ノ事務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

事務官ハ奏任トス各局ヲ通シテ專任二人ヲ以テ定員トス

第四條 屬ハ判任トシ各局ヲ通シテ專任八十四人ヲ以テ定員トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務會計ニ從事ス

第五條 臺灣總督ハ前二條定員ノ外須要ニ應シ俸給定額内ニ於テ臺灣鹽務局ニ技師及技手ヲ置クコトヲ得

第六條 技師ハ奏任トス局長ノ命ヲ承ケ技術ニ關スル事ヲ掌ル

第七條 技手ハ判任トス上官ノ命ヲ承ケ技術ニ關スル事ニ從フ

第八條 臺灣鹽務局ノ名稱位置及其ノ管轄區域ハ臺灣總督之ヲ定ム

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

朕臺灣鹽務局職員官等俸給令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十三年三月十三日

勅令第五十二號 (官報 三月十四日)

内閣總理大臣 侯爵 山縣有朋
内務大臣 侯爵 西郷從道

臺灣鹽務局職員官等俸給令

第一條 臺灣鹽務局事務官及技師ノ官等ハ高等官五等以下八等以上トス其ノ俸給ハ左表ニ依ル

年俸	一級	二級	三級	四級
	千六百圓	千四百圓	千二百圓	千圓
年俸	五級	六級	七級	八級
	九百圓	八百圓	七百圓	六百圓

第二條 本令ニ規定セサルモノハ明治三十一年勅令第百十三號臺灣總督府職員官等俸給令ニ依ル

朕陸軍管區表中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十三年三月十五日

陸軍大臣 子爵 桂 太郎

勅令第五十三號 (官報 三月十六日)

陸軍管區表中近衛師管第一師管ノ區畫ヲ左ノ通改メ備考第二項ヲ削ル

第	麻布	横濱	高崎	長野	
	東京 麻布區 神田區 日本橋區 京橋區 荏原區 豊多摩區 赤坂區 四谷區 小石川區 牛込區 芝區 西多摩區 南多摩區 北多摩區 伊豆七島	神奈川 横浜市 久良岐郡 鎌倉郡 三浦郡 中郡 高座 山梨	群馬 群馬郡 碓氷郡 入間郡 比企郡 秩父	群馬 群馬郡 碓氷郡 入間郡 比企郡 秩父	長野 長野郡

佐倉	千葉
水戸	茨城 水戸市 東茨城郡 西茨城郡 那珂郡 多賀郡 久慈郡 鹿島郡 行方郡 新治郡 筑波郡 桐敷郡 北相馬郡
本郷	東京 本郷區 淺草區 下谷區 南葛飾郡 本 埼玉 北足立郡 南埼玉郡 所屬深川區 足立郡 北葛飾郡 埼玉 北埼玉郡 北葛飾郡
宇都宮	栃木 茨城 眞壁郡 結城郡 栃木 茨城 眞壁郡 結城郡
小笠原島	東京 小笠原島

附則

本令ハ明治三十三年四月一日ヨリ施行ス

〔參照〕

勅令第三百八十一號陸軍管區表(明治二十九年十二月四日官報)抄録

師管	聯隊區	警備隊區	管	府	縣
近	本郷	宇都宮	栃木	茨城 眞壁郡 結城郡	埼玉 北足立郡 南埼玉郡 北埼玉郡 北葛飾郡
衛	佐倉	千葉	千葉	茨城 水戸市 東茨城郡 西茨城郡 那珂郡 多賀郡 久慈郡 鹿島郡 行方郡 新治郡 筑波郡 桐敷郡 北相馬郡	東京 本郷區 淺草區 下谷區 南葛飾郡 本郷區 葛飾郡 荒川區 足立郡 北葛飾郡 所屬深川區 足立郡 北葛飾郡 埼玉 北埼玉郡 北葛飾郡
第	水戸	麻布	横濱	高崎	群馬 群馬 碓氷郡 比企郡 秩父郡 群島 碓氷郡 比企郡 秩父郡

一	長野	長野
	小笠原島	東京 小笠原島

備考 三 第七師管ヲ除クノ外師管軍法會議ノ管轄ニ關シテハ當分従前ノ區域ニ依ル

朕臺灣總督府縣及廳看守定員ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十三年三月二十日

内閣總理大臣 侯爵 山縣有朋
内務大臣 侯爵 西郷從道

勅令第五十四號(官報 三月二十二日)

- 第一條 臺灣總督府縣廳看守ノ定員ハ拘禁男子五百人ニ付八十五人トシ 拘禁男子五百人以上ハ百人ヲ加フル毎ニ看守十二人ヲ加ヘ 拘禁男子五百人未滿ハ百人ヲ減スル毎ニ看守十二人ヲ減ス
- 第二條 臺灣總督ハ前條定員ノ外各監獄支署ニ五人以下ノ看守ヲ増置スルコトヲ得
- 第三條 臺灣總督ハ監獄ノ構造役業ノ種類其ノ他特別ノ事情アリト認ムルトキハ第一條定員ノ外更ニ五十人以下ノ看守ヲ増置スルコトヲ得
- 第四條 拘禁男子百人未滿ノ監獄署看守定員ハ第一條看守定員最少數以內ニ於テ臺灣總督ノ定ル所ニ依ル
- 第五條 在監人ノ減少ニ由リ看守ニ過員ヲ生シタルトキハ之ニ休職ヲ命シ俸給ノ半額ヲ支給スル

コトヲ得但シ休職ハ一箇年ヲ期トシ期滿ツレハ其ノ職ヲ免セラレタルモノトス
休職看守ハ職ヲ執ラサルノ外總テ在職者ニ同シ
休職看守ハ誓約期限内ト雖自己ノ都合ニ依リ其ノ職ヲ辭スルコトヲ得

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

朕稅務管理局見習員ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十日

内閣總理大臣 侯爵山縣有朋
大藏大臣 伯爵松方正義

勅令第五十五號 (官報 三月二十二日)

第一條 酒類ノ鑑定事務ヲ練習セシムル爲稅務管理局ニ見習員ヲ置クコトヲ得
見習員ノ數ハ各稅務管理局ヲ通シテ百五十人ヲ超ユルコトヲ得ス

第二條 見習員ハ高等小學校ヲ卒業シ又ハ尋常中學校二年以上ノ課程ヲ修メタル者及之ト同等以
上ノ學科ヲ修メタル者ヨリ之ヲ採用ス

第三條 二箇年以上見習員トシテ勤續シタル者ハ文官普通試驗委員ノ銓衡ヲ經テ稅務管理局ノ技
手ニ任用スルコトヲ得

第四條 見習員ニハ月額十五圓以内ノ手當ヲ給スルコトヲ得

附則

第五條 本令施行ノ後二箇年間ハ本令第三條ノ年限ニ拘ラヌ見習員ヨリ技手ニ任用スルコトヲ得

朕不用手形用紙處分ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十日

大藏大臣 伯爵松方正義

勅令第五十六號 (官報 三月二十二日)

第一條 印紙類元賣捌人又ハ賣捌人ノ所有スル不用ノ手形用紙ハ其ノ請求ニ依リ政府ニ於テ之ヲ
買上又ハ印紙ト交換スヘシ

第二條 政府ハ所轄稅務管理局長ヲシテ前條ノ請求ヲ受理シ左ノ價格割合ニ依リ買上又ハ交換ヲ
爲サシム

一 買上 手形用紙額面金額百圓ニ付金九十四圓ノ價格
二 交換 手形用紙額面金額百圓ニ付印紙額面金額百圓

第三條 印紙類元賣捌人及賣捌人間ニ於テハ前條ノ價格割合ニ依ラス任意ニ賣買交換スルコトヲ
得

附則

第四條 本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

○ 朕明治三十一年法律第二十六號及同年法律第二十七號施行ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
御名 御璽

明治三十二年三月二十二日

大藏大臣 伯爵松方正義

勅令第五十七號 (官報 三月二十三日)

○ 明治三十一年法律第二十六號及同年法律第二十七號ヲ明治三十二年八月十五日ヨリ施行ス

〔参照〕

○ 明治三十一年八月二十日 法律第二十六號ハ酒類警察稅法廢止ノ件、同法律第二十七號ハ醫藥用工業用酒精ニ關スル件ナリ

○ 朕明治二十九年勅令第二百二十四號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十三日

内務大臣 侯爵西郷從道

勅令第五十八號 (官報 三月二十四日)

○ 明治二十九年勅令第二百二十四號中第一項ヲ左ノ通改正ス

血清藥院ニ顧問一人ヲ置キ手當ヲ給スルコトヲ得

附 則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

〔参照〕

○ 勅令第二百二十四號(明治二十九年五月十九日官報)

血清藥院ニ顧問一人ヲ置キ手當ヲ給スルコトヲ得

顧問ハ内務大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス

○ 朕臨時葉煙草取扱所建築部官制廢止ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十三日

内閣總理大臣 侯爵山縣有朋

大藏大臣 伯爵松方正義

勅令第五十九號 (官報 三月二十四日)

○ 明治二十九年勅令第三百二十七號臨時葉煙草取扱所建築部官制ハ明治三十二年三月三十一日限り廢止ス

○ 朕官吏遺族扶助法納金收入規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十三日

大藏大臣 伯爵松方正義

勅令第六十號 (官報 三月二十四日)

官吏遺族扶助法納金收入規則中左ノ通改正ス

第一條ニ左ノ一項ヲ加フ

郡書記ノ納ムヘキ金員ハ俸給仕拂ノトキ郡役所會計吏ニ於テ之ヲ差引ヘシ

第二條第二項中現金前渡ヲ受ケタル官吏ノ下ニ及郡役所會計吏ヲ加フ

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

〔參照〕

勅令第百二十五號官吏遺族扶助法納金收入規則(明治二十三年七月十四日官報)抄錄

第二條 前條ニ依リ金庫ニ於テ差引シタル金員ハ收入官吏ヨリ金庫ヘノ拂込ニ移シテ計算シ直ニ報告書ヲ附リ之ヲ收入官吏ニ送付スヘシ

前條ニ依リ現金前渡ヲ受ケタル官吏ニ於テ差引シタル金員ハ納金額表ヲ添ヘ之ヲ收入官吏ニ送付スヘシ

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ文官任用令ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十七日

內閣總理大臣 侯爵 山縣有朋

勅令第六十一號 (官報 三月二十八日)

文官任用令

第一條 勅任文官ハ左ノ資格ノ一ヲ有スル者ノ中ヨリ之ヲ任用ス但シ親任式ヲ以テ敍任スル官及

別ニ任用ノ規程ヲ設クルモノハ此ノ限ニ在ラズ

一 奏任文官 特別ノ規程ニ依リ任用セラレノ職ニ在ル者及在リタル者ニシテ高等官二等ノ文官ノ職ニ在ル者及在リタル者

二 滿一年以上勅任文官ノ職ニ在リタル者但シ特別任用ノ規程ニ依リ在職シタル者並ニ教官、技術官ノ在職年數ヲ除ク

三 勅任文官 特別ノ規程ニ依リ任用セラレノ職ニ在リタル者ニシテ本令第二條第二項ノ資格ヲ有スル者

四 滿一年以上勅任檢事ノ職ニ在ル者及在リタル者

滿一年以上勅任判事ノ職ニ在ル者及在リタル者ハ司法省ノ勅任文官ニ任用スルコトヲ得

滿一年以上帝國大學及文部省直轄諸學校ノ勅任文官ノ職ニ在ル者及在リタル者ハ文部省部内ノ勅任文官ニ任用スルコトヲ得

陸海軍將官ハ別ニ任用ノ規程アルモノノ外各其ノ部内ノ勅任文官ニ任用スルコトヲ得

第二條 奏任文官ハ別ニ任用ノ規程ヲ設クルモノノ外左ノ資格ノ一ヲ有スル者ノ中ヨリ之ヲ任用ス

一 文官高等試験ヲ經テ其ノ合格證書ヲ有スル者

二 滿三年以上高等文官ノ職ニ在リタル者但シ特別任用ノ規程ニ依リ在職シタル者並ニ教官、技術官ノ在職年數ヲ除ク

三 滿一年以上檢事ノ職ニ在ル者及在リタル者

滿一年以上判事ノ職ニ在ル者及在リタル者ハ司法省ノ奏任文官ニ任用スルコトヲ得

六九

第三條 判任文官ハ別ニ任用ノ規程ヲ設クルモノノ外左ノ資格ノ一ヲ有スル者ノ中ヨリ之ヲ任用ス

- 一 文官普通試験ヲ經テ其ノ合格證書ヲ有スル者
- 二 文官高等試験ヲ經テ其ノ合格證書ヲ有スル者
- 三 官立公立中學校又ハ文部大臣ニ於テ之ト同等以上ト認メタル官立公立學校ノ卒業證書ヲ有スル者

四 高等商業學校舊附屬主計學校及舊主計專修科ノ卒業證書ヲ有スル者並ニ文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學、政治學又ハ經濟學ヲ教授スル私立學校ニ於テ明治二十六年十一月十日以前ニ卒業證書ヲ得タル者

五 滿二年以上文官ノ職ニ在リタル者但シ特別任用ノ規程ニ依リ在職シタル者並ニ教官、技術官ノ在職年數ヲ除ク

第四條 教官及技術官ハ別ニ任用ノ規程ヲ設クルモノノ外高等官ニ在リテハ文官高等試験委員、判任官ニ在リテハ文官普通試験委員ノ銓衡ヲ經テ之ヲ任用ス

第五條 特別ノ學術技藝ヲ要スル行政官ハ高等官ニ在リテハ文官高等試験委員、判任官ニ在リテハ文官普通試験委員ノ銓衡ヲ經テ教官、技術官ノ中若ハ試験委員ニ於テ教官、技術官タルノ資格アリト認ムル者ノ中ヨリ之ヲ任用スルコトヲ得

第六條 滿五年以上雇員トシテ同一官廳ニ勤續シタル者ハ文官普通試験委員ノ銓衡ヲ經テ直ニ其ノ官廳ノ判任文官ニ任用スルコトヲ得

第七條 本令第一條第二項第三項第四項、第二條第二項、第四條、第五條及第六條其ノ他特別ノ規

程ニ依リ任用セラレタル者ハ文官試験ヲ經ルニ非サレハ其ノ各條項又ハ其ノ規程ニ指定シタル以外ノ文官ニ任用スルコトヲ得ス

第八條 文官任用及銓衡ニ關スル細則ハ閣令ヲ以テ之ヲ定ム

附則

第九條 本令ハ明治三十二年四月十日ヨリ施行ス

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ文官分限令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十七日

内閣總理大臣 侯爵 山縣有朋

勅令第六十二號(官報 三月二十八日)

文官分限令

第一條 本令ハ親任式ヲ以テ敘任スル官、公使、祕書官及法令ニ別段ノ規定アルモノヲ除クノ外一般ノ文官ニ適用ス

第二條 官吏ハ刑法ノ宣告、懲戒ノ處分又ハ本令ニ依ルニ非サレハ其ノ官ヲ免セララルコトナシ

第三條 官吏左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其ノ官ヲ免スルコトヲ得

- 一 不具、廢疾ニ因リ又ハ身體若ハ精神ノ衰弱ニ因リ職務ヲ執ルニ堪ヘサルトキ
- 二 傷痍ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リ其ノ職ニ堪ヘサルニ因リ又ハ自己ノ便宜ニ因リ免官ヲ願出タルトキ

三 官制又ハ定員ノ改正ニ因リ過員ヲ生シタルトキ
 前項第一號ニ依リ其ノ官ヲ免スルトキハ高等官ニ在テハ文官高等懲戒委員會、判任官ニ在テハ文官普通懲戒委員會ノ審査ニ付ス

第四條 官吏ハ廢官若ハ廢職ノ場合ニ於テハ當然退官者トス

第五條 第十一條第一項第三號及第四號ニ依リ休職ヲ命セラレ滿期ニ至リタルトキハ當然退官者トス

第六條 官吏ハ其ノ意ニ反シテ同等官以下ニ轉官セラルルコトナシ

第七條 文官高等懲戒委員會ニ顧問醫二人ヲ置ク
 審査上必要ノ場合ニ於テハ臨時顧問醫ヲ加フルコトヲ得

第八條 文官普通懲戒委員會ニ臨時顧問醫ヲ置ク

第九條 懲戒委員會ハ本令ニ依ル審査ヲ爲ス前豫メ顧問醫ノ意見ヲ徵スヘシ

第十條 第三條第二項ニ依ル懲戒委員會ノ審査ニ關シテハ文官懲戒令第十二條第十三條第二十四條第二十五條第二十九條乃至第三十四條ノ規定ヲ準用ス

第十一條 官吏左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ休職ヲ命スルコトヲ得
 一 懲戒令ノ規定ニ依リ懲戒委員會ノ審査ニ付セラレタルトキ
 二 刑事事件ニ關シ告訴若ハ告發セラレタルトキ
 三 官制又ハ定員ノ改正ニ因リ過員ヲ生シタルトキ
 四 官廳事務ノ都合ニ依リ必要ナルトキ

前項休職ノ期間ハ第一號及第二號ノ場合ニ在テハ其ノ事件ノ懲戒委員會又ハ裁判所ニ繫屬中ト

シ第三號及第四號ノ場合ニ在テハ滿二年トス

第十二條 休職者ハ其ノ本官ヲ奉シテ職務ニ從事セス其ノ他總テ在職官吏ト異ナルコトナシ
 前條第一項第三號及第四號ニ依リ休職ヲ命セラレタル者ニハ本屬長官ハ事務ノ都合ニ依リ何時ニテモ復職ヲ命スルコトヲ得

第十三條 第十一條ニ依リ休職ヲ命セラレタル者ニハ其ノ休職中俸給ノ三分ノ一ヲ給ス

第十四條 免官ハ勅任官ニ在テハ内閣總理大臣、奏任官ニ在テハ内閣總理大臣ヲ經テ本屬長官奏請シ裁可ニ依リ之ヲ行フ

休職ハ勅任官ニ在テハ内閣總理大臣奏請シ裁可ニ依リ之ヲ行ヒ奏任官ニ在テハ内閣總理大臣ノ認可ヲ經テ本屬長官之ヲ命ス其ノ復職ヲ命スルトキ亦同シ

附則

第十五條 本令ハ明治三十二年四月十日ヨリ施行ス

官吏非職條例、明治二十三年勅令第二百八十六號其ノ他從前ノ命令ニシテ本令ノ規定ニ牴觸スルモノハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

第十六條 本令施行前官吏非職條例又ハ明治二十三年勅令第二百八十六號ニ依リ非職又ハ休職ヲ命セラレ未タ滿期ニ至ラサル者ハ本令第十一條第一項第四號ノ休職者ニ關スル規定ヲ適用ス但シ本令第十三條ハ此ノ限ニ在ラス

第十七條 本令中休職トアルハ他ノ法令ニ於テ規定スル非職ト看做ス

〔參照〕

勅令第二百八十六號(明治二十三年十二月二十七日官報)

- 第一條 技術官ノ休職ハ一年ヲ一期トス期滿レハ其官ヲ免ス
- 第二條 技術官ノ休職ニ關シ特別ノ規定ナキモハ總テ官吏非職ノ例ニ依ル
- 第三條 本令ハ明治二十四年二月一日ヨリ施行ス現ニ休職中ノ者ノ休職期限モ亦同日ヨリ起算ス

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ文官懲戒令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十七日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋

勅令第六十三號 (官報 三月二十八日)

文官懲戒令

第一章 總則

- 第一條 親任式ヲ以テ敘任スル官及法令ニ別段ノ規定アルモノヲ除クノ外官吏ハ本令ニ依ルニ非サレハ懲戒ヲ受クルコトナシ
- 第二條 官吏ノ懲戒ヲ受クヘキ場合左ノ如シ
 - 一 職務上ノ義務ニ違背シ又ハ職務ヲ怠リタルトキ
 - 二 職務ノ内外ヲ問ハス官職上ノ威嚴又ハ信用ヲ失フヘキ所爲アリタルトキ
- 第三條 懲戒ハ左ノ如シ
 - 一 免官
 - 二 減俸
 - 三 譴責

第四條 免官ノ處分ヲ受ケタル者ハ其ノ官職ヲ失ヒタル日ヨリ二年間官職ニ就クコトヲ得ス

免官ノ處分ヲ受ケ其ノ情重キ者ハ位記ヲ返上セシム

第五條 減俸ハ一月以上一年以下年俸月割額若ハ月俸ノ三分之一以下ヲ減ス

第六條 勅任官ノ免官及減俸ハ懲戒委員會ノ議決ヲ具シ内閣總理大臣之ヲ奏請シ奏任官ノ免官ハ懲戒委員會ノ議決ヲ具シ内閣總理大臣ヲ經テ本屬長官之ヲ奏請シ裁可ニ依リ之ヲ行フ

奏任官ノ減俸及判任官ノ免官及減俸ハ懲戒委員會ノ議決ニ依リ本屬長官之ヲ行フ

譴責ハ本屬長官之ヲ行フ

第七條 懲戒ニ付セラルヘキ事件刑事裁判所ニ繫屬スル間ハ同一事件ニ對シ懲戒委員會ヲ開クコトヲ得ス

懲戒委員會ノ議決前懲戒ニ付スヘキ者ニ對シ刑事訴追ノ始マリタルトキハ事件ノ判決ヲ終ハルマテ懲戒委員會ノ開會ヲ停止ス

第二章 懲戒委員會

第一款 總則

第八條 懲戒委員會ヲ分テ文官高等懲戒委員會及文官普通懲戒委員會トス

第九條 文官高等懲戒委員會ハ高等官ノ懲戒ヲ議決シ文官普通懲戒委員會ハ判任官ノ懲戒ヲ議決ス

第二款 文官高等懲戒委員會

第十條 文官高等懲戒委員會ハ委員長一人委員六人ヲ以テ組織ス

第十一條 委員長ハ樞密顧問官ノ中ヨリ委員ハ行政裁判所長官、勅任行政裁判所評定官、勅任判事

及其ノ他ノ勅任文官ノ中ヨリ内閣總理大臣ノ奏請ニ依リ之ヲ命ス

委員會ニ豫備委員六人ヲ置キ前項ノ例ニ依リ之ヲ命ス

第十二條 委員會ハ委員長及委員ヲ併セ五人以上出席スルニ非サレハ會議ヲ開クコトヲ得ス

委員會ノ議事ハ多數ニ依リ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ委員長之ヲ決ス

第十三條 委員長事故アルトキハ上席ノ委員之ヲ代理ス

委員中事故アルトキ又ハ闕員アルトキハ委員長ハ豫備委員ノ中ヨリ代理ヲ命ス

第十四條 委員及豫備委員ノ任期ハ三年トス

委員及豫備委員中闕員アリテ補闕ノ爲任命セラレタル者ハ前任者ノ殘任期間在任ス

第十五條 委員長及委員ハ左ノ事項ニ該當スルトキハ之ヲ免ス

一 其ノ官職ヲ失ヒタルトキ

二 委員會所在地以外ニ任所ヲ轉シタルトキ

第十六條 委員會ニ幹事一人ヲ置ク

第十七條 幹事ハ高等官ノ中ヨリ内閣總理大臣ノ奏請ニ依リ之ヲ命ス

第十八條 幹事ハ委員長ノ命ヲ承ケ委員會ノ議事ヲ準備シ庶務ヲ統理ス

第十九條 委員會ニ書記三人ヲ置ク

第二十條 書記ハ判任官ノ中ヨリ委員長之ヲ命ス

第二十一條 書記ハ幹事ノ命ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第三款 文官普通懲戒委員會

第二十二條 文官普通懲戒委員會ハ左ノ各官廳ニ之ヲ置ク

一 内閣

一 樞密院

一 各省

一 臺灣總督府

一 會計検査院

一 行政裁判所

一 警視廳

一 北海道廳

一 府縣

一 臺灣ノ縣及廳

一 貴族院事務局

一 衆議院事務局

前項ノ外各省大臣ニ於テ必要アリト認ムルトキハ其ノ所轄官廳ニ文官普通懲戒委員會ヲ置クコトヲ得

第二十三條 委員長ハ各官廳ノ長官ヲ以テ之ニ充ツ但シ内閣ニ在テハ法制局長官樞密院ニ在テ

ハ書記官長各省ニ在テハ次官ヲ以テ之ニ充ツ

委員ハ二人乃至八人トシ當該官廳高等官ノ中ヨリ本廳長官之ヲ命ス但シ内閣ニ在テハ賞勳局

法制局及内閣所屬高等官ノ中ヨリ之ヲ命ス

第二十四條 委員會ハ委員長及委員二人以上出席スルニ非サレハ會議ヲ開クコトヲ得ス

第二十五條 委員長事故アルトキハ上席ノ委員之ヲ代理ス

第二十六條 委員會ニ書記二人ヲ置ク

第二十七條 書記ハ委員長所屬官廳ノ判任官ノ中ヨリ委員長之ヲ命ス

第二十八條 書記ハ委員長ノ命ヲ承ケ庶務ニ従事ス

第三章 懲戒手續

第二十九條 本廳長官ハ所部ノ官吏ニシテ懲戒ニ當ルヘキ所爲アリト思料スルトキハ證據ヲ具ヘ書面ヲ以テ懲戒委員會ノ審査ヲ要求スヘシ

第三十條 前條ノ要求アリタルトキハ委員長ハ期日ヲ定メテ委員會ヲ招集スヘシ

委員會ハ必要ト認ムル場合ニ於テハ本人ノ出頭ヲ命スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ本人所屬官廳ヨリ内國旅費規則ニ依リ本官相當ノ旅費ヲ給スヘシ

第三十一條 委員會ニ於テ議決ヲ爲シタルトキハ其ノ理由ヲ具シ本廳長官ニ覆申スヘシ

第三十二條 委員長及委員ハ自己又ハ其ノ親族ニ關スル事件ノ會議ニ參與スルコトヲ得ス

第三十三條 委員會ノ審査手續ハ委員會之ヲ定ム

附則

第三十四條 高等官試補ハ高等官ニ準シ判任官見習ハ判任官ニ準シ本令ヲ適用ス

第三十五條 本令ハ明治三十二年四月十日ヨリ施行ス

官吏懲戒例ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

朕臨時臺灣土地調查局官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十七日

内閣總理大臣 侯爵 山縣有朋
内務大臣 侯爵 西鄉從道

勅令第六十四號 (官報 三月二十八日)

臨時臺灣土地調查局官制中左ノ通改正ス

第四條 事務官ハ專任トス上官ノ命ヲ承ケ局中ノ庶務ヲ分掌ス

第六條 屬及技手ハ通シテ專任三百人判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ屬ハ庶務ニ従事シ技手ハ技術ニ従事ス

第七條 削除

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

〔參照〕

勅令第二百一號臨時臺灣土地調查局官制(明治三十一年九月一日官報)抄録

第四條 事務官ハ專任トス上官ノ命ヲ承ケ局中ノ庶務ヲ分掌ス

第六條 屬ハ專任五十人判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

第七條 技手ハ專任四十人判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ従事ス

朕阿片賣下代價ヲ收入印紙ニテ納付セシムルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月 勅令 第六十五號

明治三十三年三月二十七日

大藏大臣 伯爵松方正義
内務大臣 侯爵西郷從道

勅令第六十五號 (官報 三月二十八日)

阿片法ニ依リテ納ムヘキ阿片賣下代價ハ收入印紙ヲ以テ之ヲ納ムヘシ

附則

本令ハ明治三十三年四月一日ヨリ施行ス

除海軍將校分限令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十三年三月二十七日

海軍大臣 山本權兵衛

勅令第六十六號 (官報 三月二十八日)

海軍將校分限令中左ノ通改正ス

第四條乃至第九條及第十一條ヲ削リ第十條ヲ第四條ニ改ム

附則

本令ハ明治三十三年四月一日ヨリ施行ス

〔參照〕

勅令第七十九號海軍將校分限令(明治三十四年七月二十三日官報)抄録

第四條 將校ノ位置ヲ分ツコト左ノ如シ

第一 現役

第二 豫備

第三 後備

第四 退役

第五條 現役トハ現ニ軍務ヲ奉スル者修學ヲ命セラレタル者將官海軍部内ノ文官ニ任セラレタル者及待命者ヲ云フ
職ニ在ル者ハ現役ニ準ス

待命トハ現職ナクシテ命ヲ待ツ者ヲ云フ

休職トハ左ニ掲ケル事項ノ一ニ依リ職務ナキ者ヲ云フ

一 待命一箇年ヲ過タル者

二 傷疾若クハ疾病六箇月ニ至リ尙ホ快復ノ候ナキ者

三 本人ノ請願ニ依リ修學ヲ許容シタル者

四 前項ノ修學者ニシテ修學満期ノ後就職ノ命ナキ者

五 上長官士官海軍部内ノ文官ニ專任シタルトキ

停職トハ其行爲懲戒スヘキコトアリ其情狀稍輕ク在職又ハ就職ヲ停メラル、者ヲ云フ但停職者ハ一箇年ノ後ニ非レニ就職スルコトヲ得ス

第六條 豫備トハ年齢満限ニ至ラスシテ左ニ掲ケル事項ノ一ニ依リ現役ヲ退キタル者ヲ云フ

第一 明治三十三年勅令第九十九號第三條ニ依リ現役ヲ退キタルトキ

第二 休職ニ入り一箇年ニ至リ就職セサルトキ但第五條第三項ノ第三ニ該ル者ハ此限ニアラス

第三 停職ニ入り一箇年ニ至リ就職セサルトキ

第四 海軍部外ノ文官ニ專任シタルトキ

第五 貴族院令第四條第五條ニ依リ貴族院議員ト爲リタルトキ

第七條 後備トハ年齢満限ニ至リ現役ヲ退キタル者及豫備満期ニ至リタル者ヲ云フ

豫備後備ノ服役年期ハ別ニ之ヲ定ム

第八條 退役トハ後備満期ニ至リタル者又ハ傷疾疾病ノ爲メ永久服役ニ堪ヘスシテ現役又ハ豫備又ハ後備ヲ退キタル者ヲ云フ

第九條 豫備後備者ハ召集ニ應スヘキモノトス

第十一條 本令公布以前休職ニ入り一箇年ヲ過キタルモノハ本令公布ノ日ヨリ豫備トシ其他ハ休職ニ入りタル日ヨリ起算シ二箇年ニ至リ豫備ニ入ルモノトス

朕海軍准士官ノ分限ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十七日

海軍大臣山本權兵衛

勅令第六十七號 (官報 三月二十八日)

海軍准士官ノ分限ニ關シテハ海軍將校分限令ヲ準用ス

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

朕海軍高等武官准士官服役令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十七日

海軍大臣山本權兵衛

勅令第六十八號 (官報 三月二十八日)

海軍高等武官准士官服役令

第一條 海軍高等武官及准士官ノ服役ヲ分チテ現役豫備役及後備役トス

服役ヲ免セラレ又ハ服役ヲ終リタルトキハ退役トス

第二條 現役トハ武官ヲ以テ充ツヘキ軍務ニ服スルヲ謂フ現役中海軍大臣又ハ海軍次官ニ任セラ

レタル者修學ヲ命セラレタル者及待命休職停職ニ在ル者ハ現役ニ在ル者ト看做ス
待命トハ就職ノ命ヲ待ツヲ謂フ
休職トハ左ニ掲クル事項ノ一ニ該リ武官ヲ以テ充ツヘキ軍務ニ服セサルヲ謂フ

- 一 待命一箇年ヲ過キタルトキ
- 二 傷痍ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リ六箇月ヲ經過スルモ尙恢復ノ徵候ナキトキ
- 三 修學ノ請願ヲ爲シ許可ヲ受ケタルトキ
- 四 修學ノ許可ヲ受ケタル者修學満期ニ至リ就職ヲ命セラレサルトキ
- 五 現役中海軍部内ノ文官ニ任セラレタルトキ但シ海軍大臣又ハ海軍次官タル者及修學ヲ命セラレタル者ハ此ノ限ニアラス
- 六 現役中海軍部内ノ文官ニ任セラレタルニ因リ休職ト爲リタル者文官ヲ免セラレ就職ノ命

ナキトキ

停職トハ懲戒スヘキ行爲アリテ一時職務ヲ免セラレ又ハ就職ヲ停メラレタルヲ謂フ

停職ヲ命セラレタル者ハ六箇月ヲ經ルニ非サレハ就職セシムルコトヲ得ス但シ戰時若ハ事ニ變

際シテハ此ノ限ニアラス

第三條 高等武官及准士官ノ現役年限年齢ハ左ノ如シ

大將 六十八年

中將相當官 六十五年

中將 六十二年

少將相當官 六十年

少將 五十八年

造船大監 造兵大監

朕海軍准士官ノ分限ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十七日

海軍大臣山本權兵衛

勅令第六十七號(官報 三月二十八日)

海軍准士官ノ分限ニ關シテハ海軍將校分限令ヲ準用ス

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

朕海軍高等武官准士官服役令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十七日

海軍大臣山本權兵衛

勅令第六十八號(官報 三月二十八日)

海軍高等武官准士官服役令

第一條 海軍高等武官及准士官ノ服役ヲ分チテ現役豫備役及後備役トス

服役ヲ免セラレ又ハ服役ヲ終リタルトキハ退役トス

第二條 現役トハ武官ヲ以テ充ツヘキ軍務ニ服スルヲ謂フ現役中海軍大臣又ハ海軍次官ニ任セラ

レタル者修學ヲ命セラレタル者及待命休職停職ニ在ル者ハ現役ニ在ル者ト看做ス

待命トハ就職ノ命ヲ待ツヲ謂フ

休職トハ左ニ掲クル事項ノ一ニ該リ武官ヲ以テ充ツヘキ軍務ニ服セサルヲ謂フ

一 待命一箇年ヲ過キタルトキ

二 傷痕ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リ六箇月ヲ經過スルモ尙快復ノ徵候ナキトキ

三 修學ノ請願ヲ爲シ許可ヲ受ケタルトキ

四 修學ノ許可ヲ受ケタル者修學満期ニ至リ就職ヲ命セラレサルトキ

五 現役中海軍部内ノ文官ニ任セラレタルトキ但シ海軍大臣又ハ海軍次官タル者及修學ヲ命

セラレタル者ハ此ノ限ニアラス

六 現役中海軍部内ノ文官ニ任セラレタルニ因リ休職ト爲リタル者文官ヲ免セラレ就職ノ命

ナキトキ

停職トハ懲戒スヘキ行爲アリテ一時職務ヲ免セラレ又ハ就職ヲ停メラレタルヲ謂フ

停職ヲ命セラレタル者ハ六箇月ヲ經ルニ非サレハ就職セシムルコトヲ得ス但シ戰時若ハ事ニ變

際シテハ此ノ限ニアラス

第三條 高等武官及准士官ノ現役定限年齢ハ左ノ如シ

大將 六十八年

中將相當官 六十五年

中將 六十二年

少將相當官 六十年

少將 五十八年

造船大監 造船大監

機關大監	軍醫大監	五十五年
主計大監	藥劑監	五十五年
造船中監	造兵中監	五十二年
大佐	水路監	五十二年
藥劑正	造船少監	五十二年
造兵少監		
兵曹長	軍樂長	五十一年
船匠長	機關兵曹長	五十一年
看護長	筆記長	五十一年
上等機關兵曹		
機關中監	軍醫中監	五十年
主計中監		
中佐	水路正	四十八年
大藥劑士	造船大技士	四十八年
造兵大技士	水路大技士	四十八年
上等兵曹	上等信號兵曹	四十八年
軍樂師	船匠師	四十八年
看護師	上等筆記	四十八年
少佐	機關少監	四十五年
軍醫少監	主計少監	四十五年
大機關士	大軍醫	四十五年
大主計		

大尉	中藥劑士	四十二年
造船中技士	造兵中技士	四十二年
水路中技士	少藥劑士	四十二年
造船少技士	造兵少技士	四十二年
水路少技士		
中機關士	中軍醫	四十年
中主計	少機關士	四十年
少軍醫	少主計	四十年
中尉	少尉	三十八年

元帥タル大将ノ現役年限年齢ハ之ヲ定メス

第四條 高等武官及准士官ハ現役年限年齢ニ滿ツルマテ現役ニ服ス

第五條 現役高等武官及准士官其ノ年限年齢ニ滿ツルモ他人ヲ以テ代フヘカラサル職ニ在ルトキハ留任ヲ命スルコトアルヘシ

第六條 現役高等武官及准士官其ノ年限年齢ニ滿ツルモ戰時若ハ事變ニ際スルトキ又ハ航海中或ハ外國駐在中ハ現役期限ヲ延ハスコトアルヘシ

第七條 現役高等武官及准士官其ノ年限年齢ニ滿タサルモ服役十一年以上ニシテ現役ニ堪ヘサルトキハ將官同相當官ハ上諭ニ依リ上長官士官及准士官ハ海軍大臣旨ヲ諭シテ現役ヲ退カシムルコトアルヘシ

第八條 高等武官及准士官現役年限年齢ニ達セシメテ左ニ掲クル事項ノ一ニ該ルトキハ豫備役ニ服セシム

第七條ニ依リ現役ヲ退キタルトキ

- 一 休職ヲ命セラレタル後二箇年ニ至リ就職ヲ命セラレサルトキ但シ第二條第三項第三ニ該ルトキハ此ノ限ニアラス
- 二 停職ヲ命セラレタル後一箇年半ニ至リ就職ヲ命セラレサルトキ
- 三 海軍部外ノ文官ニ任セラレタルトキ但シ武官ヲ以テ充ツヘキ軍務ニ服スル者海軍大臣又ハ海軍次官タル者及修學ヲ命セラレタル者ハ此ノ限ニアラス
- 四 貴族院令第四條第五條ニ依リ貴族院議員トナリタルトキ
- 五 海軍准士官下士任用進級條例第十六條第十八條及第十九條ニ依リ豫備役下士ニシテ准士官ニ任用セラレタルトキ及同條例第十七條ニ依リ下士ニシテ豫備役ニ入りタル際准士官ニ任用セラレタルトキ
- 六 第九條 豫備役高等武官及准士官ノ豫備役ニ服スヘキ期限ハ第三條ニ掲クル現役年限年齢ニ滿ツルマテトス

豫備役ニ在リ又ハ豫備役ニ入りタル際兵曹長ヨリ中尉ニ機關兵曹長ヨリ中機關士ニ進級セシ者ノ豫備役ニ服スヘキ期限ハ各其ノ前官ノ現役年限年齢ニ滿ツルマテトス

第十條 高等武官及准士官左ノ事項ノ一ニ該ルトキハ後備役ニ服セシム第五條ニ依リ留任ヲ命セラレタル者亦同シ

- 一 現役年限年齢ニ至リ現役ヲ退キタルトキ
- 二 豫備役滿期ニ至リタルトキ
- 三 海軍准士官下士任用進級條例第十六條第十八條及第十九條ニ依リ後備役下士ニシテ准士官ニ任用セラレタルトキ及同條例第十七條ニ依リ下士ニシテ後備役ニ入りタル際准士官ニ任用セラレタルトキ

官ニ任用セラレタルトキ及同條例第十七條ニ依リ下士ニシテ後備役ニ入りタル際准士官ニ任用セラレタルトキ

- 第十一條 高等武官及准士官ノ後備役ニ服スヘキ期限ハ五箇年トス
- 第十二條 海軍准士官下士任用進級條例第十六條第十七條及第十八條ニ依リ准士官ニ任セラレタル者及豫備役後備役ニ在ル者ニシテ同條例第十九條ニ依リ准士官ニ任セラレタルトキ其ノ豫備役後備役服役期限ハ准士官ニ任セラレサルトキニ同シ
- 第十三條 豫備役後備役高等武官及准士官ハ各其ノ服役期限滿ツルモ戰時若ハ事變ニ際スルトキ又ハ航海中或ハ外國駐在中ハ各其ノ服役期限ヲ延ハスコトアルヘシ
- 第十四條 第五條ニ依リ留任ヲ命シ又ハ第六條及第十三條ニ依リ服役ヲ延期シタル者ノ各服役年期ノ計算ハ留任セサルトキ又ハ服役ヲ延期セサルトキニ同シ
- 第十五條 高等武官及准士官左ノ事項ノ一ニ該ルトキハ退役トス
 - 一 後備役滿期ニ至リタルトキ
 - 二 傷痍若ハ疾病ニ因リ永久服役ニ堪ヘサルカ爲現役豫備役又ハ後備役ヲ免セラレタルトキ
 - 三 海軍准士官下士任用進級條例第十六條第十七條及第十八條ニ依リ准士官ニ任セラレタル者或ハ豫備役後備役ニ在ル者ニシテ同條例第十九條ニ依リ准士官ニ任セラレタル者准士官ニ任セラレサル場合ニ於テ免官トナルヘキトキ
- 第十六條 豫備役後備役ニ在ル高等武官及准士官ハ召集ニ應スヘキモノトス
- 第十七條 豫備役後備役高等武官及准士官ニシテ文官ニ任セラレ他人ヲ以テ代フヘカラサル職務ヲ奉スル者又ハ外國ニ在ル者及市町村長助役收入役タル者ハ演習ノ爲召集スルコトナシ法律ヲ

以テ設立シタル議會ノ議員タル者其ノ開會中亦同シ

第十八條 前條ニ掲クル他人ヲ以テ代フヘカラサル職務ヲ奉スル者ニ就テハ豫メ當該官廳ヨリ内閣ニ具狀シテ演習召集免除ノ認可ヲ受ケ海軍大臣ニ通報スヘシ其ノ事故止ミタルトキ亦同シ

附則

第十九條 本令施行ノ際既ニ第三條ノ現役定限年齢ヲ超過シタル者ハ本令施行ノ日ヨリ後備役ニ服セシム

第二十條 本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

第二十一條 明治三十二年勅令第四百四十六號同二十三年勅令第九十九號同二十五年勅令第四十一號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

〔參照〕

明治三十二年十二月三日勅令第四百四十六號 海軍將校同相當官豫備後備服役年期ノ件 同二十三年一月二十日勅令第九十九號 海軍軍人現役定限年齢ノ件 同二十五年五月九日勅令第四十一號 海軍准士官服役令ナリ

朕海軍高等武官進級條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十七日

勅令第六十九號 (官報 三月二十八日)

海軍高等武官進級條例中左ノ通改正ス

海軍大臣山本權兵衛

第十九條 戰時若ハ事變ニ際シ現役海軍高等武官ニ缺員ヲ生シタル場合ニ於テ現役海軍高等武官ヨリ進級セシメ其ノ補充ヲナス能ハサルトキハ前諸條ニ準據シ召集中ノ豫備役後備役海軍高等武官及留任中ノ海軍高等武官ヲ進級セシムルコトヲ得

本條ノ場合ニ於テハ召集中及留任中ノ勤務日數ヲ現役中ノ勤務日數ニ通算ス

第二十條 戰時若ハ事變ニ際シ勳績アル者又ハ多年軍務ニ從事シ進級資格ヲ備ヘタル者ニシテ海軍高等武官准士官服役令第八條第一第二第四第五第十條第一及第十五條第二ニ依リ現役ヲ退キタルトキ若ハ留任ヲ免セラレタルトキハ其ノ際特ニ進級セシムルコトヲ得但シ恩給ヲ受クル資格ニ在テハ前官等ニ依ル

第二十一條 中「豫備後備」ヲ「豫備役後備役」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

〔參照〕

勅令第十號海軍高等武官進級條例 (明治二十九年二月十九日官報抄録) 第十九條 戰時若クハ事變ニ際シ現役海軍高等武官ニ缺員ヲ生シタル場合ニ於テ現役海軍高等武官ヨリ進級セシメ其ノ補充ヲナス能ハサルトキハ前諸條ニ準據シ召集中ノ豫備後備海軍高等武官ヲ進級セシムルコトヲ得

本條ノ場合ニ於テハ召集中ノ勤務日數ヲ現役中ノ勤務日數ニ通算ス

第二十條 戰時若クハ事變ニ際シ勳績アル者又ハ多年軍務ニ從事シ進級資格ヲ備ヘタル者ニシテ海軍將校分限令第六條第一項第二項第四項第五項及第七條第八條ニ依リ現役ヲ退キタルトキハ其ノ際特ニ進級セシムルコトヲ得但シ恩給ヲ受クル資格ニ在テハ前官等ニ依ル

第二十一條 豫備後備ノ海軍高等武官ニシテ戰時若ハ事變ニ際シ召集中勳績アリタル者ハ召集ヲ解キタル際特ニ進級セシムルコトヲ得 召集中ニアラサル豫備後備ノ海軍高等武官ニシテ軍事ニ關シ拔群ノ功績アルトキハ特ニ進級セシムルコトヲ得 前二項ニ依リ進級セシ者ノ恩給ヲ受クル資格ニ在テハ前官等ニ依ルコトヲ得ス

朕海軍技術會議條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十七日

海軍大臣山本權兵衛

勅令第七十號 (官報 三月二十八日)

海軍技術會議條例中左ノ通改正ス

第六條 海軍技術會議ニ書記二人技手二人ヲ置キ上官ノ命ヲ承ケ服務セシム

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

(參照)

勅令第五十三號海軍技術會議條例(明治二十六年五月二十二日官報)抄録

第六條 海軍技術會議ニ書記二人ヲ置キ事務ニ服セシム

朕海軍志願兵條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十七日

海軍大臣山本權兵衛

勅令第七十一號 (官報 三月二十八日)

海軍志願兵條例

第一條 海軍志願兵トハ海軍兵役ニ服セントシテ志願シ認可ヲ得海軍志願兵籍ニ編入セラレタル者ヲ謂フ

第二條 海軍志願兵トシテ徵募スヘキ卒ノ種別ハ左ノ如ク

水兵、信號兵、軍樂生、木工、機關兵、鍛冶、看護、主廚

第三條 信號兵ハ所要ニ應シ水兵中ヨリ適當ノ者ヲ選ミ之ニ轉セシム其ノ規程ハ海軍大臣之ヲ定ム

第四條 志願兵ノ徵募ハ其ノ年ニ於テ左ノ各項ニ適合スル者ニ就キ之ヲ行フ

一 水兵、機關兵ハ十七年以上二十一年未滿

二 木工、鍛冶、看護、主廚ハ十七年以上二十六年未滿

三 軍樂生ハ十六年以上十九年未滿

第五條 左ニ掲クル者ハ志願兵ノ徵募ニ應スルコトヲ得ス

一 陸軍ノ豫備役後備役及第一補充兵役ニ在ル者

二 徵兵令第二十八條ニ當ル者

三 禁錮以上ノ刑ニ處セラレタル者又ハ賭博犯ノ處分ヲ受ケタル者

四 刑事被告人

五 復權ヲ得サル家資分散者破産者若ハ其ノ相續人

六 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者若ハ其ノ相續人

第六條 軍樂生ニシテ入團後三箇月ヲ經過シ技藝發達ノ目途ナキ者ハ軍樂生ヲ免ス

第七條 志願兵ノ服役ハ海軍下士卒服役條例ニ依ル
第八條 志願兵現役中ハ家族アル者ニ限り扶助金トシテ一箇月金八十五錢ヲ其ノ家族ニ給ス但シ
左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其ノ間支給ヲ停止ス

一 擅ニ艦船團其ノ他各部ヲ離レ若ハ職役ヲ離レ若ハ允許ヲ得テ他方ニ赴キ故ナク歸著ノ期限
ニ後レ二箇月ヲ過キタルトキハ其ノ翌月ヨリ自首若ハ捕縛ノ前月マテ

二 禁錮ノ刑ニ處セラレタルトキハ其ノ翌月ヨリ刑期満限ノ前月マテ

第九條 海軍大臣ハ志願兵徵募ノ爲海軍志願兵徵募區ヲ定メ鎮守府ヲシテ之ヲ管セシム

第十條 海軍大臣ハ毎年志願兵トシテ採用スヘキ人員ヲ定メ鎮守府ヲシテ徵募セシム

附則

第十一條 本條例施行ノ際現ニ扶助金一箇月金一圓七十五錢ヲ受クル志願兵ノ家族ニハ其ノ現役
満期ノ月迄同金額ヲ給ス但シ再服役ヲ許シタルトキハ再服役ノ翌月ヨリ第八條ノ金額ヲ支給ス

第十二條 海軍志願兵徵募ニ關スル細則及家族扶助金支給ニ關スル細則ハ海軍大臣之ヲ定ム

第十三條 本條例ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

第十四條 明治三十一年勅令第八十三號海軍志願兵徵募規則ハ本條例施行ノ日ヨリ廢止ス

朕外國駐在海軍武官手當金規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十三年三月二十七日

海軍大臣山本權兵衛

勅令第七十二號(官報三月二十八日)

外國駐在海軍武官手當金規則

第一條 外國駐在ヲ命セラレタル海軍武官ニハ駐在中別表定額以內ノ手當金ヲ支給ス

第二條 手當金ハ年額ヲ十三分シテ毎月下旬ニ之ヲ支給ス

第三條 本則ニ依リ給スル手當金ハ年額半箇年分以內ニ於テ前金渡ヲ爲スコトヲ得

第四條 此ノ規則施行ノ細則ハ海軍大臣之ヲ定ム

附則

第五條 此ノ規則ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

(別表)

外國駐在海軍武官手當金表

國名	英、露、米、佛、獨、澳、伊、清、韓
年額	四千元 三千五百圓 二千四百圓

朕海軍下士卒手當金規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十七日

海軍大臣山本權兵衛

勅令第七十二號(官報三月二十八日)

明治三十三年三月 勅令 第七十三號

海軍下士卒手當金規則第四條左ノ通改正ス

第四條 志願兵ニシテ再服役ノ許可ヲ受ケ現役ニ就キタル者ニハ第一期ニ在テハ十五圓第二期ニ

在テハ二十圓第三期以上ニ在テハ每期二十五圓ノ手當金ヲ給ス

徵兵ニシテ再服役ノ許可ヲ受ケ志願兵籍ニ編入セラレタル者ニハ其ノ際十圓ノ手當金ヲ給シ志

願兵籍ニ編入後再服役ノ許可ヲ受ケ現役ニ就キタル者ニハ更ニ前項ノ規定ニ依リ手當金ヲ給ス

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

〔參照〕

勅令第二百四十五號海軍下士卒手當金規則(明治三十年七月二十六日官報抄録)

第四條 徵兵ニシテ再服役ノ許可ヲ受ケ現役ニ就キタル者ニハ每期十圓ノ手當金ヲ給ス

朕稅務管理局官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十八日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
大藏大臣伯爵松方正義

勅令第七十四號(官報 三月二十九日)

稅務管理局官制中左ノ通改正ス

第六條中「稅務屬」ヲ「判任官」ニ改ム

第九條中「五千六百三十五人」ヲ「五千八百十九人」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

〔參照〕

勅令第三百三十七號稅務管理局官制(明治二十九年十月二十一日官報抄録)

第六條 局長ハ所部ノ官吏ヲ監督シ稅務屬ノ任免ヲ大藏大臣ニ具狀ス

第九條 稅務屬及技手ハ判任トシ稅務屬ハ五千六百三十五人技手ハ三百七十五人ヲ以テ定員トス稅務屬及技手ハ稅務管理

局若ハ稅務署ニ分屬シ稅務屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務及検査ニ從事シ技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ酒類ノ鑑定其ノ他技術ニ

關スル事務ニ従事ス

朕船舶司檢所官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十八日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
遞信大臣子爵芳川顯正

勅令第七十五號(官報 三月二十九日)

船舶司檢所官制中左ノ通改正ス

第五條中「二十八人」ヲ「三十人」ニ改ム

第七條中「二十五人」ヲ「三十二人」ニ改ム

第七條ノ二中「十三人」ヲ「二十七人」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

〔參照〕

勅令第七十九號船舶司檢所官制(明治二十九年三月三十日官報)抄錄
第五條 司檢官補ハ委任トシ專任二十人ヲ以テ定員トス司檢官ノ事務ヲ助ケ
第七條 書記ハ判任トシ專任二十五人ヲ以テ定員トス上官ノ命ヲ承ケ庶務會計ニ從事ス
第七條ノ二 技手ハ專任十三人ヲ以テ定員トス

朕臺灣總督府稅關官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十八日

內閣總理大臣侯爵山縣有朋
內務大臣侯爵西鄉從道

勅令第七十六號(官報 三月二十九日)

臺灣總督府稅關官制中左ノ通改正ス

第五條 各稅關ヲ通シテ左ノ職員ヲ置ク

鑑定官	專任二人	奏任
鑑定官補	專任十一人	判任
屬	專任四十八人	判任
監吏	專任二十四人	判任
監吏補	專任百二十四人	判任

第八條中「鑑定吏」ヲ「鑑定官補」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

〔參照〕

勅令第九十二號臺灣總督府稅關官制(明治二十九年三月三十一日官報)抄錄

第五條 各稅關ヲ通シテ左ノ職員ヲ置ク

鑑定官	二人	奏任
鑑定吏	六人	判任
屬	四十八人	判任
監吏	十五人	判任
監吏補	九十八人	判任

第八條 鑑定吏ハ上官ノ指揮ヲ承ケ貨物ノ検査鑑定ニ從事ス

朕臺灣總督府燈臺所官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十八日

內閣總理大臣侯爵山縣有朋
內務大臣侯爵西鄉從道

勅令第七十七號(官報 三月二十九日)

臺灣總督府燈臺所官制中左ノ通改正ス

第六條中「二十五人」ヲ「二十八人」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

〔參照〕

勅令第九十六號臺灣總督府廳議所官制(明治二十九年三月三十一日官報)抄錄
第六條 看守ハ各所ヲ通シテ二十五人ヲ以テ定員トス

除所得稅法施行規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十九日

大藏大臣伯爵松方正義

勅令第七十八號(官報 三月三十日)

所得稅法施行規則

- 第一條 所得稅法第四條第一項第三號ニ依リ總收入金額ヨリ控除スヘキモノハ種苗蠶種肥料ノ購買費、家畜其ノ他ノ飼養料、仕入品ノ原價、原料品ノ代價、場所物件ノ修繕費、其ノ借入料、場所物件又ハ業務ニ係ル公課、雇人ノ給料其ノ他其ノ收入ヲ得ルニ必要ナル經費ニ限ル但シ家事上ノ費用及之ト關聯スルモノハ之ヲ控除セス
- 第二條 第三種ノ所得金額ハ申告、調査又ハ決定當時ノ現況ニ依リ所得稅法第五條ノ所得ヲ除キ之ヲ算出スヘシ
- 第三條 納稅義務アル法人ハ每事業年度通常總會後七日以内ニ損益計算書ヲ所轄稅務署ニ提出スヘシ
- 第四條 第三種ノ所得ニ付納稅義務アル者ハ所得ノ種類及金額ヲ所轄稅務署ニ申告スヘシ

所得稅法第三條第二項ニ依リ同居者ノ所得ヲ合算スヘキ場合ニ於テハ其ノ所得ヲ區分シ同時ニ之ヲ申告スヘシ

第五條 所得調査委員ノ定數ハ五人トス但シ特別ノ事由アリト認ムルトキハ大藏大臣ハ之ヲ增減スルコトヲ得

第六條 稅務署長ハ調査委員選舉人ノ選舉前選舉資格ヲ有スル者ノ住所氏名ヲ其ノ市區町村長又ハ戶長ニ通知スヘシ

第七條 調査委員選舉人ノ選舉ヲ執行スルトキハ市區町村長又ハ戶長ハ其ノ選舉資格ヲ有スル者二人ヲ選任シ開票ニ立會ハシムヘシ

第八條 調査委員ノ選舉ヲ執行スルトキハ稅務署長ハ調査委員選舉人二人ヲ選任シ開票ニ立會ハシムヘシ

第九條 調査委員選舉人及調査委員ノ選舉ニ於テ投票ニ記載シタル八員其ノ選舉スヘキ定數ニ超エタルトキハ末尾ニ記載シタル人名ヲ順次棄却スヘシ

第十條 調査委員又ハ補闕員ヲ辭スルコトヲ得ル者ハ稅務管理局長ニ於テ已ムヲ得スト認ムヘキ事故アル者ニ限ル

第十一條 調査委員會ノ會長出席セサルトキハ出席シタル調査委員中ノ年長者之ヲ代理スヘシ

第十二條 調査委員會ノ決議ハ會長ヨリ之ヲ稅務署長ニ通知スヘシ

第十三條 稅務管理局長ハ所得稅法第九條第三十條第三十一條ニ依リ所得金額ヲ決定シ之ヲ納稅義務者ニ通知スヘシ

第十四條 所得稅法第三十六條ニ依リ審査ヲ求ムトスル者ハ事由ヲ具シ證憑書類ヲ添へ稅務管

理局長ニ申出ツヘシ

第十五條 各稅務管理局所轄内ニ審査委員會ヲ置ク

第十六條 收稅官吏ヲ以テスヘキ審査委員バ大藏大臣之ヲ命シ調査委員ヲ以テスヘキ審査委員ハ稅務管理局所轄内ノ調査委員毎年之ヲ選舉ス

第十七條 審査委員ノ選舉事務ハ稅務管理局長之ヲ執行ス

第十八條 審査委員ノ選舉ヲ執行セムトスルトキハ稅務管理局長選舉期日ヲ定メ所轄内調査委員ノ氏名ト共ニ之ヲ各調査委員會ニ通知スヘシ

第十九條 選舉ハ記名投票ヲ以テ之ヲ行フ

投票ハ稅務管理局ニ差出スヘシ

第二十條 稅務管理局長ハ所轄内調査委員二人ヲ選任シ開票ニ立會ハシムヘシ

第二十一條 選舉ハ投票ノ多數ヲ得タル者ヲ以テ當選トス投票ノ數同シキトキハ年長者ヲ取り同年月ナルトキハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム

第二十二條 審査委員ノ選舉終了シタルトキハ稅務管理局長ハ當選人ノ氏名ヲ公示スヘシ

第二十三條 審査委員會ハ稅務管理局長ノ通知ニ依リ之ヲ開ク

第二十四條 審査委員會ハ毎年開會ノ初ニ於テ審査委員中ヨリ會長ヲ選舉スヘシ

第二十五條 審査委員會ハ定員ノ過半數ニ當ル委員出席スルニアラサレハ決議スルコトヲ得ス

議事ハ出席員ノ多數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ會長ヲ決スル所ニ依ル

第二十六條 審査委員會ノ會長出席セサルトキハ出席シタル審査委員中ノ年長者之ヲ代理スヘシ

第二十七條 審査委員ハ自己ノ所得金ニ關スル議事ニ與ルコトヲ得ス

第二十八條 稅務管理局長又ハ其ノ代理人ハ審査委員會ニ出席シテ意見ヲ陳述スルコトヲ得

第二十九條 審査委員會ノ決議ハ會長ヨリ之ヲ稅務管理局長ニ通知スヘシ

第二十條 稅務管理局長ハ所得稅法第二十七條ニ依リ所得金額ヲ決定シ之ヲ納稅義務者ニ通知スヘシ

第三十一條 納稅義務アル法人損益計算書ヲ提出セサルトキハ政府其ノ損益ヲ調査シ其ノ所得金額ヲ定ム

第三十二條 所得稅ハ所得稅法第九條第三十條第三十一條ニ依ル決定金額ニ依リ之ヲ徵收ス

前項ノ決定金額ハ所得稅法第三十七條第三十九條第四十一條ノ結果ニ依ルノ外之ヲ變更セス

第三十三條 所得稅法第三條第二項ノ場合ニ於テ同居者所得金額決定後別居スルモ所得金額決定當時ノ稅率ニ依リ其ノ年ノ所得稅ヲ納ムヘシ

第三十四條 公ニ募集シタル公債社債ノ利子ヲ支拂フ者ハ支拂ノ際所得稅金額ヲ控除スヘシ

第三十五條 營利ノ目的トセサル法人ニシテ無記名ノ公債證券又ハ社債券ヲ取得シタルトキハ其ノ發行者又ハ讓渡人ノ證明ヲ得テ之ヲ利子支拂ノ取扱所ニ通知シ其ノ所有ヲ證明スヘシ但シ從來無記名ノ公債證券又ハ社債券ヲ所有スル者ハ本令施行ノ際利子支拂ノ取扱所ニ通知シ便宜ノ方法ニ依リ其ノ所有ヲ證明スヘシ

第三十六條 府縣郡市區町村其ノ他公共ノ團體若ハ組合又ハ會社ニ於テ公債社債ノ利子ニ付所得稅ヲ徵收シタルトキハ直チニ拂込書及計算書ヲ添ヘ之ヲ其ノ所在地ノ金庫ニ拂込ムヘシ

國債利子支拂ノ取扱銀行ニ於テ國債ノ利子ニ付所得稅ヲ徵收シタルトキハ大藏大臣ノ命令ニ依リ之ヲ本店所在地ノ金庫ニ拂込ムヘシ

第三十七條 所得税法第四十條ノ申出アリタルトキハ稅務管理局長ハ其ノ年所得ノ實況ヲ調査シ所得金額四分ノ一以上ノ減損アルトキハ所得金額ヲ更訂シテ之ヲ納稅義務者ニ通知スヘシ

第三十八條 前期納稅後所得金額ノ變更ニ因リ所得稅金額ヲ減シタルトキ既納ノ稅金金額以上ナルトキハ其ノ超過額ヲ還付シ全額以下ナルトキハ後納期ニ於テ其ノ不足額ヲ徵收スヘシ

第三十九條 第三種ノ所得ニ付納稅義務アル者納稅地ノ稅務署管轄以外ニ於テ所得ヲ取得スルトキハ納稅地ヲ其ノ地ノ稅務署ニ申告スヘシ

第四十條 納稅義務者住所又ハ居所以外ノ地ニ於テ所得稅ヲ納メムトスルトキ又ハ所得税法施行地ニ住所又ハ居所ヲ有セサルトキハ納稅地ヲ定メ其ノ地ノ稅務署ニ申告スヘシ

第四十一條 納稅義務者納稅地ヲ變更スルトキハ其ノ旨新納稅地ノ所轄稅務署ニ申告スヘシ

第四十二條 納稅義務者帝國外ニ住所若ハ居所ヲ移ストキハ其ノ旨稅務署ニ申告スヘシ

第四十三條 納稅義務者納稅管理人ヲ定メタルトキハ其ノ氏名及住所又ハ居所ヲ納稅地ノ稅務署ニ申告スヘシ

朕千住製絨所官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十九日

勅令第七十九號 (官報 三月三十日)

内閣總理大臣 侯爵山縣有朋
陸軍大臣 子爵桂 太郎

千住製絨所官制中左ノ通改正ス
第二條中技師「一人」ヲ「二人」ニ屬、四人ヲ「八人」ニ技手「三人」ヲ「十二人」ニ改ム

朕裁判所書記長書記定員及俸給令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十九日

勅令第八十號 (官報 三月三十日)

○ 裁判所書記長書記定員及俸給令中左ノ通改正ス
第二條中大審院ノ部裁判所書記「十一人」ヲ「十二人」ニ控訴院ノ部裁判所書記「六十二人」ヲ「七十六人」ニ地方裁判所ノ部裁判所書記「四百六十七人」ヲ「五百二十五人」ニ區裁判所及區裁判所檢事局ノ部裁判所書記「三千五百十六人」ヲ「五千七百七十二人」ニ月俸「十圓以下六圓以上」ヲ「十二圓」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

○ 朕臨時臺灣鐵道敷設部官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十日

明治三十二年三月 勅令 第八十號

内閣總理大臣 侯爵山縣有朋
內務大臣 侯爵西鄉從道

勅令第八十一號 (官報 三月三十一日)

臨時臺灣鐵道敷設部官制

第一條 臨時臺灣鐵道敷設部ハ臺灣總督ノ管理ニ屬シ臺灣鐵道敷設ニ關スル事務ヲ掌ル

第二條 臨時臺灣鐵道敷設部ニ左ノ職員ヲ置ク

部長 一人

技師長 一人

事務官 專任三人

技師 專任十八

書記 專任四十人

技手 專任五十人

通譯 專任十人

第三條 部長ハ臺灣總督府勅任官ヲシテ之ヲ兼ネシム

部長ハ臺灣總督ノ指揮監督ヲ承ケ部務ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ監督ス

部長ハ奏任官ノ進退ハ之ヲ臺灣總督ニ具狀シ判任官以下ハ之ヲ專行ス

第四條 技師長ハ勅任トス部長ノ命ヲ承ケ技術官ヲ指揮シ工務ヲ掌ル

第五條 事務官ハ奏任トス部長ノ命ヲ承ケ庶務會計ヲ掌ル

第六條 技師ハ奏任トス上官ノ指揮ヲ承ケ工事ヲ掌ル

第七條 書記ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務會計ニ從事ス

第八條 技手ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ工事ニ従フ

第九條 通譯ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ土語通譯ニ従事ス

附則

本令ハ明治三十三年四月一日ヨリ施行ス

朕臨時臺灣鐵道敷設部職員官等俸給令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十三年三月二十日

內閣總理大臣 侯爵 山縣有朋
內務大臣 侯爵 西鄉從道

勅令第八十二號 (官報 三月三十一日)

臨時臺灣鐵道敷設部職員官等俸給令

第一條 臨時臺灣鐵道敷設部技師長ノ官等ハ高等官ニ等トシ其ノ年俸ハ三千圓又ハ三千五百圓トス但シ年功ニ依リ特ニ年俸四千圓ヲ給スルコトヲ得

第二條 臨時臺灣鐵道敷設部事務官及技師ノ官等及俸給ニ關シテハ臺灣總督府職員官等俸給令中事務官及技師ニ關スル規定ヲ適用ス

第三條 臨時臺灣鐵道敷設部判任官ノ俸給ハ臺灣總督府職員官等俸給令中判任官ニ關スル規定ヲ適用ス

附則

本令ハ明治三十三年四月一日ヨリ施行ス

朕外國ヨリ輸入スル葉煙草ニ關スル規定施行期日ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月三十日

大藏大臣 伯耆松方正義

勅令第八十三號 (官報 三月三十一日)

葉煙草專賣法中外國ヨリ輸入スル葉煙草ニ關スル規定ハ明治三十二年八月十五日ヨリ施行ス

朕陸軍給與令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月三十日

陸軍大臣 子爵桂 太郎

勅令第八十四號 (官報 三月三十一日)

陸軍給與令中左ノ通改正ス

第四十三條 士官以上乘馬本分ニシテ現ニ乘馬ヲ飼養スル者ニハ其ノ飼養期間馬糧及繋畜料ヲ給ス其ノ定額ハ第二十二表ニ依ル
前項ノ馬糧ハ一箇月以内ノ數量ヲ前渡シ繋畜料ハ毎月下旬ニ於テ之ヲ給ス但シ馬糧ハ代金ヲ以テ繋畜料ト共ニ支給スルコトヲ得
第五十條中「定額馬飼料」ヲ「馬糧及繋畜料」ニ改ム
第五十二條第一項ヲ左ノ如ク改ム

繋畜料ヲ給スル者軍隊旅行演習旅行又ハ陣營移轉ノトキハ増飼及増繋畜料ヲ給ス其ノ定額ハ第二十二表ニ依ル但シ増飼ハ代金ヲ以テ支給スルコトヲ得
第二十二表ヲ別表ノ如ク改ム

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

(別表)

第二十二表

一頭一月ノ額	一頭一日ノ額	一頭一日ノ額	一頭一日ノ額
粟 畜料	増繋畜料	馬 糞	糞
正 馬 八圓七十五錢	四 錢 二 厘	麥 四 升	麥 一 升
副 馬 五 十 錢		秣 一 貫 五 百 匁	
		藁 八 百 匁	

一 第二第七及第八師管下ノ隊馬ニ限リ十二月ヨリ三月マテ四箇月間防禦ノ爲ニ藁三百匁ヲ増給ス

朕海軍大學校條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月三十日

海軍大臣 山本權兵衛

勅令第八十五號 (官報 三月三十一日)

海軍大學校條例中左ノ通改正ス

第十條 海軍大學校學生ヲ左ノ五種ニ區別ス

將校科甲種學生

將校科乙種學生

機關科長期學生

機關科短期學生

選科學生

第十三條 機關科長期及短期學生ニハ機關ニ關スル高等ノ學術ヲ教授ス

第十七條 機關科長期學生ハ海軍大機關士若ハ中機關士ニシテ左ノ諸項ニ適合スル者ヨリ海軍大

臣之ヲ命ス

一 實務ノ成績優等ニシテ後來充分發達スヘキ才能ヲ有スト認メズル者

二 機關科短期學生中優等ナル成績ヲ以テ卒業シタル者若ハ入學試験ニ合格シタル者

機關科短期學生ハ海軍大機關士中機關士若ハ少機關士ニシテ左ノ諸項ニ適合スル者ヨリ海軍

大臣之ヲ命ス

一 機關ニ關スル高等ノ學術ヲ修メシムルニ適當ト認メタル者

二 機關學校ニ於テ良好ナル成績ヲ以テ卒業シタル者若ハ入學試験ニ合格シタル者

附則

本令施行ノ際在學ノ機關科學生ハ機關科長期學生トス

〔參照〕

勅令第三百二十六號海軍大學校條例(明治三十年五月二十日官報)抄録

第十條 海軍大學校學生ヲ左ノ四種ニ區別ス

將校科甲種學生

將校科乙種學生

機關科學生

選科學生

第十三條 機關科學生ニハ機關ニ關スル高等ノ學術ヲ教授ス

第十七條 機關科學生ハ海軍大機關士若ハ中機關士ニシテ左ノ諸項ニ適合スル者ヨリ海軍大臣之ヲ命ス

一 高等ノ學術ヲ修メシムルニ適當ト認メタル者

二 入學試験ニ合格シタル者

朕海軍兵學校條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月三十日

海軍大臣 山本權兵衛

勅令第八十六號(官報 三月三十一日)

海軍兵學校條例中左ノ通改正ス

別表中海軍教授ノ下「十」ヲ「十二」ニ改メ書記ノ次ニ「技手」ニヲ加ヘ

「十一」ニ「二等機關兵十一」ヲ「三等機關兵十三」ニ改メ小計「七十四人」ヲ「七十六人」内兼務「二十一人」ニ「百九

十六人」ヲ「百九十八人」ニ改メ合計「二百七十八人」ヲ「二百七十四人」内兼務「二十一人」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

朕種馬牧場及種馬所官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
農商務大臣 曾禰荒助

勅令第八十七號(官報 三月三十一日)

種馬牧場及種馬所官制中左ノ通改正ス

第十三條中技師ノ下「六人」ヲ「八人」ニ技手ノ下「二十人」ヲ「二十四人」ニ書記ノ下「八人」ヲ「十二人」ニ改

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

朕農事試験場官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
農商務大臣 曾禰荒助

勅令第八十八號(官報 三月三十一日)

農事試験場官制中左ノ通改正ス

第四條中「三十人」ヲ「二十八人」ニ改ム
第五條中「十五人」ヲ「二十五人」ニ改ム
第六條中「九人」ヲ「十三人」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

〔參照〕

勅令第十八號農事試験場官制(明治二十六年四月八日官報)抄録

第四條 技師ハ上官ノ指揮ヲ承ケ場務ヲ掌ル專任技師ハ三十人ヲ以テ定員トス

第五條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ場務ニ從事ス專任技手ハ十五人ヲ以テ定員トス

第六條 書記ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス專任書記ハ九人ヲ以テ定員トス

朕蠶業講習所官制改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
農商務大臣 曾禰荒助

勅令第八十九號(官報 三月三十一日)

蠶業講習所官制

第一條 蠶業講習所ハ二箇所トス農商務大臣ノ管理ニ屬シ左ノ事務ヲ掌ル

一 蠶業ニ關スル講習

二 蠶業ニ關スル試験及調査

- 三 巡回講話
- 四 蠶種配布
- 五 質問應答

第二條 蠶業講習所ニ左ノ職員ヲ置ク

- 所長
- 技師
- 舎監
- 技手
- 書記

- 第三條 所長ハ一人技師ヲ以テ之ニ充ツ農商務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所中全般ノ事務ヲ掌理ス
- 第四條 技師ハ上官ノ指揮ヲ承ケ所務ヲ掌ル
- 第五條 舎監ハ二人技師又ハ技手ヲ以テ之ニ充ツ上官ノ命ヲ承ケ講習生ノ取締ヲ掌ル
- 第六條 技手ハ上官ノ命ヲ承ケ所務ニ従事ス
- 第七條 書記ハ判任トス上官ノ命ヲ承ケ庶務ニ従事ス
- 第八條 蠶業講習所ヲ通シテ專任技師七八專任技手十二人專任書記六人ヲ以テ定員トス
- 第九條 蠶業講習所ノ位置及名稱ハ農商務大臣之ヲ定ム

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

朕蠶業調査會規則廢止ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十日

内閣總理大臣 侯爵山縣有朋
農商務大臣 曾禰荒助

勅令第九十號 (官報 三月三十一日)

蠶業調査會規則ハ明治三十二年三月三十一日限り廢止ス

朕蠶業調査所官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月二十日

内閣總理大臣 侯爵山縣有朋
農商務大臣 曾禰荒助

勅令第九十一號 (官報 三月三十一日)

蠶業調査所官制

第一條 蠶業調査所ハ農商務大臣ノ管理ニ屬シ蠶業改良ニ關スル調査及試験ノ事務ヲ掌ル

第二條 蠶業調査所ニ左ノ職員ヲ置ク

- 所長 一人
- 技師 專任四人
- 技手 專任八人
- 書記 專任二人

- 第三條 所長ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ農商務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所中全般ノ事務ヲ掌理ス
- 第四條 技師ハ上官ノ指揮ヲ承ケ所務ヲ掌ル
技師ノ内一人ハ勅任ト爲スコトヲ得
- 第五條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ所務ニ従事ス
- 第六條 書記ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス
- 附則
- 第七條 本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

朕醫術開業試験委員官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月三十一日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
内務大臣侯爵西郷從道

- 勅令第九十二號
- 醫術開業試験委員官制中左ノ通改正ス
- 第三條及第四條中「及」ヲ削リ委員ノ下「及」ヲ加フ
- 第九條ノ次ニ左ノ三條ヲ加ヘ第十條ヲ削リ以下順次繰下ク
- 第十條 醫術開業試験ニ附屬病院ヲ置ク附屬病院長ノ待遇ハ委任トス
- 附屬病院長ノ年俸ハ二千圓トス

- 第十一條 附屬病院長ハ醫術開業試験委員長ノ命ヲ承ケ病院ノ事務ヲ整理ス
- 第十二條 醫術開業試験書記專任四人ヲ置ク判任トス
- 醫術開業試験書記ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス
- 附則
- 本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

〔参照〕

- 勅令第百十八號醫術開業試験委員官制(明治二十九年四月七日官報)抄録
- 第三條 醫術開業試験委員長主事及委員ハ内務大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス
- 醫術開業試験委員ノ任期ハ四年トス但し滿期ノ後再任セラル、コトヲ得
- 第四條 醫術開業試験委員長ハ醫術開業試験主事及委員ヲ監督シ其ノ事務ヲ掌理ス
- 第十條 醫術開業試験書記ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス
- 醫術開業試験書記ニハ事務ノ繁簡ニ從ヒ手當ヲ給ス

朕傳染病研究所官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月三十一日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
内務大臣侯爵西郷從道

勅令第九十三號
傳染病研究所官制

第一條 東京ニ傳染病研究所ヲ置ク

第二條 傳染病研究所ハ内務大臣ノ管理ニ屬シ傳染病其ノ他病原ノ檢索、豫防、治療方法ノ研究、豫
防消毒治療材料ノ檢査及傳染病研究方法ノ講習ニ關スル事務ヲ掌ル

第三條 傳染病研究所ニ左ノ職員ヲ置ク

- 所長 一人 勅任
- 部長 專任三人 奏任
- 助手 專任八人 判任
- 書記 專任四人 判任

前項定員ノ外二十人以内ノ無給助手ヲ置クコトヲ得

第四條 所長ハ内務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所務ヲ掌理シ部下ヲ監督ス

第五條 部長ハ所長ノ命ヲ承ケ研究檢査講習ヲ掌ル

第六條 助手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ研究檢査講習ニ從事ス

第七條 書記ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第八條 傳染病研究所事務ノ分課ハ内務大臣之ヲ定ム

附則

本令ハ明治三十三年四月一日ヨリ施行ス

除傳染病研究所職員官等俸給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十三年三月三十一日

内閣總理大臣 侯爵山縣有朋
内務大臣 侯爵西鄉從道

勅令第九十四號

傳染病研究所長ハ高等官ニ等トシ部長ハ高等官ニ等以下七等以上トシ其ノ年俸ハ技衛官俸給令ニ
依ル

附則

本令ハ明治三十三年四月一日ヨリ施行ス

除臺灣總督府醫學學校官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十三年三月二十二日

内閣總理大臣 侯爵山縣有朋
内務大臣 侯爵西鄉從道

勅令第九十五號

臺灣總督府醫學學校官制

第一條 臺灣總督府醫學學校ハ臺灣總督ノ管理ニ屬シ醫師ヲ養成スル所トス

第二條 臺灣總督府醫學學校ニ左ノ職員ヲ置ク

- 校長
- 教授
- 助教授

舍監
書記

第三條 校長ハ一人奏任トス臺灣總督ノ命ヲ承ケ校務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス
校長ハ教授ヲ以テ之ヲ兼ネシム

第四條 教授ハ專任五人奏任トス生徒ノ教授ヲ掌ル
助教授ハ專任五人奏任又ハ判任トス教授ノ職務ヲ助ク

第五條 舍監ハ專任一人奏任又ハ判任トス校長ノ指揮ヲ承ケ生徒ノ取締ニ關スル事務ヲ掌ル
舍監ハ教授又ハ助教授ヲ以テ之ヲ兼ネシムルコトヲ得

第六條 書記ハ專任五人判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務會計ニ従事ス

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

朕臺灣總督府職員官等俸給令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月三十一日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
内務大臣侯爵西鄉從道

勅令第九十六號

臺灣總督府職員官等俸給令中左ノ通改正ス

第三條中醫院高等官ノ次ニ醫學學校高等官ヲ加フ

第五條中一等郵便電信局長ノ下ニ及醫學學校委任舍監ヲ加フ
高等文官官等表中醫員藥局長ノ次ニ左ノ二項ヲ加フ

			醫學教授同	同上	同上	同上	同上	同上
				醫學校舍監	同	同上	同上	同上
					同	同上	同上	同上
					同	同上	同上	同上

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

〔參照〕

勅令第百十三號臺灣總督府職員官等俸給令(明治三十一年六月二十日官報)抄錄

第三條 左ニ掲グル者ノ俸給ハ第一號俸給表ニ依ル但シ税關長ハ九級俸以上トス

- 委任事務官
 - 參事官
 - 秘書官
 - 技師
 - 税關長
 - 税關鑑定官
 - 製藥所長
 - 醫院高等官
- 第五條 一等郵便電信局長ノ俸給ハ第三號俸給表ニ依ル

朕臺灣總督府師範學校官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月 勅令 第九十七號 臺灣總督府師範學校官制

明治三十三年三月三十一日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
内務大臣侯爵西郷從道

勅令第九十七號

臺灣總督府師範學校官制

第一條 臺灣總督府師範學校ハ知事廳長ノ管理ニ屬シ國語傳習所公學校及書房義塾ノ教員トナル
ヘキ者ヲ養成スル所トス

第二條 臺灣總督府師範學校ニ附屬學校ヲ附設ス

第三條 臺灣總督府師範學校ニ左ノ職員ヲ置ク

學校長

教授

助教授

教諭

舎監

書記

第四條 學校長ハ各校一人委任トス知事廳長ノ命ヲ承ケ校務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

第五條 教授ハ各校二人委任トス師範學校生徒ノ教授ヲ掌ル

助教授ハ各校四人判任トス教授ノ職務ヲ助ク

第六條 教諭ハ各校三人判任トス附屬學校生徒ノ教授ヲ掌ル

第七條 舎監ハ學校長ノ指揮ヲ承テ生徒ノ取締ニ關スル事務ヲ掌ル

舎監ハ教授若ハ助教授ヨリ之ヲ兼ネシム

第八條 書記ハ各校二人判任トス上官ノ命ヲ承ケ庶務會計ニ從事ス

第九條 知事廳長ハ教授若ハ助教授ノ内ヨリ附屬學校主事ヲ命シ同校ニ關スル事務ヲ掌ラシムル
コトヲ得

第十條 師範學校設置ノ場所ハ臺灣總督ノ指定スル所ニ依ル

附則

第十一條 本令ハ明治三十三年四月一日ヨリ施行ス

○

朕臺灣總督府師範學校職員官等俸給令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
内務大臣侯爵西郷從道

明治三十三年三月三十一日

勅令第九十八號

臺灣總督府師範學校職員官等俸給令

第一條 臺灣總督府師範學校長ノ官等ハ高等官四等以下八等以上教授ノ官等ハ高等官五等以下八
等以上トシ其ノ俸給ハ左表ニ依ル

年 俸	一級 千六百圓		二級 千四百圓		三級 千二百圓		四級 千 圓	
	五級 九百圓	六級 八百圓	七級 七百圓	八級 六百圓	九級 五百圓	十級 四百圓	十一級 三百圓	十二級 二百圓

第二條 本令ニ規定セサルモノハ明治三十一年勅令第一百十三號臺灣總督府職員官等俸給令ヲ適用ス

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

朕臺灣總督府師範學校長特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月三十一日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
内務大臣侯爵西郷從道

勅令第九十九號

臺灣總督府師範學校長ハ高等師範學校ノ卒業證書ヲ有スル者又ハ學位若ハ學士ノ稱號ヲ有シ一箇年以上教育ニ關スル公務ニ從事シタル者又ハ三箇年以上教育ニ關スル公務ニ從事シ月額四十圓以上ノ俸給ヲ受クル判任官及判任官待遇ノ者ニ限り試験ヲ要セス文官高等試験委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

朕明治二十九年勅令第三百五號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月三十一日

内務大臣侯爵西郷從道

勅令第一百號

明治二十九年勅令第三百五號中「附屬學校」ノ下ニ「師範學校」ヲ加フ

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

〔參照〕

勅令第三百五號(明治二十九年九月十五日官報)
臺灣總督府國語學校同附屬學校及國語傳習所ノ生徒ニハ其ノ種類ニ依リ學資金及旅費日當ヲ支給スルコトヲ得其ノ支給細則ハ臺灣總督之ヲ定ム

朕新原探炭所官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月三十一日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
海軍大臣 山本權兵衛

勅令第一百號

新原探炭所官制中左ノ通改正ス

第二條 新原探炭所ニ所長一人ヲ置ク海軍機關少監ヲ以テ之ニ補ス

第四條 新原探炭所ニ技師一人ヲ置ク所長ノ命ヲ承ケ服務ス

第五條 新原探炭所ニ書記三人技師二人ヲ置ク上官ノ命ヲ承ケ服務ス

附則

本令ハ明治三十三年四月一日ヨリ施行ス

〔參照〕

勅令第五十五號新原探炭所官制(明治二十六年五月二十五日官報)抄録

第二條 新原探炭所ニ所長一人ヲ置キ海軍大橋關士ヲ以テ之ニ補シ若クハ技師ヲ以テ之ニ充ツ

第四條 新原探炭所ニ書記三人技師一人ヲ置ク所長ノ命ヲ受ケ事務ニ服ス

朕東京帝國大學官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十三年三月三十一日

勅令第五百二號

東京帝國大學官制中左ノ通改正ス

第七條中「九十人」ヲ「九十一人」ニ改ム

第八條中「四十一人」ヲ「四十二人」ニ改ム

第九條中「百二人」ヲ「百四人」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十三年四月一日ヨリ施行ス

〔參照〕

勅令第二百十號東京帝國大學官制(明治三十年六月二十二日官報)抄録

第七條第一項

教授ハ專任九十八人兼任又ハ勅任トス各分科大學ニ置ク所ノ講座ヲ擔任シ學生ヲ教授シ其ノ研究ヲ指導ス

第八條第一項

助教授ハ專任四十一人兼任トス教授ヲ助ケテ授業及實驗ニ從事ス

第九條 助手ハ專任百三人判任トス教授助教授ノ指揮ヲ承ケ學術技術ニ關スル職務ニ服ス

朕京都帝國大學官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十三年三月三十一日

勅令第五百三號

京都帝國大學官制中左ノ通改正ス

第八條中「十六人」ヲ「十七人」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十三年四月一日ヨリ施行ス

〔參照〕

勅令第二百十一號京都帝國大學官制(明治三十年六月二十二日官報)抄録

第八條 助教授ハ專任十六人兼任トス教授ヲ助ケテ授業及實驗ニ從事ス

朕中央氣象臺官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

内閣總理大臣 侯爵 山縣有朋
文部大臣 伯爵 樺山資紀

内閣總理大臣 侯爵 山縣有朋
文部大臣 伯爵 樺山資紀

明治三十二年三月三十一日

勅令第四百四號

中央氣象臺官制中左ノ通改正ス

第六條中「十八」ヲ「十四」ニ改ム

第七條中「二八」ヲ「三八」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
文部大臣伯爵樺山資紀

〔參照〕

勅令第四百四十八號中央氣象臺官制(明治三十一年七月十五日官報)抄録

第六條 技手ハ專任十人判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ中央氣象臺又ハ附屬測候所ノ事務ニ從事ス

第七條 書記ハ專任二人判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

朕明治二十六年勅令第二百八號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月三十一日

勅令第四百五號

明治二十六年勅令第二百八號中左ノ通改正ス

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
文部大臣伯爵樺山資紀

第三條中教授「八人」ヲ「十一人」ニ助教「十人」ヲ「十五人」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

〔參照〕

明治二十六年十一月廿四日勅令第二百八號第三條ハ札幌農學校職員定員ナリ

朕東京郵便電信學校官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月三十一日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
遞信大臣子爵芳川顯正

勅令第四百六號

東京郵便電信學校官制中左ノ通改正ス

第三條中「遞信省高等官」ヲ兼任ス「ヲ」奏任トスニ改ム

第五條中「五人」ヲ「八人」ニ改ム

第六條中「八人」ヲ「十人」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

〔參照〕

勅令第五百五十四號東京郵便電信學校官制(明治二十四年七月二十七日官報)抄録

第三條 校長ハ一人選信省高等官之ヲ兼任ス選信大臣ノ命ヲ承ケ校務ヲ掌理ス
 第五條 教授ハ委任トシ專任五人ヲ以テ定員トス校長ノ監督ヲ承ケ生徒ノ教授ヲ掌ル
 第六條 助教ハ判任トシ專任八人ヲ以テ定員トス校長ノ監督ヲ承ケ教授ノ職務ヲ助ケ

除高等官官等俸給令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十三年三月三十一日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋

勅令第七百七號

高等官官等俸給令中左ノ通改正ス

第九條第二項中横濱港務局長神戸港務局長俸給ノ部神戸港務局長ノ次及第二項中神戸港務局長ノ下ニ「東京郵便電信學校長」ヲ加フ

文武高等官官等俸給表中遞信省ノ部商船學校教諭ノ次三等乃至五等ノ欄ニ左ノ一項ヲ加フ

東京郵便電信學校長 同上 同上

附則

本令ハ明治三十三年四月一日ヨリ施行ス

朕内國旅費規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十三年三月三十一日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
 大藏大臣伯爵松方正義

勅令第八百八號

内國旅費規則別表中汽車賃ノ欄ヲ左ノ通改正ス

汽 車	賃	一	圓
七			圓
六			圓
五			圓
四			圓

附則

本令ハ明治三十三年四月一日ヨリ施行ス

〔参照〕

勅令第三百三十三號内國旅費規則(明治三十年九月二十七日官報)抄録
 別表中

旅 費 額	等 級	汽 車 賃
	一等 親任官	六 圓
	二等 勅任官	五 圓
	三等 委任官	四 圓
	四等 判任官	三 圓

朕作業及鐵道會計規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月三十一日

大藏大臣 伯耆松方正義
農商務大臣 曾禰荒助

勅令第九號

作業及鐵道會計規則中左ノ通改正ス

第二條及第五十二條中「富岡製絲所」ヲ「製鐵所」ニ改ム

第五十三條中「富岡製絲所長」ヲ「製鐵所長官」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十二年度ヨリ施行ス

(參照)

勅令第三十三號作業及鐵道會計規則(明治三十三年三月二十日)抄録

第二條 造幣局、印刷局、富岡製絲所、電信燈臺用品製造所、廣島鐵山ニ於テハ左ノ諸費ヲ以テ歲出トス(下略)

第五十二條 此規則ニ於テ作業所トハ造幣局、印刷局、富岡製絲所、電信燈臺用品製造所、廣島鐵山、東京砲兵工廠、大阪砲兵工廠、千住製鐵所及鐵道ヲ謂フ

第五十三條 此規則ニ於テ作業事務長トハ鐵道作業局長官、造幣局長、印刷局長、富岡製絲所長、東京砲兵工廠提理、大阪砲兵工廠提理、千住製鐵所長ヲ謂フ

電信燈臺用品製造所及廣島鐵山ニ於テハ其事務管理長ヲ以テ作業事務長トス

朕明治二十九年勅令第三百四十六號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月三十一日

大藏大臣 伯耆松方正義

勅令第一百號

明治二十九年勅令第三百四十六號稅務管理局稅務署及管轄區域表中左ノ通改正ス

京都稅務管理局滋賀縣ノ部中左ノ通改ム

大津 大津市 滋賀郡

郡山稅務管理局福島縣ノ部中左ノ通改ム

若松 若松市 北會津郡

廣島稅務管理局廣島縣ノ部中左ノ通改ム

可部	安佐郡	山縣縣
福山	深安郡	沼隈郡
府中	鹿島郡	神石郡 甲奴郡
三次	雙三郡	
庄原	比婆郡	

丸龜稅務管理局香川縣ノ部中左ノ通改ム

熊本稅務管理局福岡縣ノ部中左ノ通改ム

高松	高松市	香川郡	木田郡
阪出	綾歌郡		
丸龜	丸龜市	仲多度郡	
觀音寺	三豐郡		
長尾	大川郡		
小倉	門司市	企救郡	

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

朕地租條例施行規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年三月三十一日

大藏大臣伯爵公方正義

勅令第一百十一號

地租條例施行規則

第一條 土地ニハ番號ヲ付シ每筆其ノ地價ヲ定ム
第二條 一筆ノ土地中一部分左ノ事項ニ該當スルトキハ之ヲ分割ス

一 別地目トナルトキ

二 有租地ニシテ免租地トナルトキ

三 免租地ニシテ有租地トナルトキ

四 所有者ヲ異ニスルトキ

五 質權ノ目的トナルトキ

第三條 地租條例第四條ニ依リ地租ヲ免スヘキ公立學校地、鄉村社地ハ借地ニアラサルモノニ限ル

第四條 第一類地ヲ第二類地ニ變換スルモノヲ地類變換ト謂フ

第五條 地目變換又ハ地類變換ノ後五年以内ニ於テ更ニ地目變換又ハ地類變換ヲ爲シタルトキハ再度ノ變換ヨリ六年目ニ至リ其ノ地目ニ對スル修正地價ニ依リ地租ヲ徵收ス

第六條 地目變換ノ後五年以内ニ於テ開墾ヲ爲ストキハ開墾著手ノ年ヨリ十年目又ハ鉞下年明ニ至リ其ノ成功部分ノ地價ヲ修正シテ地租ヲ徵收ス

地類變換ヲ爲シタル後五年以内ニ於テ再ヒ第一類地トナストキハ變換ヲ取消シタルモノトス其ノ當初ノ地目ト異リタル第一類地ト爲ストキハ地目變換ヲ爲シタルモノトス

第七條 開墾著手後十年以内又ハ鉞下年期中ニ於テ地目ヲ變換シタルトキハ開墾ハ廢止シタルモノトシ變換ヨリ六年目ニ至リ其ノ地目ニ對スル修正地價ニ依リ地租ヲ徵收ス

第八條 地目變換若ハ地類變換ヲ爲シタル後五年以内ニ於テ荒地免租年期ノ許可ヲ受ケタルトキハ變換ヲ取消シタルモノトス其ノ荒地免租年期明ニ至リ當初ノ地目ト異リタル土地ト爲シタルトキハ其ノ地目ニ依リ地價ヲ修正シテ地租ヲ徵收ス

第九條 地租條例第十條第一項ニ違反スル者其ノ變換ヨリ六年目以後ニ於テ發覺シタルトキハ其ノ發覺ノ年ニ於テ現地目ニ依リ地價ヲ修正シ其ノ年ヨリ修正地價ニ依リ地租ヲ徵收ス

第十條 地目變換又ハ開墾ニシテ許可ヲ受クルコトヲ要スルモノハ許可出願ヲ以テ届出ト看做ス

第十一條 官有地ヲ開拓シ又ハ官有ノ水面ヲ埋立民有ニ歸セシ土地ニ付、（一） 新開免租年期ノ許可ヲ請ハサルトキハ其ノ地ノ現況ニ依リ地價ヲ定ム

第十二條 荒地免租年期中又ハ低價年期中土地ノ形狀ヲ變更スルコトアルモ地目變換地類變換又ハ開墾ト看做サス

第十三條 荒地免租年期中又ハ低價年期中再ヒ荒地トナリ免租年期ノ許可ヲ受ケタルトキハ前ニ受ケタル荒地免租年期又ハ低價年期ハ消滅ス

第十四條 地租條例第十六條第十八條第二十條第二十一條第二十三條第二十四條及森林法第五十六條ニ依リ、（一） 新開免租年期、（二） 地價據置年期、（三） 免租年期、（四） 繼年期又ハ低價年期ヲ受ケントスル者ハ稅務管理局長ニ願出ツヘシ

第十五條 左ノ場合ニ於テハ所有者ハ稅務管理局長ニ届出ツヘシ

- 一 有租地ヲ用惡水路、沼池、堤塘、井溝、鐵道用地、公衆ノ用ニ供スル道路、水道用地及傳染病院、隔離病舎、隔離所、消毒所ノ敷地ト爲ストキ
- 二 地目變換又ハ地類變換ヲ爲シタルトキ
- 三 開墾ヲ爲サムトスルトキ、開墾成功シタルトキ又ハ開墾ヲ廢止シタルトキ
- 四 官有地ヲ開拓シ又ハ官有ノ水面ヲ埋立民有ニ歸セシ土地ニ付、（一） 新開免租年期又ハ新開免租年期ヲ請ハサルトキ

五 新開免租年期、（一） 地價據置年期、（二） 新開免租年期、（三） 荒地免租年期、（四） 低價年期、（五） 至リタルトキ

六 數筆ノ土地ヲ合併シ又ハ一筆ノ土地ヲ分割セムトスルトキ

前項ノ場合ニ於テ地價ノ設定又ハ修正ヲ要スルトキハ實地ノ情況ニ依リ近傍ノ類地ト其ノ地方ヲ比較シ相當ノ地位等級ヲ見積リ土地ノ測量圖ト共ニ書面ヲ差出スヘシ

第十六條 地租ヲ納ムヘキ者其ノ所有土地所在地ノ市區町村內ニ住所又ハ居所ヲ有セサルトキハ地租ニ關スル事務ヲ管理セシムル爲其ノ市區町村內ニ住居スル者ヲ納稅管理人ト爲シ其ノ市區町村長又ハ戶長ニ申告スヘシ

陸軍成病院條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御 名 御 璽

明治三十二年三月三十一日

陸軍大臣子爵桂 太郎

勅令第百十二號 (官報 四月一日)

陸軍成病院條例中左ノ通改正ス

第三條第一項中藥劑官ノ下ヲ左ノ通改ム

五等病院ニハ之ヲ置カス

第八條ニ左ノ一項ヲ加フ

前項ノ他廣島衛戍病院ニ在テハ臺灣及海外駐節部隊ヨリ航送ノ患者ヲ收療ス其手續ハ陸軍大臣
之ヲ定ム

〔參照〕

勅令第二十七號衛戍病院條例(明治三十一年二月二十一日官報)抄録

第三條 衛戍病院ニ左ノ職員ヲ置ク

病院長 軍醫正若クハ一等軍醫

軍 醫

藥劑官 四等以下ノ府縣ニハ之ヲ置カス

軍 史 三等以下ノ府縣ニハ之ヲ置カス

前項ノ外下士若干ヲ置ク

第八條 軍人軍團旅行途上發病シタルトキ其ノ他止ムヲ得サル場合ニ在テハ第一條ノ規定ニ拘ラス附近衛戍病院ニ收療スルコトヲ得現職若クハ現役ヲ離レ又ハ候補生諸生徒ヲ免セラレタル者ニシテ一時收療ヲ要スルトキ亦同シ

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ徵兵事務條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月一日

内務大臣 侯爵 西郷從道

陸軍大臣 子爵 桂 太郎

海軍大臣 山本權兵衛

勅令第百十三號

徵兵事務條例中左ノ通改正ス

第四條第一項中「一聯隊區」ノ下ニ「第一師管ニ在テハ二聯隊區」ノ分註ヲ加ヘ同項ノ次ニ左ノ二項ヲ加フ

近衛ノ歩兵隊及騎兵隊ノ兵員ハ各師管ヨリ其ノ他ノ兵員ハ第一師管ヨリ徵集ス

鐵道隊ノ兵員ハ第一第二第三第四第八及第九師管ヨリ徵集ス

第九條中「市參事會員」タル府ノ書記官ヲ「市長」ニ改ム

第十三條 毎年徵募事務執行中ハ師管徵兵醫官及聯隊區徵兵醫官聯隊區徵兵副醫官又ハ警備隊區徵兵醫官警備隊區徵兵副醫官ヲ置ク但シ警備隊區徵兵副醫官ハ時宜ニ依リ之ヲ置カサルコトヲ得

師管徵兵醫官ハ師團長ニ屬シ師管内徵兵身體検査ニ係ル事ヲ管掌シ聯隊區徵兵醫官ハ聯隊區司令官ニ警備隊區徵兵醫官ハ警備隊司令官ニ屬シ其ノ區内徵兵身體検査ニ係ル事ヲ管掌シ聯隊區徵兵副醫官ハ聯隊區徵兵醫官ヲ警備隊區徵兵副醫官ハ警備隊區徵兵醫官ヲ補佐ス

第十四條 師管徵兵醫官ハ師團軍醫部長ヲ以テ之ニ充テ聯隊區徵兵醫官及警備隊區徵兵醫官ハ陸軍一等軍醫一名聯隊區徵兵副醫官及警備隊區徵兵副醫官ハ陸軍二三等軍醫ノ内一名ヲ以テ之ニ充ツ

第十六條第二項中「府屬」ヲ「市書記」ニ改ム

第十七條 徵募事務執行ニ際シ聯隊區徵兵參事員又ハ警備隊區徵兵參事員ノ全部ヲ缺クトキハ府縣知事ハ徵募區内ノ公民ニシテ市町村會議員ノ選舉權ヲ有スル者ニ就キ臨時聯隊區徵兵參事員又ハ臨時警備隊區徵兵參事員ヲ命スルコトヲ得

島廳ヲ置キタル島嶼ノ臨時徵兵參事員ハ島司ニ於テ便宜之ヲ命スルコトヲ得

第二十條 現役兵及補充兵ノ配賦ハ壯丁ノ總數ヲ基準トシテ之ヲ定ム

第二十一條 第二項分註「以下同」ヲ削ル

第二十二條 中「廣潤」ノ下ニ「若ハ交通不便若ハ」ヲ加フ

第二十三條 第二項削除

第二十六條 中「市長」ノ下ニ「東京市京都市大阪ノ分註ヲ加フ

第二十八條 第二項第三項ヲ左ノ如ク改ム

抽籤ハ徵兵官及徵兵參事員列席ノ上抽籤總代人ノヲ爲スモノトス但シ東京市京都市大阪市ノ徵兵參事員ハ各検査區ヨリ一名宛出席スヘシ

明治三十二年四月 勅令 第百十三號

抽籤總代人ハ其ノ年ノ壯丁ニ就キ聯隊區徵兵參事員又ハ警備隊區徵兵參事員之ヲ選定ス其ノ人員ハ適宜トス

第三十條中「東京市京都市大阪市及北海道」ヲ削リ「市長ノ領スヘキ抽籤名簿ハ府ノ書記官之ヲ領シ府廳ヲ抽籤名簿ヲ除クノ外ハ區長之ヲ領シ區役所」ニ改ム

第三十二條第一項但書削除

第三十九條ニ左ノ一項ヲ加フ

徵兵官前項ノ訴願書ヲ受領シタルトキハ之ニ前裁決ニ關スル書類ヲ添へ上級ノ徵兵官ニ差出スヘシ

第四十條 總理徵兵官又ハ師管徵兵官ニ於テ下級徵兵官ノ裁決不當ナリト認ムルトキ又其ノ裁決詐偽若ハ錯誤ニ起因シタルモノナリト認ムルトキハ之ヲ取消シ更ニ處分ヲ命スヘシ但シ師管徵兵官ハ總理徵兵官ノ認可ヲ受クヘシ

第四十二條第三項中「仙臺、札幌、弘前、金澤ノ各衛戍地」ヲ「第二師管第七師管第八師管及第九師管」ニ改メ「九月一日トス」ノ下ニ「但シ第七師管及第八師管ニ於テ輜重輸卒ノ入營ハ二期ニ分チ其ノ第一期ハ徵募年ノ翌年五月一日第二期ハ同年八月一日トス」ヲ加フ

同條第四項ヲ左ノ如ク改ム

戰時若ハ事變ノ際其ノ他必要ノ場合ニ在テハ前項ノ入營期日ヲ變更スルコトヲ得

第四十三條 現役兵ヲ入營セシムルトキハ聯隊區司令部員ヲ入營地若ハ近衛海軍入營兵集令地ニ派遣シ之ヲ當該隊長又ハ近衛海軍入營兵受領員ニ交付セシム但シ土地ノ狀況ニ由リ入營兵引率員ヲシテ入營地若ハ近衛海軍入營兵集令地ニ引率セシムルコトアルヘシ

入營兵ノ人員寡少ナルトキ及入營兵受領員出發後到着セタル者ハ直ニ入營セシム

第四十四條第一項中「十四日」ヲ「二十日」ニ改メ第二項中「市町村長」ノ下ニ「東京市京都市大阪市ニ在テハ區長以下同シ」

分註ヲ加フ

第四十六條中「三十一日迄」ノ下ニ「缺員ヲ生シ若ハ」ヲ加ヘ同條但書中「二十日」ヲ「十日」ニ改ム

第四十八條第二項中「但」ノ下ニ「東京市京都市大阪市ニ在テハ區長ヲ加フ

第四十九條第一項中「但」ノ下ニ「東京市京都市大阪市ニ在テハ區長ヲ加フ

第五十條第一項中「但」ノ下ニ「東京市京都市大阪市ニ在テハ區長ヲ加フ

第五十三條 他ノ徵募區ニ寄留シ其ノ地ニ於テ身體検査ヲ受ケンコトヲ冀望スル者ハ本籍及寄留地徵募區ノ検査開始前寄留地ノ島司郡市長ニ願出テ且其ノ由ヲ本籍ノ市町村長ニ届出ヘシ

島司郡市長其ノ願ヲ許可シタルトキハ直ニ之ヲ本籍地ノ島司郡市長ニ通知スヘシ

第一項ノ届出ヲ爲ササル者ハ五錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第五十五條第三項中「在ル者」ノ下ニ「及一定ノ地ニ在留セサル旅行ノ者」ヲ加フ

第五十八條中「二年志願兵」ノ下ニ「年十九歳以上二十歳以下ノ志願兵」ニ改ム

第六十條中「徵兵醫官補助員」ノ給料、旅費ヲ削ル

第六十一條 第四十條ニ依リ更ニ處分ヲ爲ストキハ臨時徵兵署ヲ開設スルコトヲ得

第六十三條ニ左ノ一項ヲ加フ

韓國在留ノ者ニ在テモ前項ノ例ニ依リ便宜ノ徵募區ニ於テ身體検査ヲ受クルコトヲ得

第六十五條 第七師團ノ兵員當分第一第二第七及第八師管ヨリ徵集ス但シ第七師管外ヨリ徵集

スル者ノ入營ニ係ル取扱ハ第四十三條近衛海軍入營兵ノ例ニ依ル
附則
本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

〔參照〕

勅令第百十二號徵兵事務條例(明治二十九年三月三十一日官報抄錄)

- 第四條第一項 歩兵隊ノ兵員ハ聯隊毎ニ其ノ師管ノ一聯隊區ヨリ其ノ他ノ兵員ハ其ノ師管各聯隊區ヨリ徵集ス但要員ヲ充シ能ハサルトハ他ノ聯隊區若クハ他ノ師管ヨリ其ノ不足ヲ補充スルコトヲ得
- 第九條 聯隊區聯合徵兵署徵兵官ハ東京市京都市大阪市ニ於テ徵集區毎ニ聯隊區司令官市參事會員タル府ノ書記官及各區長ヲ以テ之ニ充テ聯隊區司令官ヲ首坐トシ其ノ區内抽籤事務ヲ執行ス
- 第十三條 毎年徵集事務執行中ハ師管徵兵署官及聯隊區徵兵署官又ハ聯隊區徵兵署官ヲ置ク
- 第十四條 師管徵兵署官ハ師管内徵兵身體検査ニ係ル事ヲ總管シ聯隊區徵兵署官又ハ聯隊區徵兵署官ハ徵兵身體ノ検査ニ從事ス司令官部附軍醫一名ヲ以テ之ニ充テ之ニ充テラルコトヲ例トス
- 第十六條第二項 聯隊區聯合徵兵署事務員ハ聯隊區書記二名府屬二名及各區書記二名若クハ三名ヲ以テ之ニ充ツ
- 第十七條 毎年徵集事務執行中ハ地方醫師若干名ヲ以テ徵兵署官補助員トシ北海道廳長官府縣知事之ヲ命ス
- 第二十條 現役兵及補充兵ノ配賦ハ壯丁ノ總數ヲ率トシ比例ヲ以テ之ヲ定ム
- 第二十一條第二項 市長東京市京都市大阪市大阪市及北區ハ前項ノ例ニ依リ壯丁名簿ヲ作り前年假決ノ諸名簿ト共ニ之ヲ聯隊區徵兵署ニ提出ス市長東京市京都市大阪市大阪市及北區以下同シ
- 第二十二條第一項 毎年徵集事務執行ノトキハ各徵集區及検査區ニ聯隊區徵兵署又ハ聯隊區徵兵署ヲ設ク但土地廣濶壯丁多數ノ徵集區ニ於テハ二三箇所以上ノ地ニ逐次開設スルコトヲ得
- 第二十三條第二項 聯隊區聯合徵兵署開設ノ日割ハ聯隊區司令官ヨリ府ノ書記官ニ協議シ之ヲ定メ聯隊區司令官ハ師團長ニ府ノ書記官ハ府

知事ニ申報シ且府ノ書記官ハ徵兵署開設ノ日割及其ノ場所ヲ區長ニ達スヘシ

- 第二十六條 島司郡市長ハ徵集延期及徵集額減ニ關スル書類ノ調査及事實ノ審察ニ任ス
- 第二十八條 身體検査ニ合格シタル壯丁ハ徵集順序ヲ定ムル爲メ徵集區毎ニ體格ノ等位及兵種ヲ分チ聯隊區徵兵署又ハ聯隊區徵兵署ニ於テ抽籤ヲ行フ但東京市京都市大阪市ニ於テハ聯隊區聯合徵兵署ニ於テ之ヲ行フ
- 抽籤ハ徵兵官及徵兵委員ノ面前ニ於テ抽籤總代人ノ之ヲ爲スモノトス
- 抽籤總代人ハ徵集區又ハ検査區毎ニ籤丁ノ選ヲ以テ二名若クハ三名ヲ出スモノトス
- 第三十條 抽籤終了トキハ抽籤名簿及徵集名簿ハ聯隊區司令官又ハ聯隊區司令官之ヲ領シ抽籤名簿ハ徵集延期名簿ハ徵集額減名簿ハ徵集免除名簿及兵役免除名簿ハ島司郡市長之ヲ領シ島司郡市長之ヲ領シ府ノ書記官之ヲ領シ府屬ニ備置クヘシ但東京市京都市大阪市ニ於テハ市長ノ領スヘキ抽籤名簿ハ府ノ書記官之ヲ領シ府屬ニ備置クヘシ
- 第三十二條第一項 聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ハ現役兵名簿ヲ各聯隊長ニ送リ其ノ長及海兵團長ニ交付シ且現役兵ニ徵集スヘキ者及補充兵ニ編入スヘキ者ノ順序ヲ島司郡市長ニ通知スヘシ但東京市京都市大阪市ニ在テハ府ノ書記官ニ通知スヘシ
- 第三十九條 徵兵官ノ裁決ニ對シ訴願ヲ爲サントスル者ハ其ノ訴願書ニ同徵集區内其ノ年徵集ニ應スヘキ壯丁ノ月主三名ノ保證書ヲ添ヘ其ノ裁決ヲ爲シタル徵兵官ヲ經由シテ差出スヘシ
- 第四十條 徵兵官第三十九條ノ訴願書ヲ受領シタルトキハ之ニ前裁決ニ關スル書類ヲ添ヘ上級ノ徵兵官ニ差出スヘシ
- 第四十二條第三項第四項 仙臺札幌弘前金澤ノ各衛戍地ニ於テハ砲兵輸卒ノ入營ハ二期ニ分チ其ノ第一期ハ徵集年ノ翌年四月一日第二期ハ同年八月一日トシ輸重輸卒ノ入營ハ三期ニ分チ其ノ第一期ハ徵集年ノ翌年三月一日第二期ハ同年六月一日第三期ハ同年九月一日トス
- 戰時若クハ事變ニ際シテハ第二期以下ノ入營期日ヲ變更スルコトヲ得
- 第四十三條 現役兵入營ノトキハ先ツ聯隊區司令官若クハ便宜ノ地ニ召集シ入營兵引率員之ヲ入營地ニ引率シ聯隊區司令官ノ入營地ニ在テハ該區司令官ニ交付ス但入營兵五人未満ナルトキハ直ニ入營地ニ單行セシム
- 海軍現役兵ハ其ノ集合地ニ引率シ入營兵引率員ニ交付スルモノトス但入營兵引率員出發後到着シタル者ハ直ニ入營地ニ單行セシム
- 第四十四條 現役兵入營ニ際シテ父母ノ疾病危篤或ハ死亡ノ爲メ入營ノ延期ヲ願フ者アルトキハ聯隊區司令官又ハ警備隊司令官ニ於テ十四日以内ノ延期ヲ許スヘシ
- 其ノ延期ヲ願フ者ハ願書ニ市町村長ノ印章捺印ヲ受ケ其ノ父母疾病危篤ノ者ハ醫師ノ診斷證書ヲ添ヘ差出スヘシ
- 第四十六條 現役兵入營前死亡シ若クハ疾病犯罪其ノ他ノ事故ニ由リ十二月三十一日迄ニ入營シ雖シト認メタル者又ハ入

第二十二條ニ左ノ一項ヲ加フ

一等卒及上等兵ヲ命スルハ聯隊長ニ於テシテ三等書記ノ階級ニ進ムルハ師團監督部長ニ於テスルモノトス

第三十一條中「親族ヨリ」ノ下ニ「該隊所管ノ」ヲ加フ

第三十二條中「延期ヲ」ノ下ニ「該隊所管ノ」ヲ加フ

第三十六條中「警備隊司令官」ノ下ニ「沖繩警備隊區ニ」ノ分註ヲ加フ

〔參照〕

勅令第七十三號陸軍一年志願兵條例(明治二十六年七月二十日官報)抄錄

第一條 徵兵令第十三條ニ據リ一年志願兵トナル者ハ居住地師管内ニ於テ服役スヘキ兵科及衛戍地ヲ選フコトヲ得但第四條ニ當ル者ハ此限ニ在ラス

第八條 一年志願兵志願者ハ其願書ヲ一月三十一日迄ニ本籍ノ島司郡市長ノ官署ニ提出スルベシ但本籍ノ島司郡市長ノ官署ニ在ラズシテ居住地師管内ニ在リテ服役スル者ハ居住地師管内ノ島司郡市長ノ官署ニ提出スルベシ但徵兵令第十三條ノ學校卒業業者ハ卒業證書及月主ニテアラルモノハ月主二十歳未満者ハ月主者トシテ見入ノ承認書ヲ添付スルヲ要ス

島司郡市長ハ志願者ノ身元資産及ニ犯罪有無ノ證明書ヲ製シ其願書ニ添付スヘシ

第十條 師團長ハ第八條ノ志願者中學術試驗ヲ受クヘキ者ノ人名書ニ一通ヲ製シ其一通ヲ監軍ニ呈シ一通ヲ身體検査ヲ爲サシムヘキ軍醫ニ下付スルモノトス

第十一條 一年志願兵ノ學術試驗格例ハ毎年監軍之ヲ定メ陸軍大臣之ヲ告達ス

第十八條 一年志願兵中勤務懸達品行方正ニシテ候補士官タルヲ得ヘキ材幹アル者ハ入隊ノ日ヨリ起算シ四箇月ノ後一等卒ヲ命シ通常教育ノ外特別ノ教育ヲ授ケ更ニ三箇月ノ後上等兵ト爲シ下士ノ勤務ヲ爲サシメ更ニ三箇月ノ後二等軍曹ノ階級ニ進メ勤務ヲ練習セシム

第三十一條 一年志願兵入隊前禁烟以上ノ刑ニ處セラレ又ハ死亡シタルトキハ其親族ヨリ師團長ニ届出ヘシ

第三十二條 一年志願兵認定證書ヲ所持スル者疾病其他止ラ得サル事故ニ由リ十二月一日ニ入隊シ離キトキハ證明書類ヲ添ヘ入隊延期ヲ師團長ニ出願スヘシ

陸軍六週間現役兵條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月一日

陸軍大臣子爵桂 太郎

勅令第百十五號

陸軍六週間現役兵條例中左ノ通改正ス

第一條中「警備隊ヲ置ク島嶼」ヲ「警備隊ヲ置ク島嶼ニ在テハ警備ニ改ム」ニ改ム

第二條中「六月一日」ノ下ニ「臺灣」ニ在テ「分註ヲ加フ

第五條中「第七師管」ニ在テ「臺灣」ニ在テ「改ム

第六條第二項中「北海道」ノ下ニ「臺灣」ヲ加フ

〔參照〕

勅令第百四十一號陸軍六週間現役兵條例(明治二十八年十月五日官報)抄錄

第一條 徵兵令第十三條第三項ニ依リ六週間陸軍現役ニ服セシムヘキ者ハ教職ニ就キタル年若クハ其ノ翌年ニ於テ其ノ居住地師管内ノ歩兵隊ニ在テハ警備隊ニ編入シ服役セシム

第二條 六週間現役兵ノ入營期日ハ毎年六月一日トス但疾病其他ノ事故ニ由リ期日ヨリ三日以内ニ入營シ難キ者ハ翌年徵集ス

第五條 六週間現役兵中勤務懸達品行方正ニシテ第二國民兵ヲ以テ編成スル部隊ノ幹部タルヲ得ヘキ材幹アル者ニハ聯隊長其ノ成績ヲ具シ順序ヲ經テ師團長ハ七師管ニ在テ「認可」ヲ受ケ國民軍幹部適任證書ヲ授與ス

第六條第二項

北海道及沖繩縣ニ在ル者ノ身體検査ニ關スル規程ハ陸軍大臣別ニ之ヲ定ム

朕高等師範學校附屬音樂學校及高等商業學校附屬外國語學校改稱ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セ

御名 御璽

明治三十二年四月四日

勅令第百十六號(官報四月五日)

高等師範學校附屬音樂學校ヲ東京音樂學校ト改稱シ高等商業學校附屬外國語學校ヲ東京外國語學校ト改稱ス

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
文部大臣伯爵樺山資紀

朕文部省直轄諸學校官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月四日

勅令第百十七號(官報四月五日)

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
文部大臣伯爵樺山資紀

文部省直轄諸學校官制中左ノ通改正ス

第一條中女子高等師範學校ノ次ニ札幌農學校東京工業學校ノ次ニ東京外國語學校東京美術學校ノ次ニ東京音樂學校ヲ加フ

第二條中附屬音樂學校及ヲ削ル

第四條削除

第七條中校長ハノ下奏任ヲ勅任又ハ奏任ニ改ム

第八條中教授ハノ下奏任ヲ勅任又ハ奏任ニ改ム

第十三條ノ次ニ左ノ一條ヲ加ヘ以下順次繰下ク

第十四條 高等師範學校ニ助手ヲ置ク判任トス教授ノ指揮ヲ承ケ授業及實驗ノ補助ニ従事ス

第十七條中高等商業學校ヲ削ル

附則

明治二十六年勅令第百八號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

(參照)

勅令第八十六號文部省直轄諸學校官制(明治二十六年八月二十五日官報)抄録

第一條第一項

文部省直轄諸學校ハ高等師範學校女子高等師範學校高等商業學校第一高等學校第二高等學校第三高等學校第四高等學校第五高等學校東京工業學校東京美術學校大原工業學校及東京音樂學校トス

第二條 高等師範學校ニ附屬中學校及附屬小學校ヲ置キ附屬音樂學校及東京教育博物館ヲ附設ス

第四條 高等商業學校ニ附屬外國語學校ヲ附設ス

第七條 校長ハ奏任トス文部大臣ノ命ヲ承ケ校務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

第八條第一項

教授ハ奏任トス生徒ノ教授ヲ掌ル

第十七條 文部大臣ハ高等師範學校女子高等師範學校高等商業學校高等中學校及東京工業學校教官ノ中ヨリ各其ノ附屬學校主事東京教育博物館主事附屬幼稚園主事專門學部主事ヲ命シ其ノ事務ヲ掌ラシムルコトヲ得

明治二十六年十一月廿四日勅令第百八號ハ札幌農學校ニ關スル件ナリ

朕明治二十六年勅令第八十七號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十三年四月四日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
文部大臣伯爵樺山資紀

勅令第百十八號(官報 四月五日)

明治二十六年勅令第八十七號第一條中左ノ通改正ス

高等師範學校ノ部

- 校長 一人
- 教授 四十四人
- 助教授 九人
- 助手 二人
- 教諭 七人
- 助教諭 九人
- 訓導 十八人
- 舍監 三人
- 書記 十二人
- 女子高等師範學校ノ部

校長	一人
教授	十五人
助教授	五人
教諭	七人
助教諭	十二人
訓導	十一人
舍監	一人
保姆	七人
書記	六人
札幌農學校	
校長	一人
教授	十一人
助教授	十五人
書記	六人
高等商業學校ノ部	
校長	一人
教授	十四人
助教授	十二人
書記	七人
第一高等學校ノ部	

教授ノ下「四十五人」ヲ「四十八人」ニ助教ノ下「十五人」ヲ「十六人」ニ改ム
 第二高等學校ノ部
 教授ノ下「三十三人」ヲ「三十四人」ニ改ム
 第三高等學校ノ部
 教授ノ下「三十五人」ヲ「三十八人」ニ改ム
 第五高等學校ノ部
 教授ノ下「四十四人」ヲ「四十五人」ニ助教ノ下「十八人」ヲ「十九人」ニ改ム
 東京工業學校ノ部
 助教ノ下「三十一人」ヲ「三十二人」ニ改ム
 東京盲啞學校ノ部
 書記ノ下「二人」ヲ「三人」ニ改ム
 東京工業學校ノ次ニ左ノ如ク加フ
 東京外國語學校
 校長 一人
 教授 十五人
 助教 八人
 書記 二人
 東京美術學校ノ次ニ左ノ如ク加フ
 東京音樂學校
 校長 一人

教授 五人
 助教 六人
 書記 二人

〔參照〕

明治二十六年八月二十日勅令第八十七號ハ文部省直轄諸學校職員定員ナリ

朕文部省直轄諸學校高等官等俸給令ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十三年四月四日

内閣總理大臣 侯爵 山縣有朋
文部大臣 伯爵 樺山資紀

勅令第百十九號 (官報 四月五日)

文部省直轄諸學校高等官等俸給令

第一條 文部省直轄諸學校校長ハ高等官二等以下六等以上トス

第二條 文部省直轄諸學校校長ハ高等官二等以下六等以上トス

第三條 文部省直轄諸學校教員(東京外國語學校東京音樂學校)ニシテ五箇年以上高等官二等ニ在リテ特ニ

功勞アル者ハ各校ニ人ヲ限リ高等官二等ニ陞授セラレルコトアルヘシ

第四條 文部省直轄諸學校ノ兼任舍監ハ高等官四等以下トシ兼任舍監ハ本官ノ官等ニ從フ

第四條 文部省直轄諸學校高等官ノ年俸ハ別表ニ依ル

第五條 文部省直轄諸學校教官ハ其ノ授業ノ時間及學科ノ難易輕重ニ依リ最低額以下ノ年俸ヲ給スルコトアルヘシ

第六條 文部省直轄諸學校教官ニシテ一校若ハ數校ノ教官ヲ兼任スル者ニハ本官並兼官ニ於ケル授業ノ時間及學科ノ難易輕重ニ應シ其ノ本官ノ俸額ヲ分割シテ各學校ヨリ支給スルコトヲ得

第七條 文部省直轄諸學校官制第十五條ニ依リ其學科ノ授業ヲ擔任スル囑託講師ニハ教官俸給額ノ内ヨリ相當ノ手當ヲ給スルコトヲ得

(別表)

文部省直轄諸學校校長	一級	二級	三級	四級	五級	六級	七級	八級	九級	十級	十一級	十二級
東京外國語學校校長	三千圓	二千五百圓	二千二百圓	二千圓	千八百圓							
東京音樂學校校長	二千五百圓	二千二百圓	二千圓	千八百圓								
東京盲啞學校校長	二千圓	千八百圓	千六百圓	千四百圓	千二百圓	千圓	九百圓					
文部省直轄諸學校教授	二千五百圓	二千二百圓	二千圓	千八百圓	千六百圓	千四百圓	千二百圓	千圓	九百圓	八百圓	七百圓	六百圓
文部省直轄諸學校教諭	二千二百圓	千圓	九百圓	八百圓	七百圓	六百圓	五百圓	四百圓				
文部省直轄諸學校舍監	千二百圓	千圓	九百圓	八百圓	七百圓	六百圓	五百圓	四百圓				

朕文武判任官等級表中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月四日

内閣總理大臣 侯爵 山縣有朋

勅令第二百二十號(官報 四月五日)

文武判任官等級表中高等師範學校女子高等師範學校東京盲啞學校訓導ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

高等師範學校助手	同	上同	同	上同	同	上同	同	上同
----------	---	----	---	----	---	----	---	----

朕公使館領事館費用條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月五日

外務大臣 子爵 青木周藏

勅令第二百二十一號(官報 四月六日)

公使館領事館費用條例中左ノ通改正ス

第五條 第一項ニ左ノ但書ヲ加フ

但シ領事館分館ノ主任ヲ命セラレタル者ニハ當該領事館事務代理ニ對スル在勤俸ノ額ヲ給ス

第六條 外交官及領事官ニシテ其ノ妻ヲ任所ニ同伴シ若ハ呼寄セタル者ニハ其ノ妻任所ニ到著ノ翌日ヨリ歐米 澳洲 印度及露領亞細亞ニ於テハ現ニ受クル在勤俸ノ十分ノ四亞細亞諸國ニ於テ

ハ十分ノ三ヲ増給ス

第七條 第二項ヲ左ノ如ク改メ第三項中「布哇」ヲ削ル
兼任國若ハ兼任地駐在中ハ到著ノ翌日ヨリ出發ノ前日マテ其ノ日數ニ應シ左ノ割合ニ依リ在勤

俸ヲ増給ス

	甲額	乙額
特命全權公使	五十圓	三十圓
辨理公使	四十圓	二十五圓
代理公使	三十圓	二十圓
公使館一等書記官		
總領事		
公使館二等書記官	二十五圓	十五圓
一等領事		
二等領事		
公使館三等書記官		
外交官補	二十圓	十二圓
領事官補		
外務書記生	十五圓	十圓

第八條第二項ヲ左ノ如ク改ム
 轉勤ヲ命セラレ又ハ轉官シタル者ニハ前任所出發ノ前日マテ從前ノ在勤俸ヲ給ス但シ轉官スル
 事同一ノ地ニ在勤ヲ命セラレタル者ニハ其ノ事務引繼ノ前日マテ從前ノ在勤俸ヲ給ス
 第九條中「又ハ其ノ滞留中ニ係ル日當」ヲ削ル
 第十條中「第四第五」ヲ「第二項第三項」ニ「一等領事及二等領事」ヲ「一等領事、二等領事及公使館二等書記官」ニ改ム

第十二條 加俸ハ本俸及在勤俸ノ外左ノ規定ニ依リ之ヲ給ス但シ歐、米、濠洲、印度及露領亞細亞
 リ亞細亞諸國へ轉勤、轉官シタルトキハ前後ノ在勤俸ヲ比較シ其ノ多キモノニ依リ之ヲ給シ轉
 官スルモ同一ノ地ニ在勤ヲ命セラレタル者ニハ本條末項ノ場合ヲ除ク外之ヲ給セス

官名	第一欄		第二欄		第三欄	
	新ニ本邦ヨリ赴任スルトキ	轉勤、轉官ノトキ	亞細亞諸國	歐、米、濠洲、印度、露領亞細亞	亞細亞諸國	歐、米、濠洲、印度、露領亞細亞
特命全權公使	在勤俸年額ノ百分ノ十六	在勤俸年額ノ百分ノ十二	在勤俸年額ノ百分ノ十六	在勤俸年額ノ百分ノ十六	在勤俸年額ノ百分ノ十六	在勤俸年額ノ百分ノ十六
辨理公使	同	同	同	同	同	同
代理公使	同	同	同	同	同	同
公使館一等書記官	同	同	同	同	同	同
總領事	同	同	同	同	同	同
公使館二等書記官	同	同	同	同	同	同
一等領事	同	同	同	同	同	同
二等領事	同	同	同	同	同	同
公使館三等書記官	在勤俸年額ノ百分ノ十八	在勤俸年額ノ百分ノ十三	在勤俸年額ノ百分ノ十八	在勤俸年額ノ百分ノ十八	在勤俸年額ノ百分ノ十八	在勤俸年額ノ百分ノ十八
外交官補	同	同	同	同	同	同
領事官補	同	同	同	同	同	同
外務書記生	在勤俸年額ノ百分ノ二十	在勤俸年額ノ百分ノ十五	在勤俸年額ノ百分ノ二十	在勤俸年額ノ百分ノ二十	在勤俸年額ノ百分ノ二十	在勤俸年額ノ百分ノ二十

前項ノ場合ニ於テ其ノ妻ヲ同伴スルトキハ更ニ前項ノ規定ニ從ヒ其ノ第三欄ノ額ヲ給ス其ノ妻ヲ呼寄スルトキ及歸朝セシムルトキ亦同シ但シ後段ノ場合ニ於テ同一ノ任地ニ係ルトキハ往返各一回ニ限ル

第八條第三項第十一條第三項ノ場合ニ於テ其ノ妻歸朝スルトキハ本條第一項ノ規定ニ從ヒ其ノ第三欄ノ額ヲ給ス

外國ニ於テ任命セラレタル者又ハ同一ノ任所ニ於テ判任官ヨリ奏任官ニ又ハ奏任官ヨリ勅任官ニ陞叙セラレタル者ニハ本條第一項ノ規定ニ從ヒ其ノ第三欄ノ額ヲ給ス

第十三條第二項中「第四、第五」ヲ「第二項、第三項」ニ改ム

第十九條第一項中「但本邦ヲ經由スヘキ順路ナルトキ」ハ本邦任所間ノ定額ニ依ルコトヲ得「ヲ」但シ經由順路中定額ニ依ルコトヲ得ル者ハ各其ノ定額ニ依ルニ改ム

第二十二條第二號中「第五」ヲ「第三項」ニ改ム

第二十四條 日當ハ別表第三號ノ豫定日數ニ應シ陸行中ハ左ノ定額ヲ給シ航行中ハ別ニ食料ヲ要スル場合ノ外其ノ十分ノ二箇半ヲ給ス但シ別表第三號ニ規定ナキモノハ實際ノ旅行日數ニ應シ之ヲ給シ往返一日ヲ出テサルトキハ之ヲ給セス

特命全權公使	米	歐洲	亞細亞諸國
辨理公使	二十八圓	二十五圓	十六圓
代理公使			
公使館一等書記官			
總領事			

公使館二等書記官	十八圓	十五圓	十圓
一等領事			
二等領事			
公使館三等書記官			
外交官	十四圓	十二圓	八圓
領事官			
領事官補			
外務書記生	十二圓	十圓	六圓

前項甲乙丙各地間ヲ往返スル場合ニ於テハ前項ノ規定ニ依リ其ノ多キニ從ヒ之ヲ給シ海陸兩路ニ跨リタル日ハ陸路定額ヲ給ス但シ本邦内ニ於ケル發着滯留ノ日ハ航行中ト看做ス

特別ノ命令又ハ已ヲ得サル事故ノ爲別表第三號ノ豫定日數ヲ超過シタルトキハ外務大臣ハ其ノ事情ニ因リ超過ノ日數ニ應シ本條第一項ノ定額以内ヲ給スルコトヲ得

第十條ニ記載セル外交官、領事官ニシテ其ノ妻ヲ同伴シ呼寄セ又ハ歸朝セシムルトキハ更ニ其ノ日當ノ三分ノ一ヲ給ス但シ其ノ妻ヲ呼寄セ又ハ歸朝セシムル場合ニ於テ日當ヲ給スルハ同一任地ニ付往返各一回ニ限ル

第二十五條 航行中船車料ヲ給セサル場合ニ於テハ前條ノ規定ニ從ヒ其ノ日當ノ十分ノ五ヲ給ス

第三十條 削除

附則

本令ハ明治三十二年五月一日ヨリ施行ス但シ本令施行以前ニ於テ支出シタル經費ハ支出當時ノ規定ニ依リ之ヲ整理スルコトヲ得

別表第一號左ノ通改ム

日定豫

メルボルン	シドニー	メルボルン	新嘉坡	盤谷	香港	厦門	沙市	漢口	杭州	蘇州	上海	芝罘	天津	北京	牛莊	浦潮	京城	仁川	元山	釜山
四四九五一	四一四八八	三三八四〇	一八二五七	二六三三三	二二一六八	一五一五七	二二二二二	二二二二二	二二二二二	二二二二二	二二二二二	二二二二二	二二二二二	二二二二二	二二二二二	二二二二二	二二二二二	二二二二二	二二二二二	二二二二二
五五五五五	五〇五〇五	四〇四〇四	三〇三〇三	二〇二〇二	一〇一〇一	〇〇〇〇〇	九〇九〇九	八〇八〇八	七〇七〇七	六〇六〇六	五〇五〇五	四〇四〇四	三〇三〇三	二〇二〇二	一〇一〇一	〇〇〇〇〇	九〇九〇九	八〇八〇八	七〇七〇七	六〇六〇六
...

別表第三號

東京

釜山

元山

仁川

京城

浦潮

牛莊

北京

天津

芝罘

海上

蘇州

杭州

漢口

沙市

厦門

香港

盤谷

新嘉坡

買孟

ルークスンワタ

ドシ

メルボルン

豫定日數表乙

東京	釜山	元山	仁川	京城	浦潮	牛莊	北京	天津	芝罘	海上	蘇州	杭州	漢口	沙市	厦門	香港	盤谷	新嘉坡	買孟	メルボルン
八	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
...

漢口	鎮南浦	木浦	シカゴ	牛莊	アンウエルス	シドニー	マニラ	重慶	福州	厦門	沙市	杭州	蘇州	鎮南浦	釜山	元山	仁川	京城	浦潮	牛莊	北京	天津	芝罘	海上	蘇州	杭州	漢口	沙市	厦門	香港	盤谷	新嘉坡	買孟	メルボルン
...

第十條 外交官及領事官ニシテ第六條及第十二條第四第五ノ支給ヲ受クヘキ者ハ特命全權公使、代理公使、代理公使、公使館一等書記官、總領事、公使館三等書記官、一等領事及二等領事ニ限ル

第十二條 加修ハ本條及在勤俸ノ外左ノ規程ニ依リテ給ス

- 一 新ニ本邦ヨリ赴任スルトキハ特命全權公使、代理公使、代理公使ハ其ノ赴任地ノ在勤俸年額十分ノ三其ノ他ノ外交官、領事官、公使館書記官、領事館書記官ハ十分ノ二
- 二 轉勤又ハ轉官ノ場合ニ於テハ其ノ赴任地ノ在勤俸年額十分ノ一但轉官スルモ同一ノ地ニ在勤ヲ命セラレタル者ハ此ノ限ニアラス
- 三 歸朝ヲ命セラレタル者又ハ賜暇歸朝ヲ許サレタル者ハ其ノ在勤俸年額十分ノ一但歸朝ヲ命セラレタル者赴任スルトキ亦同シ
- 四 本條第一第二第三ノ場合ニ於テ其ノ妻ヲ同伴スルトキハ更ニ在勤俸年額十分ノ一其ノ妻ヲ呼寄スルトキ及歸朝セシムルトキ亦同シ但後段ノ場合ニ於テ同一ノ任地ニ係ルトキハ往返各一回ヲ限ル
- 五 第八條第三項及第十一條第三項ノ場合ニ於テ其ノ妻歸朝スルトキハ從前ノ在勤俸年額十分ノ一

第十三條 在勤又ハ歸朝ヲ命セラレタル者ニシテ出發前在勤ヲ免セラレ又ハ歸朝ノ命令ヲ取消サレタルトキハ其ノ加修ノ半額以內ヲ給スルコトヲ得賜暇歸朝ヲ許サレタル者ニシテ出發前其ノ許可ヲ取消サレタルトキ亦同シ

前項ノ場合ニ於テ死亡シタルトキハ其ノ全額以內ヲ給スルコトヲ得第十二條第四第五ノ場合ニ於テ其ノ妻死亡シタルトキ亦同シ

第十九條 第三項 旅費ハ定額アルモノハ其ノ定額ニ依リテ其ノ他ノ場合ニハ總テ實費ヲ給ス但本邦ヲ經由スヘキ順路ナルトキハ本邦任所間ノ定額ニ依ルコトヲ得

第二十二條 外交官、領事官、公使館書記官及領事館書記官ノ妻ニ對スル船車料ヲ給スルハ左ノ場合ニ限ル

- 一 同伴セサルモ任地ニ往返スルトキ但第十二條第五ノ場合ヲ除クノ外同一ノ任地ニ係ルトキハ往返各一回限リトス
- 二 本邦任所間往返中ノ日當ハ別表第四號ニ依リ給ス但其他ノ場合ニ於テ又ハ別表第四號ニ規程ナキモノハ本條第三項ノ割合ニ依リ日當ヲ給ス
- 三 特別ノ命令又ハ已ムラ得ザル事故ヲ爲中途ニ滯留シ別表第四號ノ規定日數ヲ超過シタルトキハ其ノ滯留日數ニ對シ本條第三項ノ割合ニ依リ日當ヲ給ス
- 四 別表第四號ニ規程アルモノヲ除クノ外陸行中及出張地滯留中ノ日當ハ其ノ日數ニ應ジ左ノ割合ニ依リ給ス但往返一日ヲ得サルトキハ之ヲ給セス

特命全權公使 甲 額 乙 額

辦理公使 十圓 八圓

代理公使 八圓 六圓

公使館一等書記官 七圓 五圓

公使館二等書記官 一圓 〇圓

公使館三等書記官 〇圓 〇圓

外交官 六圓 四圓

領事官 五圓 三圓

公使館書記官 五圓 三圓

領事館書記官 三圓 〇圓

前項ノ日當ハ歐米、澳洲、布哇ニ於テハ甲額ヲ其ノ他ノ諸國ニ於テハ乙額ヲ給ス但甲額ヲ給スヘキ地ヨリ乙額ヲ給スヘキ地ニ及ハズ乙額ヲ給スヘキ地ヨリ甲額ヲ給スヘキ地ニ旅行シ又ハ其ノ旅行中滯留スルトキハ甲額ヲ給ス

第二十五條 別表第四號ニ規程アルモノヲ除クノ外航行中別ニ食料ヲ要セサル場合ニ於テハ前條日當ノ半額ヲ給ス

船費ヲ給セサル場合ニ於テハ十分ノ七ヲ給ス

第三十條 渡切經費及在勤滯留旅行中ニ係ル俸給及日當ハ歐米、(南洋羣島) 澳洲、布哇、印度、露領亞細亞ニ於テハ金貨其ノ他ノ諸國ニ於テハ銀貨ヲ以テ給ス

金貨ヲ以テ給スル地ヨリ銀貨ヲ以テ給スル地ニ旅行スルトキハ其ノ旅中ニ係ル本條及日當ハ銀貨ヲ以テ給ス銀貨ヲ以テ給スル地ヨリ金貨ヲ以テ給スル地ニ旅行スルトキ亦同シ

金貨ヲ以テ給スル地ヨリ銀貨ヲ以テ給スル地ニ出張スルトキハ其ノ旅中又滯留中ニ係ル本條及在勤俸ハ前項ノ規程ニ拘ラス金貨ヲ以テ給ス但第七條ニ規程シタル増額ハ此ノ限ニアラス

○

朕河川法第三十二條第二項ノ費用補助ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月五日

内務大臣侯爵西郷從道

勅令第百二十二號(官報四月六日)

- 第一條 河川ニ關スル工事ニ因リテ必要ヲ生シタル他ノ工事ニ對シ河川ニ關スル費用ノ内ヨリ補助ヲ爲スニハ左ノ條件ヲ具備スルコトヲ要ス
 - 一 河川法第十七條ニ記載スル工作物ノ新築改築若ハ除却ナルコト
 - 二 工事ノ必要ヲ生シタル程度ニ於ケル工費ニシテ其ノ管理者タル行政廳ノ直接ニ管轄スル公共團體又ハ管理者タル私人ノ資力ニ比シ大ナルコト
- 第二條 河川ニ關スル工事ニ因リテ必要ヲ生シタル他ノ工事ノ費用ニ對スル補助ハ其ノ工費ノ三分ノ二以內トス但シ他ノ工事ノ管理者ニシテ私人ナルトキ又ハ特別ノ事情アル場合ハ此ノ限ニアラス
- 第三條 此ノ勅令ノ規定ニ依リ國庫ヨリ工事ノ豫算費用ニ對シ補助シタル場合ニ於テハ工事費用精算ノ上豫算ヨリ減スルコトアルモ既ニ與ヘタル補助金ハ之ヲ還付セシメサルコトヲ得
- 第四條 河川ニ關スル工事ニ因リテ必要ヲ生シタル他ノ工事ニシテ其ノ管理者不明ナルトキハ河川ニ關スル費用ノ内ヨリ其ノ工費ノ全部ヲ支辨スルコトヲ得
- 第五條 府縣ニ於テ河川法第二十六條ニ依リ補助ヲ受ケタル場合ニ於テ此ノ勅令ノ規定ニ依リ補助又ハ支辨ヲ爲サントスルトキハ内務大臣ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス其ノ變更又ハ廢止ヲ爲サントスルトキ亦同シ

朕森林資金ノ收入支出ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月五日

大藏大臣伯爵松方正義

勅令第百二十三號(官報四月六日)

森林資金ノ收入支出ニ關シテハ會計規則ヲ適用ス

朕關稅定率法附屬輸入稅表中改正法律施行ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月五日

大藏大臣伯爵松方正義

勅令第百二十四號(官報四月六日)

明治三十二年法律第六十九號ヲ明治三十二年九月十八日ヨリ施行ス

朕陸軍騎兵實施學校學生臨時入校ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御願

明治三十二年四月五日

陸軍大臣子爵桂 太郎

勅令第三百二十五號(官報 四月六日)

陸軍騎兵實施學校馬術科學生ハ本年ニ限り定規外臨時入校セシムルコトヲ得

朕明治三十年勅令第三百七十六號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御願

明治三十二年四月五日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
農商務大臣 曾禰荒助

勅令第三百二十六號(官報 四月六日)

明治三十年勅令第三百七十六號中左ノ通改正ス

第三條 遠洋漁業獎勵法ニ依リ遠洋漁業獎勵金ヲ受クヘキ船舶乘組定員ハ左ノ如シ

汽船	總噸數	五 十 噸以上	乘組定員二十八名以下
		七 十 五 噸以上	同 三十名以下
		百 噸以上	同 三十二名以下
		百 五 十 噸以上	同 三十五名以下

帆船

總噸數	三十 噸以上	乘組定員二十名以下
	四 十 噸以上	同 二十三名以下
	六 十 噸以上	同 二十六名以下
	八 十 噸以上	同 二十八名以下
	百 噸以上	同 二十九名以下
	百 二 十 噸以上	同 三十名以下
	百 四 十 噸以上	同 三十一名以下
	百 六 十 噸以上	同 三十二名以下
	百 八 十 噸以上	同 三十四名以下
	二 百 噸以上	同 三十七名以下

〔參照〕

勅令第三百七十六號(明治三十年六月九日官報)抄錄
第三條 遠洋漁業獎勵法ニ依リ遠洋漁業獎勵金ヲ受クヘキ船舶乘組定員ハ左ノ如シ

汽船 登簿噸數 百噸以上 乘組定員 三十五名以下

同	二百噸以上	同	四十四名以下
同	二百五十噸以上	同	四十七名以下
同	三百噸以上	同	五十二名以下
同	三百五十噸以上	同	五十三名以下
〇	登積噸數	乘組定員	
同	六十噸以上	同	二十六名以下
同	八十噸以上	同	二十八名以下
同	百噸以上	同	二十九名以下
同	百四十噸以上	同	三十一名以下
同	百六十噸以上	同	三十二名以下
同	百八十噸以上	同	三十四名以下
同	二百噸以上	同	三十七名以下

朕高等官官等俸給令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月八日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋

勅令第二百二十七號(官報 四月十日)

高等官官等俸給令中左ノ通改正ス

第七條中「奏任文官」ヲ「高等文官」ニ「奏任官」ヲ「高等官」ニ改ム

第八條中「奏任官」ヲ「高等官」ニ改ム

第八條ノ次ニ左ノ一條ヲ加フ

第八條ノ二 親任式ヲ以テ敘任セラルル官ニ任セラルル場合ニ於テハ第七條及第八條ヲ文官任用

令第一條第四項ニ依リ勅任文官ニ任用セラルル場合ニ於テハ第七條ヲ適用セス

〔参照〕

勅令第九十六號高等官官等俸給令(明治二十五年十一月十四日官報)抄録

第七條 初メテ奏任文官ニ任セラル、者ノ官等ハ六等以下トス

奏任文官ヲ勅メ退官シタル者再ヒ奏任官ニ任セラル、場合ニ於テ其官等ハ前官ノ官等以下トス但前官ノ官等七等以下ナ

ルトキハ陸シテ六等官ニ至ルコトヲ得

第八條 奏任官ノ官等ハ別ニ進級ノ例ヲ定メタル者及七等以下ノ者ヲ除ク外在職滿二年ヲ踰ルニ非サレハ陸級スルコト

ヲ得ス

朕奏任ト爲スコトヲ得ル諸官ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月八日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋

大藏大臣伯爵松方正義

内務大臣侯爵西郷從道

陸軍大臣子爵桂 太郎

文部大臣伯爵樺山資紀

外務大臣子爵青木周藏

遞信大臣子爵芳川顯正

勅令第三百二十八號(官報四月十日)

左ノ諸官ハ奏任ト爲スコトヲ得此ノ場合ニ於ケル官等ハ高等官二等トス

一 内閣統計局長

一 印刷局長

一 各省局長

一 傳染病研究所長

一 造幣局長

一 專賣局長

一 知事

海軍大臣 山本權兵衛
司法大臣 清浦奎吾
農商務大臣 曾禰荒助

朕痘苗製造所ニ顧問ヲ置クノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月八日

内閣總理大臣 侯爵 山縣有朋
内務大臣 侯爵 西郷從道

勅令第三百二十九號(官報四月十日)

第一條 痘苗製造所ニ顧問一人ヲ置クコトヲ得

第二條 顧問ハ所務ニ關シ意見ヲ開陳ス

第三條 顧問ハ高等官ヲ以テ之ニ充ツ

第四條 顧問ハ内務大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス

第五條 顧問ニハ手當ヲ給セス

朕陸軍糧餉部條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月八日

陸軍大臣 子爵 桂 太郎

勅令第三百三十號(官報四月十日)

陸軍糧餉部條例中左ノ通改正ス

第一條 中軍隊ノ二字ヲ削ル

〔參照〕

勅令第三百三號陸軍糧餉部條例(明治二十五年十一月二十四日官報)抄錄

第一條 第一項

陸軍糧餉部ハ師團監督部所在地ニ之ヲ置キ陸軍出師準備用糧秣ノ調辦貯藏新陳交換並ニ平時軍隊所要糧秣ヲ調辦度支ノ事ヲ掌ル所トス但必要ニ依リ師團監督部所在地外ノ衛戍地ニ其支部ヲ置クコトヲ得

明治三十二年四月 勅令 第三百三十號

朕海軍砲術練習所條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月八日

海軍大臣山本權兵衛

勅令第三百三十一號(官報四月十日)

海軍砲術練習所條例中左ノ通改正ス

別表中^一三等水兵三十四ヲ^二三等水兵八十九ニ^三二等信號兵ニ^四三等信號兵ニ^五ヲ^六三等信號兵四ニ改ム

朕海軍水雷術練習所條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月八日

海軍大臣山本權兵衛

勅令第三百三十二號(官報四月十日)

海軍水雷術練習所條例中左ノ通改正ス

別表中^一三等水兵十五ヲ^二三等水兵四十五ニ^三二等信號兵一ヲ^四三等信號兵一ニ^五二等機關兵六ヲ^六三等機關兵十二ニ^七一等主廚二ヲ^八二等主廚二ヲ^九改メ小計百四十八ヲ^十百四十八ニ合計百六十七ヲ^{十一}百六十九ニ改ム

朕商法施行ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月八日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
司法大臣 清浦奎吾

勅令第三百二十三號(官報四月十日)

商法ハ明治三十二年八月十六日ヨリ之ヲ施行ス

朕不動産登記法施行ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月八日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
司法大臣 清浦奎吾

勅令第三百三十四號(官報四月十日)

不動産登記法ハ明治三十二年六月十六日ヨリ之ヲ施行ス

朕帝國大學高等官官等俸給令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月八日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
文部大臣伯爵樺山資紀

勅令第三百二十五號(官報四月十日)

帝國大學高等官等俸給令中左ノ通改正ス

第八條 講師ヲ囑託シテ講座ヲ擔任セシメ若ハ講座外ノ授業ヲ擔任セシムルトキハ教官俸給ヨリ其ノ手當ヲ給ス但シ講座擔任ノ場合ニ於ケル手當ハ其ノ講座ニ對スル職務俸額ヲ超ユルコトヲ得ス

第十條中教授ノ下ニ「若ハ助教」ヲ加フ

〔參照〕

勅令第二百二十二號帝國大學高等官等俸給令(明治三十年六月二十二日官報抄録)
第八條 講師ヲ囑託シテ講座ヲ擔任セシムルトキハ教官俸給額ノ内ヨリ其ノ講座ニ對スル職務俸以下ノ手當ヲ給ス
第十條 教授ニシテ一時他ノ公務ニ從事シ若ハ特ニ學術上ノ必要ニ由リ文部大臣ノ指揮ヲ承ケ一時講座ヲ擔任セス又ハ職務ヲ離ルル者ハ二箇年以内ヲ限リ仍本俸ヲ給スルコトヲ得

朕明治二十四年勅令第九十八號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月八日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋

勅令第三百三十六號(官報四月十日)

明治二十四年勅令第九十八號中「長官」ノ下「四千圓」ヲ「五千圓」ニ改ム

〔參照〕

明治二十四年七月二十日勅令第九十八號ハ行政裁判所長官評定官年俸ノ件ナリ

朕海港檢疫所官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月十二日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
内務大臣侯爵西鄉從道

勅令第三百二十七號(官報四月十三日)

海港檢疫所官制

第一條 海港檢疫所ハ内務大臣ノ管理ニ屬シ海港檢疫ニ關スル事務ヲ掌ル

第二條 海港檢疫所ノ名稱及位置左ノ如シ

- 横濱海港檢疫所 武藏國横濱
- 神戸海港檢疫所 攝津國和田岬
- 長崎海港檢疫所 肥前國女神
- 前項ノ外肥前國口ノ津ニ長崎海港檢疫所ノ支所ヲ置ク

第二條 各海港檢疫所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長 一人

海港檢疫官 專任一人 奏任

海港檢疫醫官 專任一人 奏任

海港檢疫官補 專任三人 判任

海港檢疫醫官補 專任二人 判任

海港檢疫所調劑手 專任一人 判任

海港檢疫所書記 專任二人 判任

海港檢疫所支所ニ左ノ職員ヲ置ク

支所長 一人

海港檢疫官補 專任一人 判任

海港檢疫醫官補 專任二人 判任

海港檢疫所書記 專任二人 判任

第四條 所長ハ海港檢疫官ノ中ヨリ内務大臣之ヲ補ス

所長ハ内務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所務ヲ掌理シ部下ヲ監督ス

支所長ハ海港檢疫官補ノ中ヨリ内務大臣之ヲ補ス

支所長ハ所長ノ命ヲ承ケ所務ヲ掌理シ部下ヲ監督ス

第五條 海港檢疫官ハ所長ノ命ヲ承ケ檢疫ヲ掌ル

第六條 海港檢疫醫官ハ所長ノ命ヲ承ケ醫務ヲ掌ル

第七條 海港檢疫官補ハ上官ノ指揮ヲ承ケ檢疫ニ従事ス

第八條 海港檢疫醫官補ハ上官ノ指揮ヲ承ケ醫務ニ従事ス

第九條 海港檢疫所調劑手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ調劑ニ従事ス

第十條 海港檢疫所書記ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

第十一條 内務大臣ハ臨時必要アリト認ムルトキハ檢疫又ハ醫務ニ従事セシムル爲檢疫費豫算定

額内ニ於テ海港檢疫所又ハ支所ニ檢疫員又ハ檢疫醫官ヲ置クコトヲ得

檢疫員及檢疫醫官ハ判任ノ待遇トス

朕海港檢疫官等俸給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月十二日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
内務大臣侯爵西鄉從道

勅令第三百三十八號(官報 四月十三日)

海港檢疫官ハ高等官四等以下七等以上トシ其ノ年俸ハ高等官官等俸給令中高等文官年俸第二號表ニ依ル

海港檢疫醫官ハ高等官四等以下七等以上トシ其ノ年俸ハ技術官俸給令ニ依ル

朕高等官官等俸給令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月十二日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋

勅令第三百二十九號(官報 四月十三日)

高等官官等俸給令中左ノ通改正ス

高等文官官等相當俸給表中監獄事務官ノ次ニ「海港檢疫官」ヲ加フ



朕海港檢疫官及海港檢疫官補任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月十二日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
内務大臣侯爵西郷從道

勅令第四百四十號(官報 四月十三日)

三箇年以上衛生事務ニ從事シ現ニ判任官四級俸以上ノ官職ニ在ル者ハ試験ヲ要セス文官高等試験委員ノ銓衡ヲ經テ海港檢疫官ニ任用スルコトヲ得

明治三十二年勅令第三百二十七號海港檢疫所官制施行五箇月前ヨリ檢疫所ニ於テ檢疫官又ハ雇員トシテ引續キ事務ヲ執リタル者ハ海港檢疫所官制施行ノ後三箇月間ニ限り文官普通試験委員ノ銓衡ヲ經テ海港檢疫官補ニ任用スルコトヲ得

シテ引續キ事務ヲ執リタル者ハ海港檢疫所官制施行ノ後三箇月間ニ限り文官普通試験委員ノ銓衡ヲ經テ海港檢疫官補ニ任用スルコトヲ得

朕文部省官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月十二日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
文部大臣伯耆權山資紀

勅令第四百四十一號(官報 四月十三日)

文部省官制中左ノ通改正ス

第九條第二項中「二人」ヲ「四人」ニ改メ第二項中「五人」ヲ「十人」ニ改ム

〔参照〕

勅令第二百七十九號文部省官制(明治三十一年十月二十二日)抄録

第九條 文部省ニ專任技師二人ヲ置ク建築ニ關スル事務ヲ掌ル

文部省ニ專任技師二人ヲ置ク技術ノ事務ヲ助ク



朕在外國公使館附陸海軍武官俸給令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月十三日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
陸軍大臣子爵桂 太郎
海軍大臣 山本權兵衛

勅令第四百四十二號(官報四月十四日)
在外國公使館附陸海軍武官俸給令中左ノ通改正ス
第四條中三百六十圓ヲ四百二十圓ニ改ム
在外國公使館附陸海軍武官在勤俸年額表ヲ如ク改ム
(別表)

在外國公使館附陸海軍武官在勤俸年額表		
官名	任所	俸給額
陸軍將官	英露米佛 獨 澳 伊 清 韓	八千百圓 七千七百圓 三千七百圓
陸海軍佐官		六千四百圓 五千九百圓 二千七百圓
海軍尉官		五千五百圓 五千百圓 二千四百圓

〔參照〕

勅令第二百十二號在外國公使館附陸海軍武官俸給令(明治二十六年十一月二十四日官報)抄錄
第四條 清國公使館附陸海軍武官ニシテ天津在勤ヲ命セラレタル者ニハ年額三百六十圓以內ヲ増給スルコトヲ得
(別表)

在外國公使館附陸海軍武官在勤俸年額表		
官名	任所	俸給額
陸軍將官	英露米佛 獨 澳 伊 清 朝 韓	五千六百圓 五千二百圓 二千三百圓 二千二百圓
陸海軍佐官		四千四百圓 四千 圓千七百圓 千六百圓
海軍尉官		四千 圓三千六百圓 千六百圓 千五百圓

朕水路部條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月十三日

海軍大臣山本權兵衛

勅令第四百四十三號(官報四月十四日)

水路部條例中左ノ通改正ス

別表ヲ左ノ如ク改ム

(別表)

水路部定員表			
部	科	長	員數
測 量 科	科 長	大 中 佐	一
	僚 長	中少佐、大 中 尉、水 路 監、水 路 正、水 路 技 士、技 師	十五
國 際 科	科 長	大 中 佐	一
	僚 長	大 中 尉、水 路 正、水 路 技 士、技 師	二
海 軍 部	科 長	大 中 佐	一
	僚 長	大 中 尉、水 路 正、水 路 技 士、技 師	二
備 註			十
編 修 備 註			三

主	幹	技	師	一	技	手	六
合計 十四人							
考備	本表定員ノ外必要ニ應シ他ヨリ兼務セシムルコトヲ得						

朕常設海軍軍法會議ニ海軍警査ヲ置クノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月十三日

海軍大臣山本權兵衛

勅令第四百四十五號(官報四月十四日)

- 第一條 常設海軍軍法會議ニ海軍警査ヲ置ク
海軍警査ハ判任官待遇トス
- 第二條 海軍警査ハ軍法會議及法廷ノ警衛、令狀ノ執行、書類ノ送達、被告人ノ護送及看守ニ任シ且主理ノ命ニ依リ犯罪搜索ニ從事ス
- 第三條 海軍警査其ノ職務ニ服スル時ハ制服ヲ著シ帶劔スヘシ但シ事急速ヲ要スルトキ又ハ主理ノ命アルトキハ此ノ限ニ非ス
- 第四條 海軍警査ノ定員ハ各軍法會議五人以内トス
- 第五條 海軍警査ノ俸給ハ別表ニ依ル

第六條 海軍警査採用ニ關スル規程ハ海軍大臣之ヲ定ム

(別表)

等級	一級	二級	三級	四級	五級	六級	七級
月俸	十五圓	十四圓	十三圓	十二圓	十一圓	十圓	九圓

但シ一級俸ヲ受ケ三年ヲ踰ニ事務練熟ナル者ハ漸次月俸二十圓迄増給スルコトヲ得

朕海軍監獄看守被服料給與令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月十三日

海軍大臣山本權兵衛

勅令第四百四十六號(官報四月十四日)

- 海軍監獄看守被服料給與令中左ノ通改正ス
- 海軍監獄看守被服料給與令ヲ「海軍監獄看守海軍警査被服料給與令」ニ改ム
- 第一條中海軍監獄看守ノ下ニ「及海軍警査」ヲ加ヘ「十八圓六十九錢」ヲ「二十五圓」ニ改ム
- 第二條中海軍監獄看守ノ下ニ「及海軍警査」ヲ加ヘ「五圓六十一錢」ヲ「十圓」ニ改ム
- 第三條中「海軍監獄看守」ヲ削リ「十五圓」ヲ「二十圓」ニ改ム

朕明治三十三年度歲出豫算中第三豫備金ヲ以テ補充シ得ヘキ費途ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セ

御名 御璽

明治三十三年四月十三日

大藏大臣 伯爵 松方正義

勅令第四百七十七號 (官報 四月十四日)

明治三十三年度歲出豫算中第一豫備金ヲ以テ補充シ得ヘキ費途ノ件ヲ定ム

- 退官 賜金
- 死 亡 賜金
- 死 傷 手 當
- 賠償 及 訴訟 訟 費
- 外務本省及在外公館電信料
- 裁 判 費
- 囚徒及在監人諸費
- 在外地所家屋公課
- 在 外國 難民貸與金
- 阿 片 費

- 官 吏 療 治 料
- 衛生試驗所印紙製造費
- 血清調製及配送費
- 痘苗調製及配送費
- 看守俸給及臺灣看守月手當
- 巡查看守守衛及警査給助
- 巡查及看守滿年賜金
- 看守被服及帶具費
- 褒賞恩賜及救助費
- 徵兵參事員手當
- 徵兵參事員及入營附添人旅費
- 徵兵檢丁及新兵旅費
- 難 破 船 費
- 刑事被告人犯罪人護送及留置諸費
- 北海道戸長一時賜金
- 海 員 取 扱 費
- 北海道沖繩縣及小笠原島傳染病豫防費
- 府縣傳染病豫防補助
- 小學校教員恩給補充費

警察費 運帶支辨金
 度量衡檢定出張旅費
 船舶檢渡費
 公債證書製造及在外公債取扱費
 仕拂命令及保管金引出切符用紙製造費
 文官 恩給
 軍人 恩給
 學校職員 恩給
 沖繩縣僧侶飯米代
 帝國議會議長副議長議員歲費及旅費
 貴族院及衆議院議案類印刷費
 從價稅品買上代
 不開港輸出物乘監旅費
 密輸出入申告者給與及違犯密告手當
 所得稅調查費
 國稅事務取扱市町村交付金
 國稅滯納及間接國稅犯則者處分費
 印紙類諸費
 葉煙草運搬及保管費

製造煙草輸出交付金
 臺灣國庫金遞送費
 貨幣交換差金
 諸拂戻及缺損補填金
 日本勸業銀行補助金
 埋米扶助米代及鹽茶料
 糧食品購買費
 軍馬飼養品費
 供養費
 臺灣匪徒鎮定費
 海軍遭難服裝手当
 海軍委託忠者費
 海軍志願兵家族扶助金
 海軍定期職工滿期賜金
 登記用紙及公告費
 司法裁判臨檢旅費
 執達吏補助費
 萬國測地學協會費

中央氣象臺委託電報料
 小學校教員年功加俸
 萬國度量衡會費
 官林被毒諸費
 蠶種檢査費補助
 萬國郵便電信聯約費
 郵便切手類費
 爲替貯金受拂費
 電信取扱手数料
 切手貯金拂込金
 船舶海員審判費
 船舶檢査審判臨檢旅費
 日本鐵道株式會社利益不足補給
 山陽鐵道株式會社補助
 九州鐵道株式會社補助
 航海獎勵費
 造船獎勵費
 臺灣製鹽買收費
 官報遞送費

○
 朕明治三十二年度ニ於ケル高等師範學校及高等商業學校ノ豫算執行ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月十三日

内閣總理大臣 侯爵 山縣有朋
 大藏大臣 伯爵 松方正義
 文部大臣 伯爵 樺山資紀

勅令第四百四十八號 (官報 四月十四日)
 文部大臣ハ明治三十二年度ニ於ケル高等師範學校ノ豫算ノ一部ヲ東京音樂學校長ニ高等商業學校ノ豫算ノ一部ヲ東京外國語學校長ニ命ジテ執行セシムヘシ

御名 御璽

明治三十二年四月十五日

陸軍大臣 子爵 桂 太郎

○
 朕臺灣陸軍補給廠條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

勅令第四百四十九號 (官報 四月十七日)
 臺灣陸軍補給廠條例中左ノ通改正ス

第一條中「輕便鐵道ノ事ヲ掌」ノ下ニ「リ兼テ戰時若ハ事變ニ際シ一般軍隊ノ輸送ニ要スル補助物件ヲ整備ス」ノ三十一字ヲ加フ

〔參照〕

勅令第二百四十六號臺灣陸軍補給廠條例(明治三十一年十月六日官報)抄錄
第一條 臺灣陸軍補給廠ハ陸軍大臣ノ監督ニ屬シ在臺灣陸軍ニ要スル軍需品(兵器彈藥軍醫藥材)ノ供給及内地臺灣間並臺灣海陸ノ運輸及輕便鐵道ノ事ヲ掌ル所トス

朕林野整理局官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月十七日

内閣總理大臣 侯爵 山縣有朋
農商務大臣 曾禰荒助

勅令第五百五十號(官報四月十八日)

林野整理局官制

第一條 林野整理局ハ農商務大臣ノ管理ニ屬シ國有林野ノ處分國有林ノ實測、施業案ノ編製、造林及森林買上ニ係ル特別經營ノ業務ヲ掌ル

各大林区署所在地ニ林野整理支局ヲ置キ林野整理局ノ業務ヲ分掌セシム

第二條 林野整理局ニ左ノ職員ヲ置ク

局長 勅任

書記官 奏任

監督官 奏任

支局長 奏任

監督官補 奏任

技師 奏任

屬 判任

技手 判任

支局長監督官補及技師ハ林野整理支局ニ屬及技手ハ林野整理局及支局ニ勤務セシム

第三條 局長ハ農商務省山林局長ヲシテ之ヲ兼ネシム農商務大臣ノ命ヲ承ケ局中一切ノ事務ヲ掌理ス

第四條 書記官ハ專任二人トス上官ノ命ヲ承ケ局中ノ事務ヲ掌ル

第五條 監督官ハ專任四人トス上官ノ命ヲ承ケ支局業務ノ監督事務及局中各課ノ事務ヲ分掌ス

第六條 支局長ハ支局所在地ノ大林區署長タル林務官ヲシテ之ヲ兼ネシム上官ノ命ヲ承ケ所管ノ事務ヲ掌理ス

第七條 監督官補ハ專任十六人トス林野整理業務ノ監督及支局中ノ庶務ヲ掌ル

第八條 技師ハ專任十六人トス

第九條 屬技手ハ通シテ專任二百十八人トス

屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第十條 林野整理支局ノ管轄區域ハ其ノ所在地大林區署ノ管轄區域ニ依ル

第十二條 農商務大臣ハ必要ナリト認ムル地ニ林野整理支局出張所ヲ置クコトヲ得

朕臨時林野下戻處分調査ニ關スル職員ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御 答 御 璽

明治三十二年四月十七日

内閣總理大臣 侯爵山縣有朋
農商務大臣 曾禰荒助

勅令第五百五十一號 (官報 四月十八日)

第一條 臨時林野下戻處分ノ調査ヲ爲サシムル爲農商務省ニ左ノ職員ヲ置キ山林局ニ屬セシム

山林局事務官 奏任

山林局技師

山林局鑑定官

山林局屬 判任

山林局技手

第二條 山林局事務官ハ專任三人山林局技師ハ專任二人山林局鑑定官ハ一人山林局屬及技手ハ通シテ五十四人ヲ以テ定員トス

第三條 山林局鑑定官ノ官等ハ高等官六等以下トシ其ノ年俸ハ八百圓以下トス

第四條 農商務大臣ハ事務ノ必要ニ依リ第一條ノ職員ヲ大林區署ニ勤務セシムルコトヲ得

朕高等官官等俸給令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御 答 御 璽

明治三十二年四月十七日

内閣總理大臣 侯爵山縣有朋

勅令第五百五十二號 (官報 四月十八日)

高等官官等俸給令中左ノ通改正ス

第九條中各省ノ部書記官ノ次ニ「林野整理局書記官」ヲ「帝國圖書館長」ノ次ニ「山林局事務官」林野整理局監督官ヲ「司稅官」ノ次ニ「林野整理局監督官補」ヲ加フ

文武高等官官等表中農商務省ノ部農商務書記官ノ次ニ等乃至八等ノ欄ニ左ノ四項ヲ加フ

林野整理局書記官	山林局事務官	林野整理局監督官	林野整理局監督官補
上	上	上	上
上	上	上	上
上	上	上	上

高等文官官等相當俸給表中「各省書記官」ノ次ニ「林野整理局書記官」ヲ「帝國圖書館長」ノ次ニ「山林局事務官」林野整理局監督官ヲ「司稅官」ノ次ニ「林野整理局監督官補」ヲ加フ

朕判事檢事官等俸給令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月十七日

内閣總理大臣 侯爵 山縣有朋
司法大臣 清浦奎吾

勅令第五百五十三號 (官報四月十八日)

刑事檢察官等俸給令

第一條 判事檢察官ノ官等ハ高等官一等乃至八等トシ其ノ年俸ハ別表ニ依ル

第二條 判事檢察官ノ各職ニ付人員ヲ定ムルコト左ノ如シ

大審院ハ院長一人部長三人判事二十五人ヲ以テ定員トス

大審院檢察局ハ檢察總長一人檢事七人ヲ以テ定員トス

控訴院ハ院長七人部長十五人判事八十五人ヲ以テ定員トス

控訴院檢察局ハ檢察總長一人檢事二十二二人ヲ以テ定員トス

地方裁判所ハ所長四十九人部長七十八人判事三百十五人ヲ以テ定員トス

區裁判所ハ判事六百七十四人ヲ以テ定員トス

區裁判所檢察局ハ檢事二百九十二人ヲ以テ定員トス

第三條 判事檢察官ノ各職ニ付其ノ俸給ヲ定ムルコト左ノ如シ

大審院 長 勅任一級俸

部長 勅任三級俸
判事 奏任二級俸乃至勅任四級俸

大審院檢察局 檢察總長 勅任二級俸
檢事 奏任二級俸乃至勅任三級俸

控訴院 長 東京 勅任二級俸
大阪 勅任二級俸
其ノ他 勅任三級俸

部長 東京 上席一人 奏任二級俸乃至勅任五級俸
大阪 上席一人 奏任二級俸乃至勅任五級俸
其ノ他 奏任四級俸乃至奏任一級俸

判事 奏任七級俸乃至奏任五級俸

控訴院檢察局 檢察長 東京 勅任三級俸又ハ勅任二級俸
大阪 勅任四級俸又ハ勅任三級俸
其ノ他 勅任四級俸又ハ勅任三級俸

檢事 東京 上席一人 奏任三級俸乃至勅任五級俸
大阪 上席一人 奏任三級俸乃至勅任五級俸
其ノ他 奏任七級俸乃至奏任一級俸

地方裁判所 長 東京 奏任一級俸乃至勅任四級俸
大阪 奏任一級俸乃至勅任四級俸
京都 奏任一級俸乃至勅任四級俸
神戶 奏任一級俸乃至勅任四級俸
新 奏任一級俸乃至勅任四級俸
沼津 奏任一級俸乃至勅任四級俸
仙臺 奏任一級俸乃至勅任四級俸
名古 奏任一級俸乃至勅任四級俸
屋敷 奏任一級俸乃至勅任四級俸
島田 奏任一級俸乃至勅任四級俸
熊本 奏任一級俸乃至勅任四級俸

部長

其ノ他奏任四級俸乃至奏任二級俸
奏任八級俸乃至奏任五級俸
奏任十一級俸乃至奏任九級俸

地方裁判所檢察局

檢察正

東京 奏任二級俸乃至奏任四級俸
大阪 奏任二級俸乃至奏任四級俸
京都 奏任二級俸乃至奏任四級俸
神戶 奏任二級俸乃至奏任四級俸
長崎 奏任二級俸乃至奏任四級俸
函館 奏任二級俸乃至奏任四級俸
新潟 奏任二級俸乃至奏任四級俸
青森 奏任二級俸乃至奏任四級俸
岩手 奏任二級俸乃至奏任四級俸
秋田 奏任二級俸乃至奏任四級俸
山形 奏任二級俸乃至奏任四級俸
宮城 奏任二級俸乃至奏任四級俸
福島 奏任二級俸乃至奏任四級俸
茨城 奏任二級俸乃至奏任四級俸
栃木 奏任二級俸乃至奏任四級俸
群馬 奏任二級俸乃至奏任四級俸
埼玉 奏任二級俸乃至奏任四級俸
千葉 奏任二級俸乃至奏任四級俸
東京 奏任二級俸乃至奏任四級俸
神奈川 奏任二級俸乃至奏任四級俸
新潟 奏任二級俸乃至奏任四級俸
富山 奏任二級俸乃至奏任四級俸
石川 奏任二級俸乃至奏任四級俸
福井 奏任二級俸乃至奏任四級俸
山梨 奏任二級俸乃至奏任四級俸
長野 奏任二級俸乃至奏任四級俸
岐阜 奏任二級俸乃至奏任四級俸
愛知 奏任二級俸乃至奏任四級俸
三重 奏任二級俸乃至奏任四級俸
滋賀 奏任二級俸乃至奏任四級俸
京都 奏任二級俸乃至奏任四級俸
大阪 奏任二級俸乃至奏任四級俸
兵庫 奏任二級俸乃至奏任四級俸
奈良 奏任二級俸乃至奏任四級俸
和歌山 奏任二級俸乃至奏任四級俸
鳥取 奏任二級俸乃至奏任四級俸
徳島 奏任二級俸乃至奏任四級俸
香川 奏任二級俸乃至奏任四級俸
高松 奏任二級俸乃至奏任四級俸
愛媛 奏任二級俸乃至奏任四級俸
高知 奏任二級俸乃至奏任四級俸
福岡 奏任二級俸乃至奏任四級俸
佐賀 奏任二級俸乃至奏任四級俸
長門 奏任二級俸乃至奏任四級俸
山口 奏任二級俸乃至奏任四級俸
熊本 奏任二級俸乃至奏任四級俸
大分 奏任二級俸乃至奏任四級俸
宮崎 奏任二級俸乃至奏任四級俸
鹿児島 奏任二級俸乃至奏任四級俸
沖縄 奏任二級俸乃至奏任四級俸

檢察

奏任十一級俸乃至奏任九級俸

區裁判所

奏任十一級俸乃至奏任九級俸

區裁判所檢察局

檢察

奏任十一級俸乃至奏任九級俸

第四條

地方裁判所判事及區裁判所判事ニシテ豫審掛ヲ命セラレタル者ハ百六十八ヲ限り奏任八級俸乃至奏任五級俸ヲ給スルコトヲ得

第五條

地方裁判所及區裁判所檢察ノ中百二十八ヲ限り奏任八級俸乃至奏任五級俸ヲ給スルコトヲ得

第六條

區裁判所判事ニシテ其ノ裁判所監督ヲ命セラレタル者ハ百二十人ヲ限り奏任八級俸乃至奏任五級俸ヲ給スルコトヲ得

第七條

豫備判事及豫備檢察ニハ年俸五百圓ヲ給ス

第八條 司法官試補ハ奏任ノ待遇トシ檢察代理ヲ命セラレタル者ニハ五百圓以内ノ年俸ヲ給ス

第九條 判事檢察各職ノ進級ハ拔擢ヲ以テ之ヲ行フ

第十條 判事檢察ノ裁判所内ニ於ケル席次ハ官等ニ依リ官等同シキ者ハ俸給ノ多寡ニ依リ俸給同シキ者ハ俸給下賜辭令ノ日附ニ依ル

附則

第十一條 本令施行ノ際別ニ辭令ヲ交付セサル者ハ現ニ受クル俸給額相當ノ俸給ヲ給セララルモ

ノトス

第十二條 明治二十七年四月十日 勅令第十七號判事檢察官等俸給令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

(別表)

判事檢察事俸級表

勅		任		奏		任	
一級	二級	三級	四級	五級	一級	二級	三級
五千圓	四千圓	三千五百圓	三千圓	二千五百圓	二千圓	一千八百圓	一千六百圓
一千四百圓	一千二百圓	一千圓	八百圓	七百圓	六百圓	五百圓	四百圓

朕警察監獄學校官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月十九日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
内務大臣侯爵西郷從道

勅令第五百五十四號(官報四月二十日)

警察監獄學校官制

第一條 警察監獄學校ニ左ノ職員ヲ置ク

- 校長 一人 勅任
 - 教授 專任五人 奏任
 - 幹事 專任一人 奏任
 - 書記 專任四人 判任
- 第二條 校長ハ内務次官ヲシテ之ヲ兼ネシメ内務大臣ノ指揮ヲ承ケ校中一切ノ事務ヲ統理ス
- 第三條 教授ハ校長ノ指揮ヲ承ケ教授ノ事ヲ掌ル
- 第四條 幹事ハ校長ノ指揮ヲ承ケ庶務會計及生徒監督ノ事ヲ掌ル
- 第五條 書記ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務會計ニ従事ス

朕警察監獄學校職員俸給令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月十九日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋

勅令第五百五十五號(官報四月二十日)

警察監獄學校職員俸給令

警察監獄學校教授及幹事ノ俸給ハ高等官官等俸給令中高等文官年俸第二號表ニ依ル但シ幹事ハ五級俸以下トス

朕文武高等官官等表中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月十九日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋

勅令第五百五十六號(官報四月二十日)

高等官官等俸給令中左ノ通改正ス

文武高等官官等表中内務省ノ部内務書記官ノ次三等乃至八等ノ欄ニ左ノ一項ヲ加フ

警察監獄學校教授 同 上 同 上 同 上 同 上

内務省ノ部集治監典獄ノ次五等乃至八等ノ欄ニ左ノ一項ヲ加フ

警察監獄學校幹事 同 上 同 上 同 上

朕文武判任官等級表中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月十九日

内閣總理大臣 侯爵山縣有朋

勅令第五百五十七號 (官報 四月二十日)

文武判任官等級表中左ノ通改正ス

集治監書記ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

警察監獄學校書記 警察監獄學校書記 警察監獄學校書記 警察監獄學校書記

朕警察監獄學校幹事特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月十九日

内閣總理大臣 侯爵山縣有朋
内務大臣 侯爵西郷從道

勅令第五百五十八號 (官報 四月二十日)

警察監獄學校幹事ハ三箇年以上警察又ハ監獄ノ事務ニ從事シ現ニ判任官四級俸以上ノ官職ニ在ル者ニ限リ當分ノ内試験ヲ要セス文官高等試験委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

朕議院建築調査會規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月二十一日

内閣總理大臣 侯爵山縣有朋

勅令第五百五十九號 (官報 四月二十二日)

議院建築調査會規則

- 第一條 議院建築調査會ハ内閣總理大臣ノ監督ニ屬シ議院ノ建築ニ關スル事項ヲ調査ス
- 第二條 議院建築調査會ハ會長副會長各一人委員十六人以内ヲ以テ之ヲ組織ス
前項定員ノ外臨時ノ須要ニ應ジ臨時委員若干人ヲ置クコトヲ得
- 第三條 會長副會長委員ハ高等文官帝國會議員其他建築ニ關シ學識經驗アル者ノ中ヨリ選定シ
内閣總理大臣ノ奏請ニ依リ之ヲ命ス
- 第四條 議院建築調査會ノ議事及會務整理ニ關スル規則ハ内閣總理大臣之ヲ定ム
- 第五條 會長ハ議事ヲ整理シ其決議ヲ内閣總理大臣ニ具申ス
- 第六條 副會長ハ委員ト同一ノ資格ヲ以テ議事ニ列シ會長事故アルトキハ其事務ヲ代理ス
- 第七條 議院建築調査會ニ幹事一人ヲ置ク
幹事ハ會長ノ指揮ヲ受ケ庶務ヲ整理ス
- 第八條 議院建築調査會ニ書記若干人ヲ置ク

書記ハ會長及幹事ノ指揮ヲ受ケ庶務ニ従事ス

第九條 書記ニハ一箇年二百圓以内ノ手當ヲ給スルコトヲ得

○ 朕災害土木費國庫補助規定ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十三年四月二十一日

大藏大臣 伯耆松方正義
内務大臣 侯爵西郷從道

勅令第六十號 (官報 四月二十二日)

災害土木費國庫補助規定

第一條 府縣ノ災害土木費ニシテ其ノ地租年額ノ十分ノ三ヲ超過スルトキハ國庫ハ其ノ超過額ノ地租額ニ等シキ額ニ達スル迄ハ十分ノ四以内地租額ヲ超過スルトキハ其ノ超過ノ部分ニ對シテハ十分ノ五以内ヲ補助スルコトヲ得

第二條 二箇年以上引續キ地租額以上ノ災害土木費ヲ要スル災害アリタル府縣ニ對シテハ前條補助ノ歩合ニ依リ算出シタル補助額ノ十分ノ三以内ヲ増加スルコトヲ得

第三條 前二條ノ地租額ハ其ノ年一月一日ニ於ケル土地臺帳面記載ノ地租額ニ依ル

第四條 災害土木費ノ範圍及計算方法並郡市町村其ノ他公共團體ノ災害土木費負擔ニ關スル方法等ハ内務大臣之ヲ定ム

○ 朕稅關官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十三年四月二十一日

内閣總理大臣 侯爵山縣有朋
大藏大臣 伯耆松方正義

勅令第六十一號 (官報 四月二十二日)

稅關官制

第一條 稅關ハ大藏大臣ノ管理ニ屬シ左ノ事務ヲ掌ル

一 關稅、噸稅及稅關諸收入ニ關スル事項

二 保税倉庫其ノ他ノ倉庫ニ關スル事項

三 船舶及貨物ノ取締ニ關スル事項

四 關稅法及噸稅法犯則者ノ處分ニ關スル事項

五 酒類造石稅醬油稅下戻及製造煙草輸出交付金ニ關スル事項

六 關稅通路ノ取締ニ關スル事項

第二條 左ノ六港ニ稅關ヲ置ク

武藏國橫濱

攝津國神戸

攝津國大阪
肥前國長崎
渡島國函館
越後國新潟

第三條 税関ニ税関長一人ヲ置ク奏任トス

滿三年以上高等官三等ニ在リテ功績顯著ナル者ハ高等官二等ニ陞叙スルコトヲ得

第四條 税関ヲ通シテ左ノ職員ヲ置ク

事務官 專任 奏任 八八

監視官 專任 奏任 四八

鑑定官 專任 奏任 十二八

事務官補 專任 判任 三百十二八

監視 專任 判任 七十七八

鑑定官補 專任 判任 百十七八

監吏 專任 判任 六百八十八

技手 專任 三十六八

第五條 税関長ハ大藏大臣ノ指揮ヲ承ケ税関ニ關スル一切ノ事務ヲ掌理ス

第六條 事務官ハ税関支署長タル者ノ外税関ニ分屬シ税関長ノ事務ヲ助ク

第七條 監視官ハ税関長ノ指揮ヲ承ケ關稅警察及犯則處分ニ關スル事務ヲ掌理ス

第八條 鑑定官ハ税関長ノ指揮ヲ承ケ貨物ノ検査鑑定ニ關スル事務ヲ掌理ス

第九條 事務官補ハ税関支署長タル者ノ外上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

第十條 監視ハ税関監視部長若ハ税関監視署長タル者ノ外上官ノ指揮ヲ承ケ關稅警察及犯則處分ニ關スル事務ニ従事ス

第十一條 鑑定官補ハ上官ノ指揮ヲ承ケ貨物ノ検査鑑定ニ従事ス

第十二條 監吏ハ税関監視署長タル者ノ外上官ノ指揮ヲ承ケ關稅警察及犯則處分ニ關スル事務ニ従事ス

第十三條 税関ニ税関監視部ヲ置ク

税関監視部ニ部長一人ヲ置キ監視官又ハ監視ヲ以テ之ニ充ツ

税関監視部長ハ税関長ノ指揮ヲ承ケ關稅警察及犯則處分ニ關スル事務ヲ掌理ス

第十四條 税関管轄區域内必要ナル場所ニ税関支署及税関監視署ヲ置クコトヲ得

税関監視署ノ位置ハ大藏大臣之ヲ定ム

第十五條 税関支署ニ支署長一人ヲ置ク事務官若ハ事務官補ヲ以テ之ニ充ツ

第十六條 税関監視署ニ署長一人ヲ置ク監視若ハ監吏ヲ以テ之ニ充ツ

第十七條 税関支署長ハ税関長ノ指揮ヲ承ケ其ノ管轄内ノ税関事務ヲ掌理ス

第十八條 税関監視署長ハ税関長ノ指揮ヲ承ケ關稅警察及犯則處分ニ關スル事務ヲ掌理ス

附 則

第十九條 本令ハ明治三十二年四月二十五日ヨリ施行ス

朕高等官等俸給令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月二十一日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋

勅令第六十二號(官報四月二十二日)

高等官官等俸給令中左ノ通改正ス

第九條第一項中左ノ如ク改ム

神戸税關長ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

大阪税關長 一級俸 二千五百圓
二級俸 二千圓

税關事務官ノ次ニ「税關監視官」ヲ加フ

同條第二項中神戸税關長ノ下ニ「大阪税關長」ヲ加フ

文武高等官官等表中大藏省ノ部税關事務官ノ次四等乃至八等ノ欄ニ左ノ一項ヲ加フ

税關監視官 同上 同上 同上 上

高等文官官等相當俸給表中税關事務官ノ次ニ「税關監視官」ヲ加フ

附則

本令ハ明治三十二年四月二十五日ヨリ施行ス

○

朕文武判任官等級表中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月二十一日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋

勅令第六十三號(官報四月二十二日)

文武判任官等級表中「税關監吏」ヲ「税關監視」ニ「税關監吏補」ヲ「税關監吏」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十二年四月二十五日ヨリ施行ス

○

朕税關監吏俸給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月二十一日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋

大藏大臣伯爵松方正義

勅令第六十四號(官報四月二十二日)

税關監吏ノ月俸ハ別表ニ依ル但シ一級俸ヲ受ケ事務練達ノ者ニハ漸次三十五圓迄ヲ給スルコトヲ

得

附則

本令ハ明治三十二年四月二十五日ヨリ施行ス

明治二十一年勅令第三百十四號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

(別表)

一級	三十圓	二級	二十五圓	三級	二十二圓	四級	二十圓
五級	十八圓	六級	十五圓	七級	十二圓	八級	十圓

〔参照〕

勅令第三百十四號(明治三十一年十月二十二日)抄録
税關監吏補ノ月俸ハ二十五圓以下九圓以上トス

朕明治二十三年勅令第二百十四號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月二十一日

大藏大臣 伯耆松方正義

勅令第六十五號(官報 四月二十二日)

明治二十三年勅令第二百十四號中左ノ通改正ス

「監吏」ヲ「監視」ニ「監吏補」ヲ「監吏」ニ改ム

服制表中 自月俸二十五圓 至月俸十五圓 自月俸十四圓 至月俸九圓 自一級俸 至四級俸 自五級俸 至八級俸 二改ム

附則

本令ハ明治三十二年四月二十五日ヨリ施行ス

〔参照〕

明治二十三年九月三十日勅令第二百十四號ハ税關監吏及監吏補服制ナリ

朕明治二十三年勅令第二百十八號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月二十一日

大藏大臣 伯耆松方正義

勅令第六十六號(官報 四月二十二日)

明治二十三年勅令第二百十八號中「監吏補」ヲ「監吏」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十二年四月二十五日ヨリ施行ス

〔参照〕

明治二十三年十月九日勅令第二百十八號ハ税關監吏補賞罰規則ナリ

朕稅關官制改正施行ノ際辭令書ヲ交付セサル監吏 監吏補ニ關スル件ヲ裁可シ 茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月二十一日

大藏大臣 伯爵松方正義

勅令第六十七號 (官報 四月二十二日)

明治三十二年勅令第六十一號施行ノ際監吏監吏補ニシテ別ニ辭令書ヲ交付セラレサルトキハ監吏ハ監視ニ監吏補ハ監吏ニ任セラレタルモノトス

朕明治二十三年勅令第二百四號中改正ノ件ヲ裁可シ 茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月二十一日

大藏大臣 伯爵松方正義

勅令第六十八號 (官報 四月二十二日)

明治二十三年勅令第二百四號中左ノ通改正ス

神戸稅關管轄區域中「周防長門」ヲ削リ「二十箇國」ヲ「十八箇國」ニ改ム

長崎稅關管轄區域中肥前ノ上ニ「周防長門」ヲ加ヘ「十二箇國」ヲ「十四箇國」ニ改ム
各稅關管轄區域中ノ沿岸ヲ削ル

附則
本令ハ明治三十二年四月二十五日ヨリ施行ス

朕稅關支署ノ名稱位置及管轄區域ノ件ヲ裁可シ 茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月二十一日

大藏大臣 伯爵松方正義

勅令第六十九號 (官報 四月二十二日)

稅關支署ノ名稱位置及管轄區域別表ノ通之ヲ定ム

附則

本令ハ明治三十二年四月二十五日ヨリ施行ス

明治二十六年勅令第三百二十九號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

(別表)

稅關支署名稱位置及管轄區域表			
名稱	位置	管轄區域	管轄區域
清水	駿河國清水	駿河國	遠江國
四日市	伊勢國四日市	三河國	尾張國 伊勢國 志摩國

伏木	越中國	越中國	越中國
七尾	能登國七尾	加賀國	能登國
敦賀	越前國敦賀	若狹國	越前國
室蘭	膽振國室蘭	日高國	膽振國
釧路	釧路國釧路	根室國	釧路國 十勝國 千島國
小樽	後志國小樽	後志國	石狩國 天鹽國 北見國
那覇	琉球國那覇	琉球國	
鹿兒	對馬國鹿兒	對馬國上縣郡	對馬國下縣郡
佐須奈	對馬國佐須奈	對馬國上縣郡	對馬國下縣郡
嚴原	對馬國嚴原	對馬國上縣郡	對馬國下縣郡
三角	肥後國三角	大隅國	薩摩國 肥後國 筑後國
口津	肥前國口津	肥前國南高來郡	北高來郡
唐津	肥前國唐津	肥前國東松浦郡	西松浦郡 北松浦郡 小城郡
博多	筑前國博多	筑前國	
門司	豐前國門司	周防國	長門國 豐前國 豐後國 日向國
宮津	丹後國宮津	因幡國	但馬國 丹後國
境	伯耆國境	出雲國	伯耆國
濱田	石見國濱田	石見國	

突 港 佐渡國 佐渡國

〔參照〕

明治二十六年十月三十日勅令第三百三十九號ハ稅關支署及監視署名稱位置ノ件ナリ

朕專賣局官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十三年四月二十一日

內閣總理大臣 侯爵 山縣有朋
大藏大臣 伯爵 松方正義

勅令第七十號 (官報 四月二十二日)

專賣局官制

第一條 專賣局ハ大藏大臣ノ管理ニ屬シ葉煙草ノ檢査、收納、輸入、保管、賣渡、營業免許及專賣取締ニ關スル事務ヲ掌ル

第二條 專賣局ハ之ヲ東京ニ置ク
各地方ニ專賣支局ヲ置キ專賣局ノ事務ヲ分掌セシム

第三條 專賣局ニ左ノ職員ヲ置ク

- 局長 一人 勅任
- 事務官 專任三十五人 奏任

明治三十三年四月 勅令 第七十號 專賣局官制

鑑定官 專任三人 奏任
 事務官補 專任二十四人 判任
 屬 專任千八百八十八人 判任
 鑑定官補 專任三百五十八人 判任
 監視 專任二百二十八人 判任
 技手 專任三人

第四條 局長ハ大藏大臣ノ指揮監督ヲ承ケ局中一切ノ事務ヲ掌理ス
 第五條 事務官及事務官補ハ局長ノ指揮ヲ承ケ局務ヲ分掌ス
 第六條 鑑定官ハ局長ノ指揮ヲ承ケ葉煙草ノ鑑定保存ニ關スル事務ヲ掌ル
 第七條 屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス
 第八條 鑑定官補ハ上官ノ指揮ヲ承ケ葉煙草ノ鑑定保存ニ從事ス
 第九條 監視ハ上官ノ指揮ヲ承ケ葉煙草專賣ノ取締ニ從事ス
 第十條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ工事ニ從事ス
 第十一條 各專賣支局ニ支局長一人ヲ置キ專賣局事務官又ハ事務官補ヲ以テ之ニ充ツ
 第十二條 專賣支局長ハ專賣局長ノ指揮ヲ承ケ支局一切ノ事務ヲ掌理ス
 第十三條 大藏大臣ハ必要ト認ムル地ニ專賣局出張所ヲ設クルコトヲ得
 第十四條 專賣支局ノ名稱位置ハ別表ニ依ル其ノ管轄區域ハ大藏大臣之ヲ定ム

附則

本令ハ明治三十二年五月一日ヨリ施行ス

明治三十年勅令第二百一十一號葉煙草專賣所官制ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス
 (別表)

專賣支局名稱位置			
名稱	位置	名稱	位置
吉井專賣支局	群馬縣多野郡吉井町	大迫專賣支局	巖手縣神宮郡大迫町
岩井專賣支局	茨城縣猿島郡岩井村	増田專賣支局	秋田縣平鹿郡増田町
水戸專賣支局	茨城縣水戸市大字上市	東根專賣支局	山形縣北村山郡東根町
大宮專賣支局	茨城縣那珂郡大宮町	小出專賣支局	新潟縣三島郡關原村
太田專賣支局	茨城縣久慈郡太田町	松本專賣支局	長野縣中頸城郡小出雲村
茂木專賣支局	栃木縣芳賀郡茂木町	飯野專賣支局	山梨縣中巨摩郡飯野村
烏山專賣支局	栃木縣那須郡烏山町	横濱專賣支局	神奈川縣横濱市花咲町十九丁目
馬頭專賣支局	栃木縣那須郡馬頭町	桑野專賣支局	神奈川縣中郡桑野町
大田原專賣支局	栃木縣那須郡大田原町	富士專賣支局	靜岡縣富士郡大宮町
須賀川專賣支局	福島縣岩瀬郡須賀川町	見付專賣支局	靜岡縣磐田郡見付町
三春專賣支局	福島縣田村郡三春町	名古屋專賣支局	愛知縣名古屋古澤町
若松專賣支局	福島縣若松市	山田專賣支局	三重縣度會郡宇治山田町
千厩專賣支局	巖手縣東磐井郡千厩村		

和歌山專賣支局	和歌山縣和歌山市大字湊通町北一丁目	三島專賣支局	愛媛縣宇摩郡三島村
高田專賣支局	奈良縣北葛城郡高田町	松山專賣支局	愛媛縣松山市大字出淵町一丁目
八日市專賣支局	滋賀縣神崎郡八日市町	後免專賣支局	高知縣長岡郡長岡村
勝山專賣支局	福井縣大野郡勝山町	志波專賣支局	福岡縣朝倉郡志波村
船來專賣支局	石川縣石川郡船來町	長崎專賣支局	長崎縣長崎市大黒町
大阪專賣支局	大阪府大阪市南區難波	熊本專賣支局	熊本縣飽託郡黒髮村
神戶專賣支局	兵庫縣神戸市兵庫南邊瀬川町	高森專賣支局	熊本縣阿蘇郡高森町
久世專賣支局	岡山縣大庭郡久世町	白杵專賣支局	熊本縣阿蘇郡高森町
高梁專賣支局	岡山縣上房郡高梁町	竹田專賣支局	大分縣北海部郡白杵町
府中專賣支局	廣島縣廣品郡府中町	高千穂專賣支局	大分縣直入郡豐岡村
三原專賣支局	廣島縣御調郡三原町	國分專賣支局	宮崎縣西臼杵郡高千穂村
米子專賣支局	鳥取縣西伯郡米子町	出水專賣支局	鹿兒島縣出水郡上出水村
真光專賣支局	德島縣美馬郡真光村	鹿兒島專賣支局	鹿兒島縣鹿兒島市長田町
池田專賣支局	德島縣三好郡池田村	鹿兒島專賣支局	鹿兒島縣肝煎郡垂水村
翠平專賣支局	香川縣仲多度郡翠平村	指宿專賣支局	鹿兒島縣指宿郡指宿村

朕高等官官等俸給令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十三年四月二十一日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋

勅令第七十一號 (官報 四月二十二日)

高等官官等俸給令中葉煙草專賣所長ヲ專賣局事務官ニ改ム

朕文武判任官等級表中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十三年四月二十一日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋

勅令第七十二號 (官報 四月二十二日)

文武判任官等級表中左ノ通改正ス

文武判任官等級表中二等葉煙草專賣所長ヲ專賣局事務官補ニ改メ一等乃至五等ノ欄「稅關監視」ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

專賣局監視	專賣局監視	專賣局監視	專賣局監視	專賣局監視
-------	-------	-------	-------	-------

朕明治三十一年勅令第三百十五號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月二十一日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
大藏大臣伯爵松方正義

勅令第三百七十三號 (官報 四月二十二日)

明治三十一年勅令第三百十五號中「葉煙草專賣所」ヲ「專賣局」及「專賣局監視」ニ改ム

〔參照〕

明治三十一年十一月二日勅令第三百十五號ハ「稅務局」及「葉煙草專賣所」ノ條給ニ關スル件ナリ

○

朕明治二十六年勅令第九十六號及明治三十年勅令第四百四十一號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月二十一日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
大藏大臣伯爵松方正義
內務大臣侯爵西鄉從道

勅令第三百七十四號 (官報 四月二十二日)

明治二十六年勅令第九十六號及明治三十年勅令第四百四十一號中「葉煙草專賣所」ヲ「專賣局」ニ

改ム

〔參照〕

明治二十六年十一月三日勅令第九十六號ハ「稅務局」及「葉煙草專賣所」ノ條給ニ關スル件ナリ
一號ハ「葉煙草專賣所」ニ於テ「臨時職員」使用ノ件ナリ

○

朕專賣局職員特別任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月二十一日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
大藏大臣伯爵松方正義

勅令第三百七十五號 (官報 四月二十二日)

專賣局職員特別任用令

第一條 滿三年以上官務ニ從事シ判任官四級俸以上ノ俸給ヲ受ケタル者又ハ「葉煙草」ニ關スル學識經驗アル者ニ限リ當分ノ内試験ヲ要セス文官高等試験委員ノ銓衡ヲ經テ專賣局事務官ニ任用スルコトヲ得

第二條 「葉煙草專賣所」屬「專賣局」屬「稅務局」屬「警部」屬「稅關監視」屬「稅關監吏」屬「稅關監吏補」ノ職ニ在ル者及在リタル者ハ專賣局監視ニ任用スルコトヲ得

第三條 「葉煙草專賣所」ノ雇ニシテ明治三十二年勅令第三百七十號專賣局官制施行ノ際專賣局ノ雇ト

才者ハ明治三十二年勅令第六十一號第六條ノ勤績者トスルコトヲ得但シ明治三十年勅令第七十九號第四條ニ依ル者ハ尙其ノ前勤績年數ヲ通算ス

附則

第四條 本令ハ明治三十二年五月一日ヨリ施行ス

明治三十年勅令第七十九號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

〔參照〕

明治三十年勅令第七十九號ハ葉煙草專賣所職員ノ任用ニ關スル件同三十二年三月二十勅令第六十一號文官任用令第六條ハ滿五年以上職員トシテ同一官廳ニ勤続シタル者ハ文官普通試験委員ノ銜ヲ經テ直ニ其官廳ノ判任文官ニ任用スルコトヲ得ルノ件ナリ



朕明治三十二年勅令第七十號專賣局官制施行ノ際ニ於ケル葉煙草專賣所屬及葉煙草專賣所技手ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月二十一日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
大藏大臣伯爵松方正義

勅令第七十六號(官報四月二十二日)

明治三十二年勅令第七十號專賣局官制施行ノ際在職ノ葉煙草專賣所屬及葉煙草專賣所技手ニテ別ニ辭令書ヲ交付セラレサルトキハ葉煙草專賣所屬ハ專賣局屬ニ葉煙草專賣所技手ハ專賣局屬

定官補ニ任セラレタルモノトス



朕明治三十年勅令第七十八號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月二十一日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
大藏大臣伯爵松方正義

勅令第七十七號(官報四月二十二日)

明治三十年勅令第七十八號中左ノ通改正ス

第一條中葉煙草專賣所ヲ「專賣局」ニ改メ各葉煙草專賣所ヲ通シテ「削ル

第二條中又ハ「下」之ト同等以上ノ學科ヲ修メタル者若ハ「ヲ加フ

第三條中葉煙草專賣所ノ技手ヲ「專賣局鑑定官補」ニ改メ

〔參照〕

勅令第七十八號(明治三十年六月十日官報)抄録

第一條 葉煙草ノ鑑定保存ヲ練習セシムル爲メ葉煙草專賣所ニ見習員ヲ置クコトヲ得

見習員ノ數ハ各葉煙草專賣所ヲ通シテ百人ヲ超ユルコトヲ得ス

第二條 見習員ハ高等小學校ヲ卒業シ若ハ尋常中學校二年以上ノ課程ヲ修メタル者又ハ相當ノ教育ヲ受ケ葉煙草ノ取扱ニ經驗アル者ヲ以テ之ニ充ツ

第三條 二箇年以上見習員トシテ葉煙草ノ鑑定保存ニ從事シタル者ハ文官普通試験委員ノ銜ヲ經テ葉煙草專賣所ノ技手ニ任用スルコトヲ得

朕明治三十年勅令第七十六號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月二十一日

内閣總理大臣 侯爵 山縣有朋
海軍大臣 山本權兵衛

勅令第七十八號(官報 四月二十二日)

明治三十年勅令第七十六號中「在リタル者」ノ下ニ「又ハ裁判所構成法施行ノ後滿三年以上判事檢事ノ職ニ在ル者及在リタル者」ヲ加フ

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

〔參照〕

勅令第七十六號(明治三十年四月十日官報)
司法官試補タルノ資格ヲ有シ判事檢事及他ノ高等文官ノ職ニ在ル者及在リタル者ハ本令施行後三年間ハ直ニ主理ニ任用スルコトヲ得

朕林野整理審査會規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月二十一日

内閣總理大臣 侯爵 山縣有朋
農商務大臣 曾禰荒助

勅令第七十九號(官報 四月二十二日)

林野整理審査會規則

第一條 林野整理審査會ハ農商務大臣ノ監督ニ屬シ國有林野ノ特別經營ニ關スル重要ノ事項ニ就

キ農商務大臣ノ諮詢ニ應シ意見ヲ開申ス

第二條 林野整理審査會ハ會長一人委員十一人ヲ以テ組織ス

委員ハ農商務省高等官四人、内務省高等官二人、陸軍省、海軍省、大藏省、文部省及遞信省高等官各

一人ヲ以テ之ニ充ツ

第三條 臨時必要ノ場合ニ於テハ前條定員ノ外五人以内ノ臨時委員ヲ命スルコトヲ得

第四條 會長ハ勅任官ヲ以テ之ニ充ツ

會長委員及臨時委員ハ農商務大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス

第五條 會長ハ議事規則ニ依リ議事ヲ整理シ會議ノ決議ヲ農商務大臣ニ具申ス

第六條 會長事故アルトキハ委員中上席ノ高等官ヲシテ其ノ事務ヲ代理セシム

第七條 林野整理審査會ニ幹事二人ヲ置キ農商務省高等官ヲ以テ之ニ充ツ

幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第八條 林野整理審査會ニ書記ヲ置ク會長及幹事ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

書記ハ林野整理局判任官ヲ以テ之ニ充ツ

第九條 林野整理審査會ノ議事及會務整理ニ關スル規則ハ農商務大臣之ヲ定ム

○ 朕領事官ノ在外各地郵便電信局長、郵便局長兼任ニ關スル件ヲ裁可シ、茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月二十一日

内閣總理大臣 侯爵 山縣有朋
遞信大臣 子爵 芳川顯正

勅令第百八十號 (官報 四月二十二日)

在外各地ノ郵便電信局長、郵便局長ハ特別ノ規程ニ依リ任用セラレタル領事官ヲシテ之ヲ兼任セシムルコトヲ得

領事官ヨリ兼任セシメタル在外各地ノ郵便電信局長、郵便局長ノ官等ハ其ノ本官ノ官等ニ依ル

○ 朕明治三十年勅令第三百九十號中改正ノ件ヲ裁可シ、茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月二十二日

文部大臣 伯爵 樺山資紀
海軍大臣 山本權兵衛

勅令第百八十一號 (官報 四月二十四日)

明治三十年勅令第三百九十號中左ノ通改正ス

「海軍軍醫學生、藥劑學生、造船學生、造兵學生條例」ヲ「海軍軍醫學生、藥劑學生、造船學生、造兵學生、主計學生條例」ニ改ム

第一條 中「藥劑官」ノ下ニ「主計官」ヲ「醫科大學」ノ下ニ「及京都帝國大學醫科大學」ヲ「理工科大學」ノ下ニ「主計學生ハ高等商業學校」ニ「ヲ加フ

第二條 中「理工科大學學生」ヨリ「ノ下ニ「主計學生ハ高等商業學校生徒」ヨリ「ヲ加フ

第三條 中「第四年生」ニ在テハ「二十八年未滿トシ」ノ下ニ「主計學生ニ採用スヘキ者ノ年齢ハ滿十七年以上二十七年未滿トシ」ヲ加フ

〔參照〕

- 勅令第三百九十號海軍軍醫學生、藥劑學生、造船學生、造兵學生條例 (明治三十年十一月一日官報) 抄録
- 第一條 海軍軍醫官、藥劑官、造船官、造兵官ト爲ルヘキ學生ヲ置キ、軍醫學生、藥劑學生ハ東京帝國大學醫科大學ニ、造船學生、造兵學生ハ東京帝國大學理工科大學ニ於テ各其ノ專門ノ學科ヲ修メシム
- 第二條 軍醫學生、藥劑學生ハ醫科大學學生ヨリ、造船學生、造兵學生ハ理工科大學又ハ理工科大學學生ヨリ、海軍出身志願ノ者ニ就キ、身體検査ヲ爲シ合格シタル者ヲ選拔シ、所要ノ人員ヲ採用ス
- 第三條 軍醫學生ニ採用スヘキ者ノ年齢ハ滿十九年以上ニシテ、醫科大學第一年生ニ在テハ二十五年未滿、第二年生ニ在テハ二十六年未滿、第三年生ニ在テハ二十七年未滿、第四年生ニ在テハ二十八年未滿トシ、其ノ他ノ學生ニ採用スヘキ者ノ年齢ハ滿十九年以上二十七年未滿トス

○ 朕敕郡ニ郡長一人ヲ置クコトヲ廢止スルノ件ヲ裁可シ、茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月 勅令 第百八十二號

明治三十二年四月二十四日

内務大臣 侯爵西郷從道

勅令第八十二號 (官報 四月二十五日)

廣島縣管下 廣品郡 神石郡 甲奴郡ノ三郡ニ郡長一人ヲ置クコトヲ廢止ス

附則

本令ハ明治三十二年五月一日ヨリ施行ス

朕臨時沖繩縣土地整理事務局書記任用及俸給ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月二十四日

内閣總理大臣 侯爵山縣有朋

大藏大臣 伯爵松方正義

内務大臣 侯爵西郷從道

勅令第八十三號 (官報 四月二十五日)

第一條 明治二十六年勅令第八十三號文官任用令第五條同年勅令第八十五號同年勅令第九十六號明治二十九年勅令第三百四十五號明治三十年勅令第七十九號明治三十二年勅令第六十一號文官任用令第六條ニ依リ任用セラレ現ニ判任官タル者ハ試験ヲ要セス臨時沖繩縣土地整理事務局書記ニ任用スルコトヲ得

第二條 臨時沖繩縣土地整理事務局書記ニハ判任官俸給令中別表ニ掲クル最低額未滿ノ月俸ヲ支給スルコトヲ得

第三條 前條ノ最低額未滿ノ月俸ヲ支給スル者ハ試験ヲ要セス文官普通試験委員ノ銓衡ヲ經テ之ヲ任用スルコトヲ得

第四條 前項ニ依リ任用シタル書記ニシテ滿一年以上勤續シ現ニ其ノ職ニ在ル者ハ月俸十五圓以上ノ書記ニ任用スルコトヲ得

第五條 朕海軍高等武官補充條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月二十四日

海軍大臣 山本權兵衛

勅令第八十四號 (官報 四月二十五日)

海軍高等武官補充條例中左ノ通改正ス

第七條 海軍少主計候補生ハ官立公立中學校若ハ之ト同等以上ト認ムル學校ヲ卒業シ且法律學及經濟學ヲ修メタル者ニシテ身體檢査及採用試験ニ合格シタル者ヨリ採用ス

第十四條 第二項ヲ左ノ如ク改ム

候補名簿ノ順序ハ左ノ規定ニ依ル

一 海軍兵學校及海軍機關學校ヲ卒業シタル者ニ關シテハ卒業試験ノ得點ニ實務練習ノ得點ヲ加ヘタル點數ニ依ル

二 少軍醫候補生ニ關シテハ採用試験ノ得點ニ海軍軍醫學校卒業試験ノ得點ヲ加ヘタル點數ニ依ル

三 少藥劑士候補生及少主計候補生ニ關シテハ採用試験ノ得點數ニ實務練習ノ得點ヲ加ヘタル點數ニ依ル

第十六條第一項第一及第二ヲ左ノ如ク改ム

一 私費ヲ以テ外國ニ留學シ相當ノ學術ヲ修メタル者ニシテ採用試験ニ合格シタル者但シ適當ノ卒業證書ヲ得タル者ハ試験ヲ用井ス採用スルコトヲ得

二 高等商業學校ヲ卒業シタル者

第十六條ノ次ニ左ノ一條ヲ加フ

第十六條ノ二 左ノ資格ノ一ヲ有スル者ハ海軍中軍醫中藥劑士中主計造船中技士若ハ造兵中技士ニ任用スルコトヲ得

一 帝國大學元東京大學元工部大學校ニ於テ海軍高等武官タルニ必要ナル學術ヲ修メ卒業シタル者

二 私費ヲ以テ外國ニ留學シ相當ノ學術ヲ修メタル者ニシテ試験ノ上帝國大學ノ課程ヲ卒リタル者ト同等以上ノ學力ヲ有スト認ムル者但シ適當ノ卒業證書ヲ有スル者ハ採用委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

第十八條 第十六條ノ二第一第二ノ資格ヲ有シ相當ノ實歴アル者ハ採用委員ノ銓衡ヲ經テ大尉相當ニ任用スルコトヲ得

當官ニ任用スルコトヲ得

第十八條ノ次ニ左ノ一條ヲ加フ

第十八條ノ二 第十六條第一項第一第十六條ノ二及第十八條ニ依リ任用セラルヘキ軍醫官ハ醫術開業免狀ヲ藥劑官ハ藥劑師免狀ヲ有スルコトヲ要ス

附則

本令施行ノ際第十六條ノ二ノ資格ヲ有シ少尉相當官タル者ハ海軍高等武官進級條例ノ規定ニ拘ラス直ニ中尉相當官ニ進級セシムルコトヲ得

〔參照〕

勅令第三百十四號海軍高等武官補充條例(明治三十年九月十七日官報)抄録

第七條 海軍少主計候補生ハ官立公立常備中學校ヲ卒業シ若ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有シ且法律及經濟學ヲ教授スル學校ニ於テ三年以上ノ課程ヲ修ヘタル者ニシテ身體検査及採用試験ニ合格シタル者ヨリ採用ス

第十四條第二項

候補名簿ノ順序ハ海軍兵學校及海軍機關學校卒業ノ者ニ在テハ卒業試験ノ得點ニ實務練習中ノ得點ヲ加ヘタル點數ニ依リ其ノ他ノ候補生ニ在テハ席次ニ依ル

第十六條 海軍少尉少機關士ハ各其ノ候補生ヨリ又他ノ少尉相當官ハ各其ノ候補生及左ノ資格ノ一ヲ有スル者ヨリ任用ス

但シ兵曹長及其ノ相當官ノ任用ハ第四章ニ依ル

一 私費ヲ以テ外國ニ留學シ相當ノ學術ヲ修メ卒業シタル海軍出身志願者ニシテ採用試験ニ合格シタル者但シ適當ノ卒業證書ヲ得タル者ニ在テハ試験ヲ用井ス採用スルコトヲ得

二 帝國大學元東京大學元工部大學校ニ於テ海軍高等武官タルニ必要ナル學術ヲ修メ卒業シタル者(下略)

第十八條 第十六條第一乃至第三ノ資格ノ一ヲ有シ相當ノ實歴アル者ハ採用委員ノ銓衡ヲ經テ大尉相當官若ハ中尉相當官ニ任用スルコトヲ得

明治三十二年四月 勅令 第百八十五號

三三六

朕清國及韓國在勸警部巡查任用及支給規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十二年四月二十六日

内閣總理大臣侯爵山縣有朋
外務大臣子爵青木周藏

勅令第百八十五號(官報四月二十七日)

清國及韓國在勸警部巡查任用及支給規則中左ノ通改正ス

「清國及韓國」ヲ「外國」ニ改ム

第三條中同「ヲ」其ノ「ニ」改ム

第八條中「八圓」ヲ「九圓」ニ改ム

第九條第一項中「貳拾圓乃至四拾圓」ヲ「七十五圓以內」ニ「拾三圓乃至拾八圓」ヲ「二十五圓以內」ニ改ム

第九條ノ二中「三拾圓以內」ヲ「六十圓以內」ニ「拾圓以內」ヲ「二十圓以內」ニ改ム

第十一條第一中「百圓以內」ヲ「百五十圓以內」ニ「第三中三圓」ヲ「五圓」ニ「壹圓八拾錢」ヲ「二圓」ニ「其半額」ヲ「警部ニハ其ノ十分ノ三巡查ニハ其ノ十分ノ五」ニ改ム

第十二條ノ次ニ左ノ一條ヲ加ヘ以下順次繰下ク

第十三條 外國在勸警部外國在勸中又ハ任所往返中死亡シタルトキハ死亡賜金ノ外在勸手當三箇月分ヲ其ノ遺族ニ給ス

附則

本令ハ明治三十二年五月一日ヨリ施行ス

別表左ノ如ク改ム

(別表)

東京	釜山	木浦	元山	仁川	鎮南浦	京城	牛莊	北京	天津	芝罘	上海	蘇州	杭州	漢口	沙市	重慶	慶慶	厦門	香港	盤谷
一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇	一、五〇〇〇〇 一、五〇〇〇〇 一、五〇〇〇〇	一、一〇〇〇〇 一、一〇〇〇〇 一、一〇〇〇〇	一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇	一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇	一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇	一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇	一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇	一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇	一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇	一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇	一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇	一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇	一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇	一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇	一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇	一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇	一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇	一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇	一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇	一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇 一、八〇〇〇〇
巡警部	巡警部	巡警部	巡警部	巡警部	巡警部	巡警部	巡警部	巡警部	巡警部	巡警部	巡警部	巡警部	巡警部	巡警部	巡警部	巡警部	巡警部	巡警部	巡警部	巡警部

明治三十二年四月 勅令 第百八十五號

三三七